

モートンイトトンボ *Mortonagrion selenion* (Ris)

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は66%、
現存数は10.5であり、準絶滅危
惧に相当する。



♂. 三好町黒笹, 1992年6月14日, 安藤 尚 撮影

【形態】

小型のイトトンボで、♂は黄
緑色の体色で黒斑がある。♀は
未熟な間は鮮やかなオレンジ色
であるが、成熟すると緑色に変
わり、腹部背面に黒条が現れる。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張～三河の平地から山地にかけての 31
市町村で記録されている。

【国内の分布】

北海道南部から九州南部にかけて記録され
ている。

【世界の分布】

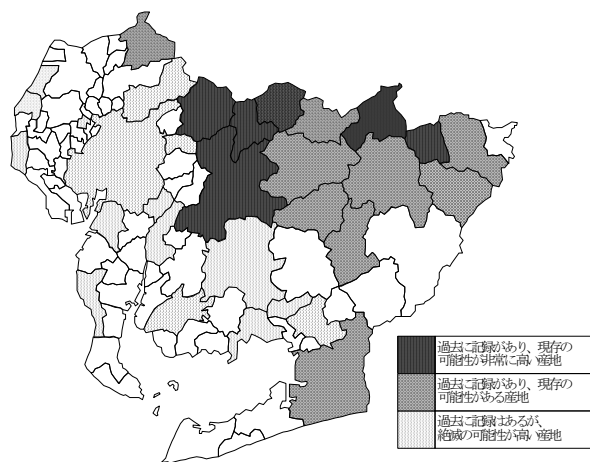
朝鮮半島、中国、ロシアに分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

成熟成虫は、湿原や休耕田など低い植生のある浅くて開放的な水域で見られる。未熟成虫は、水域からほとんど移動しないようで、成熟成虫と入り混じって見られることが多い。幼虫は、成虫の見られる水域で植物などにかまっているのが観察される。

成虫は6月頃から羽化し、成熟成虫は7月頃まで見られる。年1化である。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

かつては県下の平野から山間にかけて広く分布していたが、平野の産地はほぼ消滅し、確実に現存するのは丘陵から山間を中心とした一部の地域だけになった。三河地方山間部の調査は最近あまり行われておらず、詳しい生息状況が把握できていない。

本種の好む浅くて開放的な湿地は、特に人口密度の高い平野部周辺では埋め立てられることが多い上、近年顕著な夏の猛暑により湿地が干上がることも影響し、絶滅しているものと考えられる。東海市では2016年に新産地が発見されたが、2018年初めに埋め立てられ、絶滅した。

【保全上の留意点】

- 1) 幼虫の生息地である湿原や休耕田の保存
- 2) 成虫の活動の場となる生息地周辺の草地の維持

【特記事項】

和名はイギリスのトンボ研究者ケネス・モートン氏に由来する。

(吉田雅澄)

ネアカヨシヤンマ *Aeschnophlebia anisoptera* Selys

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は38%、現存数は13であり、準絶滅危惧に相当する。

【形態】

アオヤンマに類似した黒みの強い大型のヤンマである。ハネの基部に橙色斑があり、またヨシ原に生息することと併せて「根赤+葦」と名付けられた。



♂. 長久手町三ヶ峯, 2008年6月17日, 大野 徹 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張～三河の平地から丘陵地にかけての21市町村で記録されている。

【国内の分布】

本州中部から九州中部にかけて分布し、対馬等の離島でも記録されている。

【世界の分布】

中国に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

成熟成虫は、谷戸や湿地上を黄昏飛翔（早朝または夕方に飛翔）するのが見られる。未熟成虫は、晴れた午前中に開けた谷間や林縁などの高所で摂食飛翔するのを他県で観察している。幼虫は、林縁にある小池や湿地などの浅い水たまりの植物につかまっている。

成虫は6月頃より羽化し、成熟成虫は7～8月を中心に生殖行動を行なう。1年1化である。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在は、主に尾張東部から西三河にかけての平野から丘陵地を中心に、広く薄く現存する。都市近郊でもいくつかの新産地が発見されているのが特徴的である。そのうちの一箇所は弥富市の緑地で、以前から定着していたとは考えにくく、どこかから飛来した個体が同所で一時的に発生した可能性が高い。2019年に発見された設楽町（旧津具村）の産地は標高600m超の山間部にあり、従来産地と30km以上隔離された分布を示す。

本種は大きな池沼に生息することはあまりなく、時には干上がってしまうような浅い小さな池や湿地を好む傾向にある。それらは丘陵地の林縁にあることが多いので、都市近郊では、そのような目立たない水域は造成により埋め立てられやすく、大きな絶滅要因となっている。

【保全上の留意点】

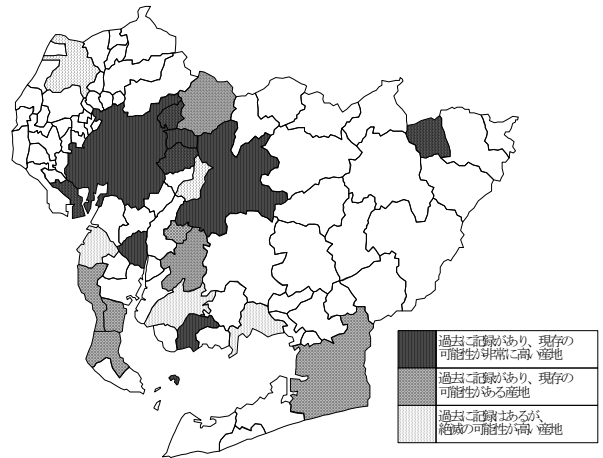
- 1) 幼虫の生息域である林縁の小池・湿地の保全
- 2) 成虫の休息域となる水域周辺の林の確保
- 3) 幼虫を捕食するアメリカザリガニの排除

【特記事項】

本種幼虫は地図に掲載されないような小さな水域を好むため生息地の探索はかなり困難である。さらに成虫は黄昏飛翔性が強いので、日中の探索では非常に発見しづらい。全国的に分布の限定されるヤンマとされてきたが、他県でも都市近郊の小湿地などで発見されるケースが散見される。

(吉田雅澄)

県内分布図



ナゴヤサナエ *Stylurus nagoyanus* (Asahina)

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は55%、現存数は13であり、準絶滅危惧に相当する。

【形態】

腹部第7から9節が著しく広がった、やや大型のサナエトンボである。メガネサナエより一回り小さく、腹部第4~7節の黄色斑が環状斑となっていることで識別できる。



♂. 一宮市北方町北方, 2007年9月28日, 安藤 尚 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張および西三河の29市町村で記録されている。東三河には分布しない。

【国内の分布】

本州東北部から九州南部にかけて記録されている。

【世界の分布】

日本特産種である。

【生息地の環境／生態的特性】

成熟成虫は、河川の中～下流域で8~9月を中心に見られる。木曽川などの大河川以外にも川幅10~20m程度の砂地の浅い河川で成熟個体が見られることがある。成虫は、発生地からかなり移動することもあり、県下でも羽化地から離れた市町村で確認される例が散見される。幼虫は、河川下流域の砂泥底に生息する。羽化は6~8月に見られ、成虫になるまでに複数年かかると推測される。

【現在の生息状況／減少の要因】

木曽川および庄内川、愛知用水、矢作川で羽化が確認されている。木曽川は愛知県最大の産地であるが、近年個体数が減少している。庄内川、愛知用水、矢作川は年に確認できる数が1桁を超えることはなく、非常に個体密度は低い。

成虫は羽化場所より上流の砂地の川で産卵するので、環境が一気になくなることは少ない。一方、幼虫は川底の泥質に好みがあるため、河川改修等による河床の攪乱や川底へのヘドロの堆積により生息環境が失われることがある。また緩やかな流れに生息することもあるので、農薬等の有毒物質の影響を受ける可能性も考えられる。木曽川では、羽化中の個体に水上バイクの起こした波がかぶり、羽化不全となる例が観察されている。

【保全上の留意点】

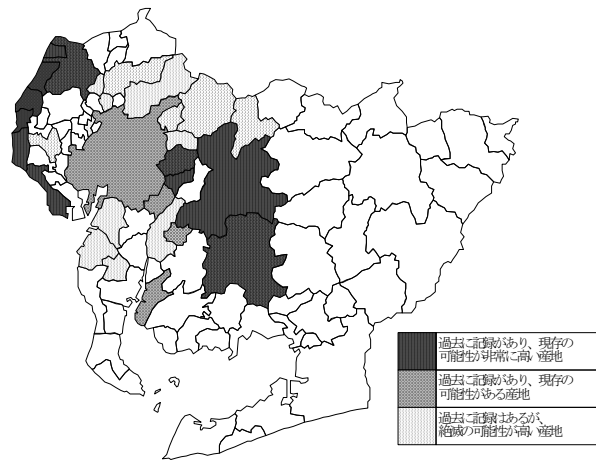
- 1) 河川の水質汚濁の防止
- 2) 幼虫の生息域となる砂泥底の確保
- 3) 幼虫の羽化場所付近での水上バイクやプレジャーボート等の使用抑制

【特記事項】

名古屋市を基産地とする種で、和名と種名が「名古屋」に因んで命名された唯一のトンボである。本種の幼虫は、トンボ類としては珍しく塩分への耐性を有しており、愛知県でも木曽川大堰より下流の汽水域で羽化を確認できる。羽化時にハクセキレイに捕食されることが多い。

(吉田雅澄)

県内分布図



キイロサナエ *Asiagomphus pryeri* (Selys)

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は48%、
現存数は12.5であり、準絶滅危
惧に相当する。



♂. 瀬戸市海上町, 1999年6月11日, 高崎保郎 撮影

【形態】

黒地に黄斑のある大型のサナエトンボである。ヤマサナエに似ているが、♂は尾部の下付属器が上付属器より長いこと、また♀は生殖弁が下方に突出していることで識別できる。

和名は同属のヤマサナエよりも黄色の強いサナエトンボという特徴に由来する。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張～三河の丘陵地から低山地を中心に24市町村(旧市町村単位)で記録されている。

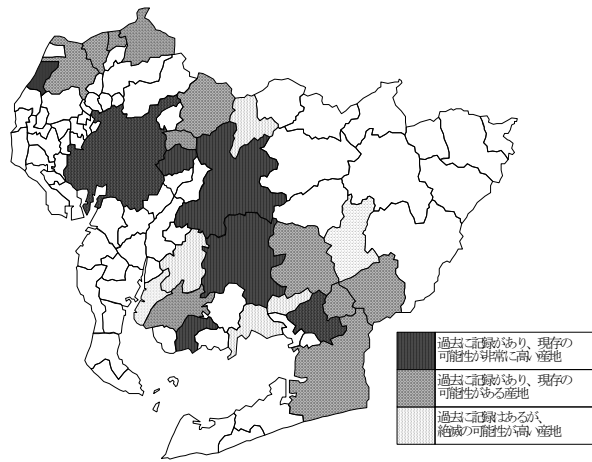
【国内の分布】

本州東北部から九州南部にかけて分布し、種子島でも記録されている。

【世界の分布】

日本特産種である。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

成熟成虫は、流れの緩やかな河川中流域や、それに接続する用水路などで見られる。未熟成虫は、発生地付近の樹上で生活しているようで、見かけることは少ない。幼虫は、砂泥質の河床でもやや泥の多い部位に潜り込んでいることが多い。

成虫は5月頃から羽化し、成熟成虫は7月頃まで生殖行動を行なう。幼虫は通常足かけ3年で成虫になるようである。

【現在の生息状況／減少の要因】

尾張では東部丘陵地の小川などに現存する。木曾川でも記録されているが、犬山付近は近年調査されておらず、一宮市(旧尾西市)では確認例がある。西三河では矢作川水系に現存するが、規模の小さな河川で見られることが多い。東三河では豊川市周辺の丘陵地にある小河川や用水路で見られる。いずれの産地も河川の限られた範囲にのみ生息していることが多い。

本種は同属のヤマサナエに比べてやや泥の多い砂泥を好む。県下に多産するヤマササナエよりも環境へのこだわりがあると推測され、それが分布の狭さにつながっているようである。よって河川改修などにより、好みの環境がなくなると絶滅につながりやすい。

【保全上の留意点】

- 1) 成虫の産卵域となる岸辺の砂地の確保
- 2) 幼虫の生息域となる砂泥底の確保
- 3) 河川の水質汚濁の防止

(吉田雅澄)

トラフトンボ *Epitheca marginata* (Selys)

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は55%、
現存数は15であり、準絶滅危惧
に相当する。

【形態】

黒地の体色に橙褐色の斑紋を
持つ中型のトンボである。♂の
翅はほぼ透明であるが、♀では
前縁に黒褐色の帯が発現するこ
とが多い。

和名は体色の斑紋を虎斑に見
立てたことに由来する。



♀. 名古屋市千種区田代町, 1952年4月28日, 高崎保郎 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張～三河の平野部から丘陵地にかけての
33市町村で記録されている。

【国内の分布】

本州東北部から九州南部にかけて分布し、
奄岐等の離島でも記録されている。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

成熟成虫は、おもに平地から丘陵地にかけ
てのヒシ、ジュンサイなど浮葉植物の豊富な
池沼で見られる。未熟成虫は、発生地付近の
空き地や林縁などで摂食飛行しているのが見
られる。幼虫は、浮葉植物や抽水植物につか
まっていることが多い。

成虫は4月後半から羽化し、成熟成虫は5
月を中心に見られるが、成虫の出現期間は長
くない。1年1化である。

【現在の生息状況／減少の要因】

尾張では平野のほとんどの産地が失われ、
名古屋市周辺と知多半島の丘陵地に一部現存する。西三河と東三河も同様で、平野の産地はほとんど絶滅し、丘陵地に少数が見られる。

本種はヒシなどの浮葉植物に産卵するので、浮葉植物のない池には生息できない。また産卵の前に行われる交尾時に、池の周りのヨシなどの抽水植物に止まる性質があるので、抽水植物のない池も好まない。池沼の改修等による植生の破壊は、本種の存続に致命的となる。さらにオオクチバス（ブラックバス）などの肉食外来魚が放流されていると幼虫が捕食されるようであり、本種が好む植生のある池であっても肉食外来魚が多いと、ほとんど姿を見られないことが多い。

【保全上の留意点】

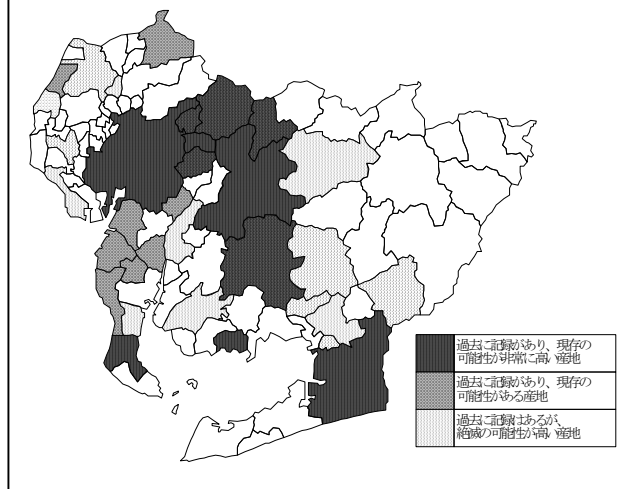
- 1) 幼虫の生息域となる岸辺の浮葉・抽水植物の確保
- 2) 成虫の休息域となる水域周辺の林地の確保
- 3) 幼虫／成虫を捕食する可能性のある外来魚の移入禁止

【特記事項】

本種の卵はトンボ類の中でも極めて特異である。一般的にトンボ類の卵は水中で1個ずつばらばらになるが、本種は卵塊で産み落とし、まるでヒキガエルの卵の様にそれが水中で20cm以上のゼラチン状の卵紐となる。一つの卵紐には600個以上の卵が含まれるという。

(吉田雅澄)

県内分布図



キイロヤマトンボ *Macromia daimoji* Okumura

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は29%、現存数は12であり、準絶滅危惧に相当する。

【形態】

体色は黒地に鮮やかな黄色斑を持つ細身のトンボである。成熟した♀の翅は黄褐色にけぶることが多い。

和名は黄色いヤマトンボという意味である。



♂. 豊田市月原町, 2006年6月29日, 大野 徹 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張～三河の丘陵地を中心とした17市町村で記録されている。

【国内の分布】

本州東北部から九州南部にかけて記録されている。

【世界の分布】

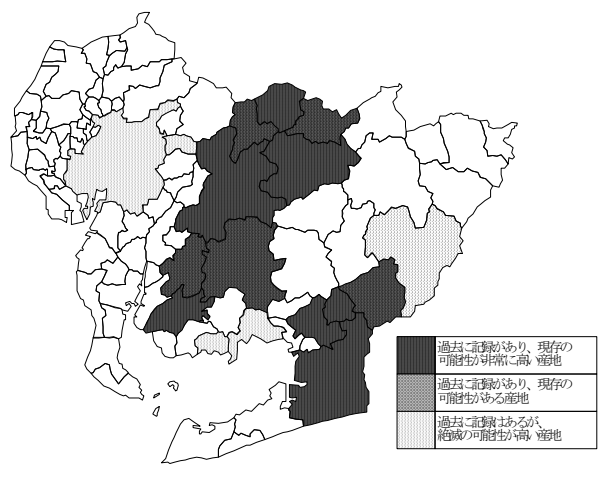
朝鮮半島に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

成熟成虫は、おもに丘陵地を流れる砂泥底のある河川中流域で見られる。未熟成虫は、発生地周辺をあまり離れないようで、付近の林縁などで摂食飛翔しているのを観察している。幼虫は、流れの緩やかな砂泥底に浅く潜り込んでいることが多い。細かく見れば、小さな淵に落ち込む手前で表面に薄く泥をかぶる程度の流速となる部位を好む。

成虫は5月後半より羽化し、成熟成虫は6～9月上旬頃に見られる。幼虫期間は野外での幼虫の成長の様子から見ると、2年と推測される。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

尾張には確実な産地は存在しない。西三河では西尾市から豊田市（旧旭町）にかけての矢作川水系に現存する。東三河では豊川水系に現存する。

本種幼虫は特定の砂泥底を好み、矢作川水系にはそのような環境が多いので、日本有数の産地の一つとなっている。したがって河川工事等によって本種好みの川底が破壊されると、本種は姿を消すことが多い。また水質汚濁にも弱く、名古屋市内の河川では水質悪化や河川改修により絶滅した。また矢作川水系においても、豊田市の籠川や岡崎市の青木川では、良好な川底が残されているにもかかわらず、水質悪化により姿を消したと推定される。

【保全上の留意点】

- 1) 河川の水質汚濁の防止
- 2) 幼虫の生息域となる砂泥底の確保
- 3) 成虫の休息域となる水域周辺の林地の確保

【特記事項】

本種は名古屋で採集された個体を基に記載された。

(吉田雅澄)

ノシメトンボ *Sympetrum infuscatum* (Selys)

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は80%、現存数は14.5であり、準絶滅危惧に相当する。

【形態】

ほとんど赤化しないアカトンボの仲間で、ハネの先端に褐色斑があるのが特徴である。ハネの褐色斑をノシメ斑とも呼び、愛知県内でも数種が見られるが、その中で本種が最も大型である。和名はノシメ斑に由来する。



♂. 豊田市大池町, 2017年10月8日, 川田奈穂子 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県のほぼ全域にわたる73市町村で記録されている。

【国内の分布】

北海道から九州地方にかけて分布する。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、中国、ロシア（極東）に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

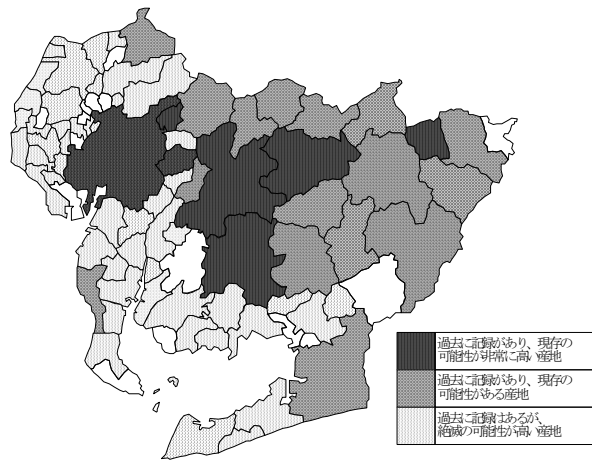
成熟成虫は、水田や湿地、池沼周辺で見られる。未熟成虫は、発生地を離れる個体もあり、市街地付近では神社林などで摂食しながら過ごすこともある。幼虫は、水田のような比較的浅い水域に生息していることが多い。

成虫は6月頃より羽化し、秋になると生殖行動が見られる。卵のまま越冬し、翌春孵化して初夏に羽化する年一化である。

【現在の生息状況／減少の要因】

2000年頃から水田のアカトンボであるアキアカネが全国的に激減し、その要因の一つがネオニコチノイド系の農薬であることが明らかにされている（上田・神宮寺, 2013）。愛知県も例外ではなく、水田を代表するアカトンボであるアキアカネ・ナツアカネ・ノシメトンボは激減した。具体的な減少率は100分の1といったレベルではなく、おそらく1万分の1かそれ以上の激減と推測される。3種の中で最も減少したのがノシメトンボである。その理由は愛知県のノシメトンボが他2種に比べて水田への依存度が高かったためと推測される。かつては平野の水田でも産卵し、周辺の公園の樹木や電線に止まる姿が普通に見られたが、現在はごく希な例外を除き、平野では全く姿が見られない。愛知県では丘陵～山間の上述の農薬を使っていない水田か、あるいは農薬の入らない湿地などで細々と生き残っているに過ぎない。

県内分布図



【保全上の留意点】

- 1) 水田や湿地の水質悪化の防止（特に毒性の強い農薬等の流入防止）
- 2) 成虫の休息域となる水域周辺の林地の確保

【特記事項】

2010年代後半になると、愛知県のアキアカネはごく僅かだが個体が持ち直してきている。といっても2000年以前の個体数を仮に1万とすると、1まで減った個体が2か3に戻っただけだが、秋になると尾張や西三河の平野部に飛来するようになった。しかし、それらの個体が平野の水田に産卵しても、そこに農薬が残留している限り、幼虫が育つことはない。

【引用文献】

上田哲行・神宮宇寛, 2013. アキアカネに何が起こったのか: 育苗箱施用浸透性殺虫剤のインパクト. Tombo, (55): 1-12.

(吉田雅澄)

クチキコオロギ *Duolandrevus ivani* (Gorochov)

【選定理由】

本種は、♂・♀とも短翅で飛ぶことはできず移動能力に乏しいこと、一生に2年以上を要することなど安定した環境が必要である。しかし、本種の主たる生息地である常緑広葉樹林は伐採や土地造成のため減少しつつある。

また、自然的要因とも思われるが、沿岸部での一部の生息樹林の乾燥化が厳しさを増しているようで、本種の生息に圧力がかかっているようである。一方、本種は南方系の種であるため、気温上昇に伴い照葉樹林内の湿度が高い地域で生息環境が良好になりつつある可能性もある。

【形態】

体長は♂・♀とも25~31mm。体は艶のある暗茶褐色。体に比較して頭は大きい。翅は短く、かつては「オオズコバナコオロギ」という異名もあった。触角は長く体長の数倍はある。後脚腿節は太くその外側は淡茶褐色。内側は淡色で末端部は暗茶褐色となる。日中は樹皮下や石下などにひそむため体は扁平。

【分布の概要】

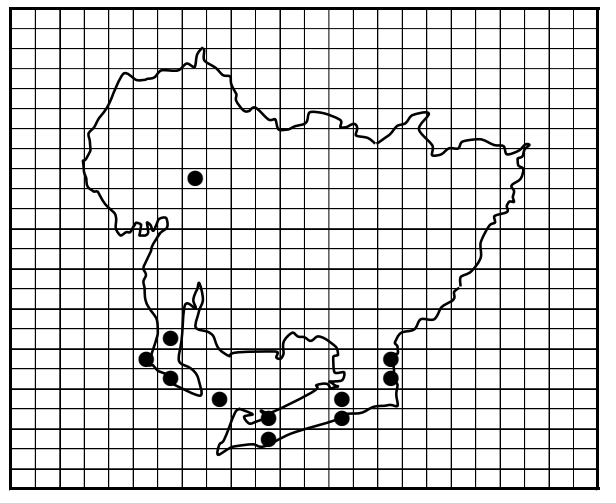
【県内の分布】

渥美半島、知多半島周辺に分布。静岡県との県境山地沿いに北上している可能性があるが確認はされていない。篠島には生息している(岡田, 1991)。名古屋市市内での生息が確認された(石川, 2018)。

【国内の分布】

本州、四国、九州。他に、小笠原諸島に1種、南西諸島に2~3種の近似種が知られている(市川・村井・本田, 2000)。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

主に常緑広葉樹林を好むが、杉林の中にもいる。林床にはある程度の湿気が必要で、乾燥しすぎると生息できなくなる。なお、田原市(旧田原町)の生息地は畑地を通る水路である。これは深さ1~2メートルで、壁面には草や小低木が生えている環境である。

夜行性で、日中は樹皮下や石下や崖の割れ目などにひそむ。幼虫、成虫ともに越冬する。気温の上昇や伐採樹木の移動などの諸要因により、生息地が拡大している可能性があるため、今後も注意深く調査する必要がある。

【現在の生息状況／減少の要因】

各生息地の樹林は多かれ少なかれ乾燥気味で、環境は悪化しつつある。特に、篠島でその現象が明瞭。樹林内の多数の松が枯死し、風通しが良くなった分乾燥が進んだものと思われる。このため、篠島での個体数は減少している。

【保全上の留意点】

現在の生息地の樹林とともに林床の草・低木などもある程度残し、本種の活動・生息に必要な湿気が保たれるようにすること。下草刈りや枝打ちなどでの過度の整備は林床を乾燥させ、本種を駆逐することにもなるので注意が必要である。また、宅地開発や道路拡張による照葉樹林の減少を極力抑える必要がある。

【引用文献】

- 市川顕彦・村井貴史・本田恵里, 2000. 総説・日本のコオロギ. ホシザキグリーン財団研究報告, 4: 257-332.
- 岡田正哉, 1991. 愛知県の直翅目(2). 愛知県の昆虫, (下): 5-20. 愛知県.
- 石川進一朗・石川みどり, 2018. 東山南部にてクチキコオロギを採集. 佳香蝶, 70 (274): 26.

【関連文献】

- 大野正男, 1976. 分布総説(2) クチキコオロギ(1). 昆虫と自然, 11 (12): 7-11.
- 大野正男, 1977. 分布総説(3) クチキコオロギ(2). 昆虫と自然, 12 (2): 16-20.
- 日本直翅類学会編, 2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑: 176, 467-468. 北海道大学出版会, 札幌.
- 市川顕彦ほか, 2016. バッタ目. 日本直翅類学会(編), 日本産直翅類標準図鑑: 88, 253-254. 学研プラス, 東京.

(水野利彦)

タイワンクツワムシ *Mecopoda elongata* (Linnaeus)

【選定理由】

1950年代後半に岡崎を中心とする三河地方で発見されたが、なぜかその後の本種の記録は最近までほとんど途絶えていた。ただその中で、本種の阿久比町での存在は1986～2001年にわたって記録され(相地, 2002)、今回の調査で少なからぬ個体数を確認できた。

本来は南方系である本種の今後の存続の可否や近縁のクツワムシとの競合はどうかなど継続調査が必要である。

【形態】

体長(頭～翅端)は♂♀ともに50～58mm。クツワムシに似るが、本種の♂では翅が細く長いこと、♀では産卵管がゆるく上方に反っていることなどで区別できる。褐色個体が一般的で緑色個体は少ない。南西諸島産は一般に大型。

【分布の概要】

【県内の分布】

三河地方や名古屋地方の平地部～低山地、知多半島、渥美半島。矢作川や豊川沿いに内陸部へ入っている。

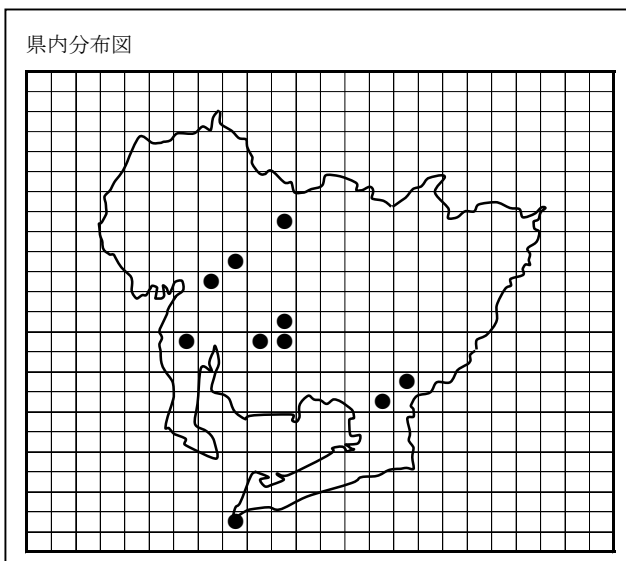
【国内の分布】

本州、四国、九州。伊豆八丈島。南西諸島。

【世界の分布】

台湾、熱帯アジア。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

造成地、大小河川の堤防や河川敷などの雑草地で、セイタカアワダチソウ、ヨモギ、イタドリなどにクズが絡まっているような環境を好む。夜間に♂は時々飛ぶが♀はしばしば地面上を歩く。鳴き声は大きく「ギュルル・・・、ギュルル・・・」という前奏のあと「ガチャ、ガチャ、ガチャ」と騒々しく鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

2006年に生息が確認できたのは阿久比町のみで、ここでは調査中には常に1～2頭の鳴き声が聞こえた。しかし、クツワムシの声は聞こえず、ここでは混生していない模様である。この他、過去の記録地の大部分は河川改修や開発行為により生息地が減少した。

2008年9月も阿久比町の生息地は健在で個体数も少なくなかった。また、日進市や名古屋市天白区の天白川沿い、常滑市でも本種の生息が少数ながら確認されている。

【保全上の留意点】

主な生息環境である河川敷や堤防法面の草叢を残すこと。特に春から初秋までの草刈りはしない方がよい。草は刈り過ぎず、クズなどが絡んだ高茎草本も適度に残すことが望ましい。近年の集中豪雨に伴う河川環境への働きかけも、本種の生息に大きな影響を与えている。

【引用文献】

相地 満, 2002. タイワンクツワムシは今. 風の便り, (6): 6-7. 風の館, 愛知県.

【関連文献】

環境省, 1980. 日本の重要な昆虫類 東海版.

日本直翅類学会編, 2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑: 128-129, 440. 北海道大学出版会, 札幌.

市川顕彦ほか, 2016. バッタ目. 日本直翅類学会(編), 日本産直翅類標準図鑑: 135, 321. 学研プラス, 東京.

(水野利彦)

ヤマトバッタ *Epacromius japonicus* (Shiraki)

【選定理由】

本種は、主にまばらに草が生える海岸の砂地に生息する。また、類似環境を有する内陸部の大きな河川の河川敷にも生息することがある。本種の記録されている県内のこうした環境の一部では、観光客などの増加による踏みつけやサンドバギー（レジャー用自動車）の乗り入れなどで状況は悪化しつつある。また、大小のダム建設に伴って砂の堆積が乏しくなったため、砂浜・砂地の面積が減少して、本種の生息に悪影響を及ぼしている地域もある。

【形態】

中型のバッタ。体長は♂27~32mm、♀35~41mm。♂・♀とも有翅。全体に灰白褐色で黒褐色の大小の斑点を密布する。頭・胸部背面は淡い赤褐色。前翅は淡い赤褐色で前縁部は斑模様となる。後翅は基方はごく淡い水色で黒褐色の翅脈以外には模様はない。後脚腿節の外側は体色と同じ色模様だが内側はほぼ一様に灰白褐色で中央に大きな黒紋が二つある。

同所的に生息するイボバッタ、マダラバッタ、クルマバッタモドキなどは本種と酷似するので注意が必要であるが、後翅基部の淡い水色の部分で区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

渥美半島や知多半島の一部の海岸砂丘に見られるが、稲沢市（旧祖父江町）木曾川沿いのように河川敷の砂原にも生息する（岡田, 1990；長谷川, 1991）。

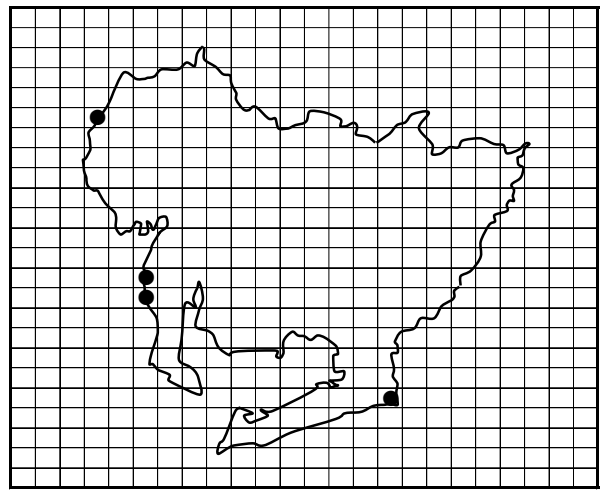
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

韓国。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

まばらに草が生える海岸の砂浜もしくは河川敷砂地に生息する。♂・♀とも発達した翅があり、数メートルの距離であれば飛んで移動する。体色は生息地の環境によく似た隠蔽色となっており、翅を畳んだまま静止しているときは見出しにくい。

【現在の生息状況／減少の要因】

稲沢市（旧祖父江町）の生息地は、人による踏みつけや河川敷砂地へのサンドバギーや自動車の乗り入れなどで環境が悪化している。ここでは1980年に採集された個体を最後に記録されていない（岡田, 1990）。

常滑市の生息地は、防波堤の外側（海側）にある長さ300m、幅50mほどの小さな砂浜である。まばらに海浜植物が生える良好な環境である。しかし、一部が資材置場として使用されたため局地的に環境は悪化した。

豊橋市の生息地は、ウミガメ保護のために砂浜への自動車の乗入が禁止されているため、本種の生息にとって好都合である。現状が維持されれば本種の存続に問題はない。2013年の豊橋市、2018年常滑市の現地調査では、生息地は健在であった。

【保全上の留意点】

まばらに草が生えるきれいな砂浜・砂地を継続して維持すること。冠水などのため、ヘドロや土が被さった砂地はよくない。逆に、草が茂りすぎるとマダラバッタやクルマバッタモドキのほう優勢となってしまうので注意が必要である。生息地への無差別かつ過度の立入りは控えること。

【引用文献】

長谷川道明, 1991. 豊橋市表浜におけるヤマトマダラバッタとハマズズの採集例. 佳香蝶, 42 (164): 63
岡田正哉, 1990. 愛知県の直翅目(1). 愛知県の昆虫, (上): 87-93. 愛知県.

【関連文献】

日本直翅類学会編, 2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑: 541. 北海道大学出版会, 札幌.
市川顕彦ほか, 2016. バッタ目. 日本直翅類学会 (編), 日本産直翅類標準図鑑: 159, 369. 学研プラス, 東京.

(水野利彦)

ヒナカマキリ *Amantis nawai* (Shiraki)

【選定理由】

本種は、主に安定した常緑広葉樹林に生息するが、小型かつ微翅のため移動能力は小さい。生息地の小さな環境変化にも敏感に反応しやすく、生息地の分断により当該個体群が孤立し除々に消滅する危険性が高い。

【形態】

日本産カマキリ目のうちでは最も小さな種類。体長は♂12~15mm、♀13~18mm。♂・♀ともに翅は小さく鱗片状。体は褐色で全体に暗褐色斑点があり、個体によっては全身が黒く見えるほどに発達する。胸・腹部背面の正中線に沿っては暗色条となる。前脚は特に太く頑丈で獲物を捕えるための捕獲脚となっている。

一般にカマキリ目の種類は同一種内で「緑色型」と「褐色型」の両方が見られるが、本種では「緑色型」の記録はない。

【分布の概要】

【県内の分布】

南方系の種類であり、渥美半島・知多半島地域から知られているが、内陸部では豊田市猿投山山麓からも記録されている（岡田, 1987；田中, 1986）。

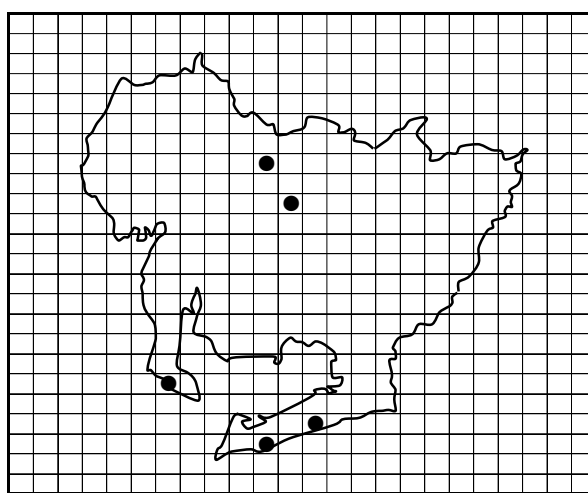
【国内の分布】

本州以南、琉球列島沿いにその最西端の与那国島まで分布する。地域により、♂は普通に生息しているらしい。

【世界の分布】

台湾（ここでは長翅型個体も記録されている）、中国。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

主として常緑広葉樹林の林床もしくは林床の低木上やシダ植物上などで活動する。沿岸地のタケ・ササ林内や松林内などでも見られる。木漏れ日が射すような林内で、風通しの良い割に林床に湿気のあるような環境を好む。

本種の餌の捕獲形式は「待伏型」だけでなく、獲物を積極的に追いかける「追尾型」も普通に見られる。

【現在の生息状況／減少の要因】

本種は、一般的な蒐集の対象とはなっておらず、採集による減少は認められない。地域整備など開発のため生息地が減少・分断され、環境状況は悪化しつつある。

【保全上の留意点】

本種は、小型でありかつ飛ぶことができず移動能力に乏しい。したがって「小さな開発」であっても大きな悪影響を受ける可能性が高い。生息記録地点のみならず、それに隣接する環境も一体として保全する必要がある。

また、知多半島と渥美半島の既知生息地は畑地に隣接しており、農薬などの流入にも注意が必要である。

【引用文献】

- 岡田正哉, 1987. ヒナカマキリの愛知県内での分布. 佳香蝶, (150): 27.
田中 番, 1986. 豊田市におけるヒナカマキリ 2 種の記録. 佳香蝶, 38 (147): 46.
中峰 空, 2016. カマキリ目. 日本直翅類学会 (編), 日本産直翅類標準図鑑: 46,199-200. 学研プラス, 東京.

【関連文献】

- 岡田正哉, 2001. ヒナカマキリ. 昆虫ハンター カマキリのすべて: 46-47. トンボ出版, 大阪市.
山崎柄根, 1981. 日本産ヒナカマキリについて. Mem. Natn. Sci. Mus., Tokyo, (14): 95-102.

(水野利彦)

オオゴキブリ *Panesthia angustipennis spadica* (Shiraki)

【選定理由】

良好な自然林（二次林を含む）の朽木中に生息しているが、森林伐採などで生息環境が縮小されている。南方系の種であることから平野部に分布の主体があるが、三河山間部からも知られている。なお、昨今の温暖化により土地の乾燥化が進み、本種の生息する樹林林床の枯朽木の状態が悪化していることで、本種の存続に負荷がかかっている模様である。

【形態】

体長は37～41mm。体は太く、光沢のある漆黒色。前胸背は前部と中央に小突起を有する。枯朽木内など狭い空間に住んでいるため成虫の翅は擦り切れていることが多い。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県では比較的各地から記録されているが、河川に沿って内陸に分布を広げているようである。

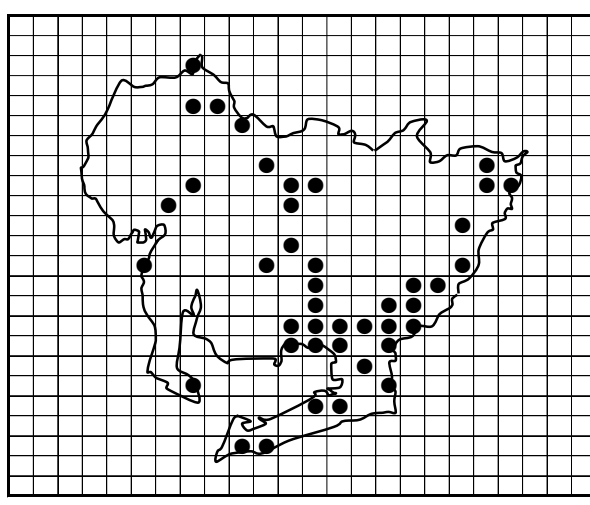
【国内の分布】

本州、四国、九州。海岸線に沿った地域に多い。

【世界の分布】

台湾。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

県内では主として海岸線に近い照葉樹林に生息しているが、環境適応性の幅も広く、落葉広葉樹林や針葉樹林にも生息している。生態については朽木内で坑道を掘って家族生活をしている以外ほとんど何も判っていない。

副次的ながら、本種は他の南方系種類、特に枯朽木内など類似の環境で生活する外国産クワガタムシやカブトムシ類の「越冬可能地」推定のための「指標種」にもなり得るかと思われる。

【現在の生息状況／減少の要因】

朽木内生活のため、発見・確認に手間はかかるが、かならずしも個体数は少なくない。ただし、県内の主要分布地が平野の樹林であることから、開発によってその生息環境が失われていく状況は続き、楽観は許されない。なお、温暖化による枯朽木の過度の乾燥化は不利であるが、本来が南方系の本種にとって温暖化は有利かとも思われる。

【保全上の留意点】

残された樹林を林床と共に保全することが最大の保護につながると考えられる。

【関連文献】

- 朝比奈正二郎, 1988. 日本産ゴキブリ分類ノート, XVII. オオゴキブリ族の種類. 衛生動物, 39 (1): 53-62.
朝比奈正二郎, 1991. 日本産ゴキブリ類. 中山書店, 東京都.
旭 和也ほか, 2016. ゴキブリ目. 日本直翅類学会 (編), 日本産直翅類標準図鑑: 75,223. 学研プラス, 東京.

(水野利彦)

ニホンアカジマウンカ *Ommatidiotus japonicus* Y.Hori

【選定理由】

名古屋市守山区を模式産地として記載された種で、きわめて限られた環境でしか生息が確認されていない。さらに生息地のほとんどは、都市近郊にある1ha未満の湿地であるため、今後造成などにより消滅する危険性が極めて高い。

【形態】

体長は翅端まで4.2~5.0mm。頭部は前方に突出し、幅の約1.4倍の長さがある。頭頂部から小楯板の先端まで赤色の条線が走る。翅は半透明で、雄では前縁に黒色の縁取りと6条の橙色の条線があるが、雌ではこれらを欠く。現在知られているのは短翅型のみで、後翅は痕跡的である。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市、豊田市、新城市、日進市から記録されている。

【国内の分布】

静岡県、岐阜県。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

生息地はいずれもいわゆる低層湿地と言われる湿地で、シラタマホシクサなどを含んだ植生と密接に関連している。寄主植物は不明であるが、ヨーロッパなどに産する近縁種の食草から推定するとカヤツリグサ科植物であろうと思われる。成虫は6月末頃から9月まで見られる。9月に終齢幼虫を採集しているが越冬態はおそらく成虫と考えられる。

【現在の生息状況／減少の要因】

模式産地を含めたいずれの産地でも近年の調査で採集されておらず、追加の産地も確認されていない。

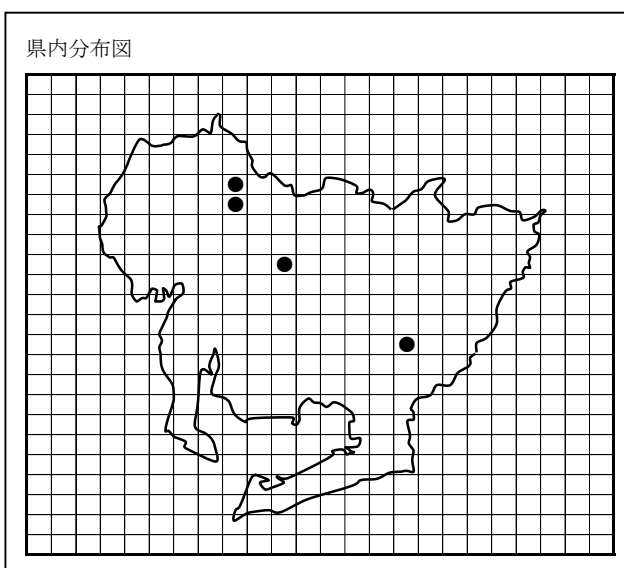
低湿地に分布するため、湿地の埋め立てや周辺工事の影響で生息地そのものが消滅、または水源が断たれたことによる乾燥化などで減少したものと考えられる。

【保全上の留意点】

人里近くに分布するため、宅地造成などの開発行為に対しては難しい面があるが、シラタマホシクサが生育するような低湿地の保全が重要であり、周辺地域も含めた水源の確保にも留意する必要がある。頸吻亜目の種群は小型種が多く識別も難しいため、一般にほとんど採集されない面もあるので、より詳細な分布調査が必要である。

【関連文献】

- 林 正美・友国雅章・吉澤和徳・石川 忠, 日本昆虫目録 第4巻: 348. 樞歌書房, 福岡.
Hori Y., 1977. A New Species of the Genus *Ommatidiotus* (Homoptera Issidae) from Japan.
Annot. Zool. Jap., 50 (2): 127-130.
堀 義宏, 1982. 愛知県の半翅目. 昆虫と自然, 17 (12): 22-25.
堀 義宏・浅岡孝知・原田猪津夫, 1990. 愛知県の頸吻亜目. 愛知県の昆虫, (上): 105-122. 愛知県.



ヒメタイコウチ *Nepa hoffmanni* Esaki

【選定理由】

モウセンゴケやシラタマホシクサなどが生育する湿地に生息し、本県では広く分布するものの、宅地造成による埋め立てなどで生息地が年々減少している。

【形態】

体長は18～22mm。体型は長卵形で光沢のない暗褐色を呈し、尾端の呼吸管は非常に短い。前脚は捕獲脚になっている。前胸背は幅広く、小楯板は正三角形を呈す。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊橋市、豊田市、岡崎市、幸田町、西尾市（旧市域、旧吉良町、旧幡豆町）、知多市、美浜町、瀬戸市、長久手市、春日井市、名古屋市、犬山市など県内各地で確認されている。

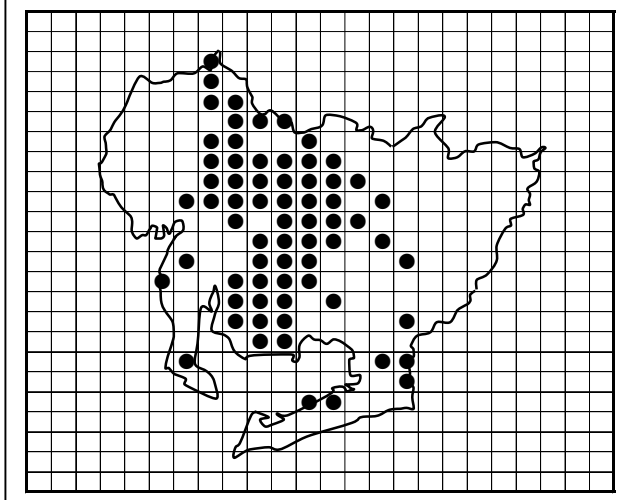
【国内の分布】

本州（岐阜県、静岡県、愛知県、三重県、兵庫県、奈良県、和歌山県）、四国（香川県）。

【世界の分布】

ロシア極東（沿海州）、中国、北朝鮮、韓国。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

湿地、水田や用水路、溜め池の水辺などで常に水の流入が認められる環境に生息する。小石や植物の堆積物の下に潜み、クモ類やゴミムシ類など徘徊性の小動物を捕食する。飛翔しないため移動性が乏しい。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内では溜め池の水辺でも見つかる他に、道路脇や河川敷などの小規模な湿地でも確認されるため、湿地環境があれば生息している場合が多い。また、宅地造成等により孤立した小規模な湿地環境に依存している場合もあり、生息環境の悪化による個体数の減少や局所的な絶滅が懸念される。

道路建設、宅地造成による生息地の埋め立てや水脈の分断による湿地環境の乾燥化などで減少している。

【保全上の留意点】

人里近くに生息する場合は、宅地造成などで難しい面もある。湧水などが常に流入する環境に依存するため、水源を確保するうえで後背地の森林を保全することが重要である。

【特記事項】

西尾市の生息地が愛知県指定の天然記念物に指定されている（昭和43年指定）。

【関連文献】

- 浅岡孝知・家城 司, 1990. 愛知県の異翅目. 愛知県の昆虫, (上): 123-162. 愛知県.
長谷川道明・佐藤正孝・浅香智也, 2005. ヒメタイコウチの分布, 付関連文献目録. 豊橋市博研報, (15): 15-27.
堀 義宏・佐藤正孝, 1984. 半翅類. 愛知の動物: 99-107. 愛知県郷土資料刊行会.
河路掛吾, 1990. ヒメタイコウチ. 愛知県の昆虫, (上): 503-506. 愛知県.
松本 功・中尾史郎, 2018. III. 他種との関係 ヒメタイコウチの偏在と局在: その景観・群集生態学的アプローチ. 水生半翅類の生物学: 169-184. 北隆館, 東京.
矢崎充彦・石田和男, 2008. 東海地方の水生半翅類. 佳香蝶, 60 (234): 165-200.

(澤田宗一郎)

ナベブタムシ *Aphelocheirus vittatus* Matsumura

【選定理由】

主として河川上流域およびその支流となる小河川の清流に生息しているが、砂地のある清流の減少、護岸工事や水質等の悪化により減少している。

【形態】

体長は8.5～10mm、体型はほぼ円形・扁平である。体色はやや変化が見られるが、一般に頭部は黄褐色、胸部・腹部背面は暗褐色の地色に黄褐色斑がある。前胸背の側角は円みを帯び、尖らない。通常は短翅型で、稀に長翅型が出現する。

【分布の概要】

【県内の分布】

設楽町、豊田市、岡崎市、西尾市、瀬戸市などの河川で確認されている。

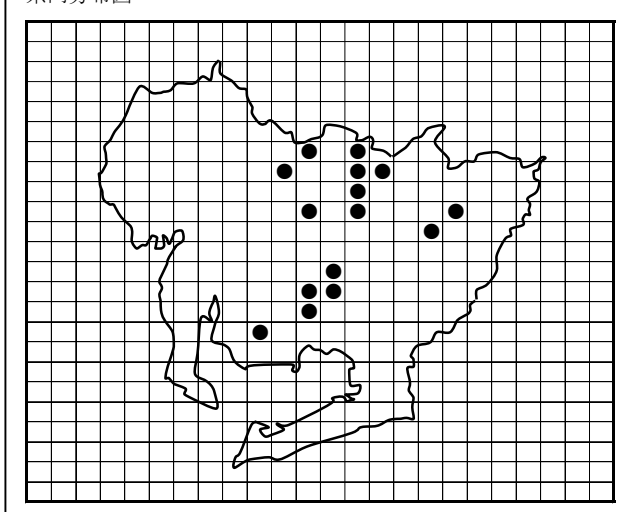
【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

韓国。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

低山間地の清流に生息し、底質が細かい砂礫の早瀬でよく確認される。プラストロン呼吸により、終生水中で生活することができる。

【現在の生息状況／減少の要因】

陸上昆虫類の調査要領では確認しにくいいため報告例は少ないが、詳細な調査により新たな産地が確認されると考えられる。また、生息地での個体数は比較的多い。水質を含めた水環境に大きく依存する種であり、護岸工事や後背地の森林の荒廃が減少要因と考えられる。

【保全上の留意点】

護岸工事など河川改修に当たっては、河床環境の改変に留意し、濁水の発生を抑え、水の流れが完全に遮断されることがないように気をつける必要がある。主として早瀬に依存しているため、直線的で単調な流れの河川形態にすることは避ける必要がある。

【関連文献】

- 浅岡孝知, 2001. 旭町のカメムシ目. 旭町の昆虫: 65-84. 旭町.
浅岡孝知・家城 司, 1990. 愛知県の異翅目. 愛知県の昆虫, (上): 123-162. 愛知県.
矢崎充彦・石田和男, 2008. 東海地方の水生半翅類. 佳香蝶, 60 (234): 165-200.
矢崎充彦, 2016. 10 カメムシ目. 豊田市生物調査報告書<分冊その2>: 66-85. 豊田市, 愛知.

(澤田宗一郎)

オオアメンボ *Aquarius elongatus* (Uhler)

【選定理由】

平野部から山間部にかけて普遍的に分布しているが、これまで記録のあった平野部における確率が少ない。また生息が確認された場合でも確認個体数は少ない。

【形態】

本州産アメンボ科では最大級で、体長は 19~27mm、体肢は黒色で長い。♂の中脚は特に長く、腿節は体長よりも長い。一般に♂の方が♀よりも大型である。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊根村、新城市、豊田市、岡崎市、瀬戸市、犬山市などで確認されている。

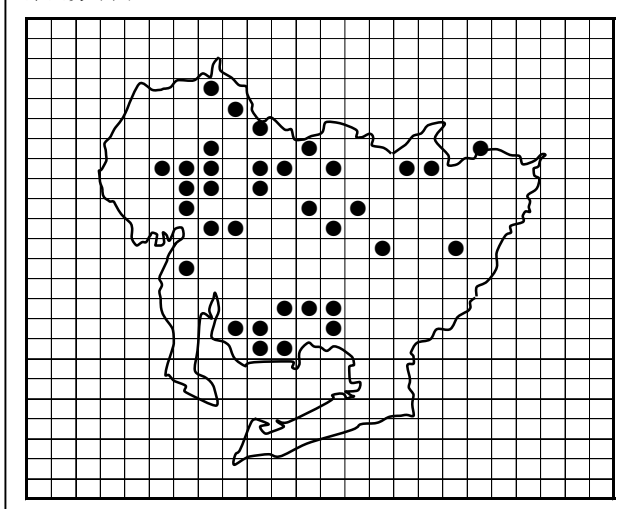
【国内の分布】

本州、隠岐、四国、九州、対馬。

【世界の分布】

中国、韓国、台湾。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

丘陵地から山間部にかけて、周辺を樹林に囲まれた池沼などに生息する。砂防堰堤によってせき止められた湛水域でもよく見られる。樹木の葉などによって日陰となった水面を好む。

【現在の生息状況／減少の要因】

丘陵地から山間部にかけて広く分布しており、水深の深い止水域に生息していることが多い。河川上流域の緩流部でも見つかる。人里の分布域では、水質の悪化や生息地周囲の樹林の伐採により減少したと思われる。

【保全上の留意点】

溜め池の改修に当たっては、周囲をすべてコンクリート護岸で覆うことは避け、周辺の樹木をできるだけ伐採しないよう留意する。河川の改修では、三面コンクリート張りの直線的な流れにすることは避け、瀬、淵が連続的に存在するような自然な形を残すことが望まれる。その他に生息環境の開放水面の維持や、越冬場所となる樹林環境の維持に留意する。

【特記事項】

名古屋市内における調査(澤田, 2019)や新編西尾市史編纂に係る調査からも複数の産地が新たに確認された。都市部においても適地であれば生息が認められる場合があり、詳細な調査によって新たな産地の確認が期待される。

【引用文献】

澤田宗一郎, 2019. 名古屋市内におけるオオアメンボ(カメムシ目アメンボ科)の記録について. なごやの生物多様性, 6:33-39.

【関連文献】

浅岡孝知・家城 司, 1990. 愛知県の異翅目. 愛知県の昆虫, (上): 123-162. 愛知県.

矢崎充彦・石田和男, 2008. 東海地方の水生半翅類. 佳香蝶, 60 (234): 165-200.

吉富博之・長谷川道明, 1997. 愛知県のアメンボ. 豊橋市博研報, (7): 35-39.

中尾史郎, 2019. 第 14 章 絶滅危惧アメンボ類の保全. 絶滅危惧種の生態工学: 165-177. 地人書館, 東京.

(澤田宗一郎)

エサキアメンボ *Limnoporus esakii* (Miyamoto)

【選定理由】

全国的に産地は少なく、県内でも産地は限られている。生息基盤が脆弱であり、水辺環境の悪化によって減少している。

【形態】

体長は8~10mm。体色は暗赤褐色~褐色で、体側に銀白色の毛による縦帯をもつ細身の種である。触角は第4節が最も長い。

【分布の概要】

【県内の分布】

新城市、豊橋市、田原市、安城市、春日井市、一宮市、東浦町、常滑市などで確認されており、沿岸部に分布の中心がある。

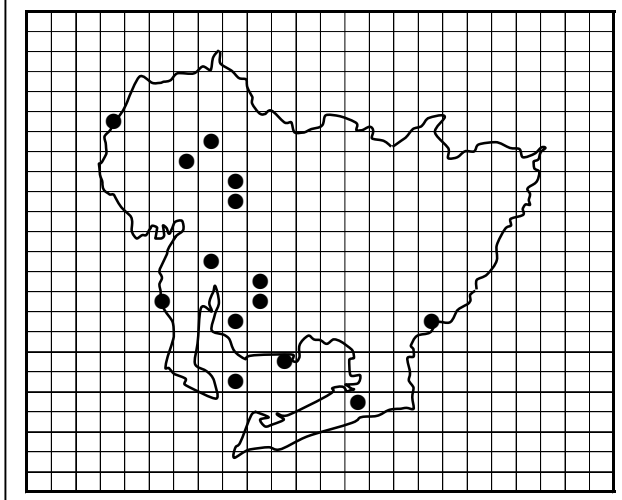
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、対馬。

【世界の分布】

中国、朝鮮半島。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

平地から丘陵地にかけて、ヨシやガマなど抽水植物が繁茂するやや暗い溜め池やワンドなどに生息する。越冬は、ヨシなどの抽水植物の枯れ株やリターなどで行う事が知られる(中尾, 2019a)。春季や秋季を除くと通常開けた水面上には見られず、密集した抽水植物帯の中で生活するため、発見するのは容易でない。

【現在の生息状況／減少の要因】

主に西尾市内から新たな産地が確認された。渥美半島から知多半島にかけて沿岸部付近の溜め池や木曾川など大河川のワンドに生息している(矢崎・石田, 2008)。溜め池の埋め立てや宅地造成、河川の護岸改修等により生息地となるヨシ原が繁るような低湿地が減少したことが考えられる。

【保全上の留意点】

生息地の改修に当たっては、抽水植物群落の消失などに留意し、安易な護岸整備を避ける他に、水源の確保を考慮した周辺地域の保全を検討する必要がある。また、近年の研究では幼虫期間に長日条件下で発育した個体は、飛翔筋の発達が少ないことが知られ、夏季の落水は致命的とされる(中尾, 2019b)。このため、本種の生活史に考慮した生息地の保全が必須となる。

【引用文献】

- 矢崎充彦・石田和男, 2008. 東海地方の水生半翅類. 佳香蝶, 60 (234): 165-200.
中尾史郎, 2019a. 第14章 絶滅危惧アメンボ類の保全. 絶滅危惧種の生態工学: 165-177. 地人書館, 東京.
中尾史郎, 2019b. 陸水アメンボ類の保全生物学と生態工学. 昆虫と自然, 54 (7): 5-9.

【関連文献】

- 安城市史編集委員会, 2005. カメムシ目. 新編安城市史 11. 資料編自然 別冊 安城市動物目録: 91-99. 安城市.
林 正美・宮本正一, 2018. 半翅目 Hemiptera. 日本産水生昆虫 科・属・種への検索(第二版): 329-427. 東海大学出版会, 神奈川.
矢崎充彦, 2001. エサキアメンボ愛知県に産すー東海地方のアメンボ科分布資料一. 佳香蝶, 53 (207): 39-41.

(澤田宗一郎)

オオミズスマシ *Dineutus orientalis* Modeer

【選定理由】

1980年代までは、名古屋市内を含む各地で生息が確認され(佐藤, 1990)、県内でも普通に生息する種と考えられていた。2010年代では県内の生息地は限られており、種の存続への圧迫が強まっている。

【形態】

体長 7~12 mm。体の側縁は黄色に縁どられ、上翅側縁後方に顕著な棘状突起があり、先端は突出する。本州には本種と見間違えるような近似種はいない。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市、豊田市、美浜町、犬山市、佐久島から記録がある(佐藤, 1990)。かつては普通種であったため、詳細な分布調査はされていないが、県内全体に分布していたと考えられる。

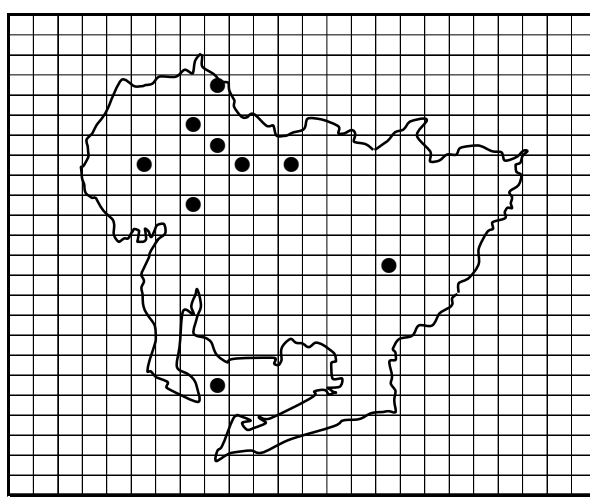
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島。

【世界の分布】

日本、サハリン、シベリア、朝鮮半島、中国、ベトナム。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

小川、水田、池など。かつては各地に極く普通の種(佐藤, 1977)とされていた。成虫、幼虫とも同一水域で生活する。成虫は水面生活に高度に適応し、水面を素早く旋回しながら泳ぎ、水面に落下した昆虫などを捕食する。

【現在の生息状況／減少の要因】

正確な現状把握ができていないが、2000年以降の生息情報は限られ、実際には現状ランクより絶滅の危険性が増している可能性がある。1990年代以降に急激に減少したことから、水面を旋回して泳ぐ性質から、オオクチバス等の外来魚による捕食圧を強く受けた可能性が高い。また水田にも生息する種であることから、このころより普及したネオニコチノイド系農薬の影響を受けた可能性もある。

【保全上の留意点】

現在の生息地の環境を保全するとともに、新産地の発見に努める。オオクチバス、ブルーギル、コイなどの外来魚の駆除を積極的に行うとともに、ネオニコチノイド系農薬の影響についても留意し、本種が減少したと考えられる要因を排除する必要がある。

【引用文献】

佐藤正孝, 1977. 日本産ミズスマシ科概説. 甲虫ニュース, (37) - (39).
佐藤正孝, 1990. 愛知県の甲虫類 (I). 愛知県の昆虫, (上): 204-231. 愛知県.

【関連文献】

上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝編, 1985. 原色日本甲虫図鑑(II), 514pp. 保育社.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

コオナガミズスマシ *Orectochilus punctipennis* Sharp

【選定理由】

河川の中流域に生息する種で、河川の汚濁などによって一時絶滅状態にあったと考えられていた。1990年代以降に庄内川、豊川で現存しているのが確認されたが、生息基盤は脆弱である。

【形態】

体長 5.5～6mm。体は長楕円形で黒くやや金属光沢を帯びる。肢などの付属物は赤褐色。上翅の点刻は密で、♂の会合部先端はほぼ直角で先が丸まり、♀ではやや斜めで会合端が少し後方に張り出す。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市山崎川、名古屋市庄内川、豊田市矢作川、豊田市(旧稲武町)月ヶ平、新城市宇連川、豊橋市豊川で記録がある。このうち庄内川、矢作川、豊川では生息環境に大きな変化がないことから、現在でも生息していると考えられる。

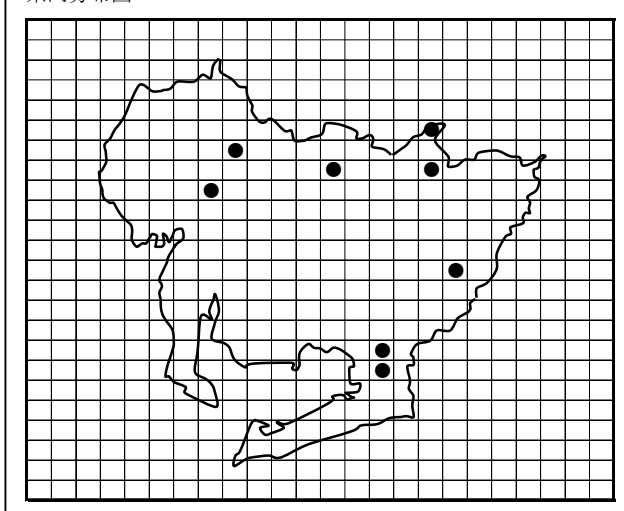
【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本の特産種であるが、ごく近似の種が、南西諸島、台湾に分布している。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

大きい河川の中流域で、岸辺が水でおおわれているような環境に生息している。夜間活動性で、昼間はその姿をほとんど見ない。

【現在の生息状況／減少の要因】

矢作川では多くの生息地が確認され、県内では恐らく最も安定した生息地域と考えられるが、他では非常に少ないと思われる。夜行性であるため、生息状況の調査が十分に行き届いていない可能性もある。河川、特に中流域の水質汚濁、環境の変化などが減少の要因である。

【保全上の留意点】

中流域における自然河岸の保全と支流からの汚水流入の規制や、本種の生息域になるような環境にオオクチバス、コクチバス、ブルーギルなどの侵略的外来種が侵入しないようにする必要がある。

【関連文献】

- 佐藤正孝, 1977. 日本産ミズスマシ科概説, 3. 甲虫ニュース, (39): 1-4.
穂積俊文・佐藤正孝, 1957. 東海甲虫誌(第3報). 佳香蝶, 9 (31): 1-10.
佐藤正孝・成瀬義一郎, 1963. 矢作川流域の水生甲虫類. 矢作川の自然: 163-172. 名古屋女子大学.
豊田市, 2005. 豊田市自然環境基礎報告書.
豊橋市, 1999. 豊橋市自然環境保全基礎調査報告書.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

アイヌハンミョウ *Cicindela gemmata aino* Lewis

【選定理由】

河川の上流域から中流域にかけての河原等に生息する大型のハンミョウで、愛知県内では生息環境が限られていることから、県内での分布は限定的で個体数も少なく、生息基盤が脆弱である。加えて、生息地はダム建設や河川整備などで失われる機会が多い。

【形態】

体長 16～17mm。日本産は大陸に分布する名義タイプ亜種とは別亜種として区別される。普通種のニワハンミョウに似るが、上唇の前縁が波状となること、上翅の中帯紋は一樣な太さで波状となるなどの特長から区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

矢作川水系、豊川水系及び木曾川水系の本支流各地。豊田市、設楽町、豊根村、新城市、東栄町、犬山市（戸田・長谷川・蟹江，2019）、江南市（蟹江・長谷川，1994；浅野，2011）。

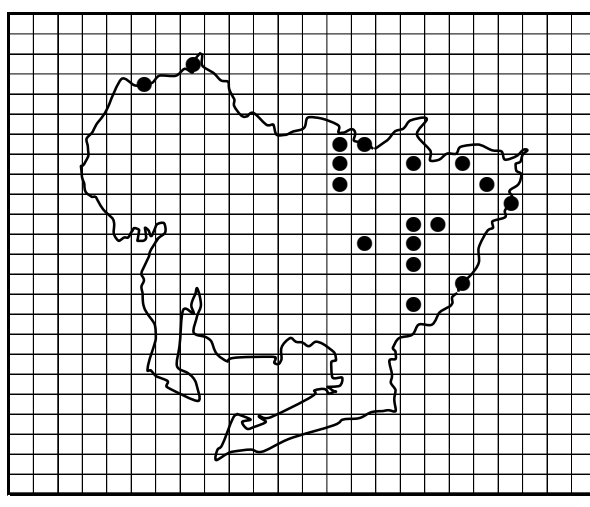
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、対馬。

【世界の分布】

日本、名義タイプ亜種が朝鮮半島、中国、シベリア南東部に、別亜種が中国（甘肅省）に分布する。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

県内では、主に河川中流域の礫が散在する砂質の河川敷に生息するが、三河湖（岩崎・蟹江，1990）でも記録がある。成虫は春～初夏に出現し、夜間や雨天時、低気温時には石下に潜む。体サイズが一回り小さいコニワハンミョウと混生することが多いが、コニワハンミョウに比べ個体数は明らかに少ない。

【現在の生息状況／減少の要因】

矢作川水系、豊川水系及び木曾川水系の本支流各地から生息情報が得られているが、いずれも生息地は狭く、生息密度は低い。減少の要因としては、ダム建設や河川の護岸工事、河川改修、砂利採取等により生息環境が失われたことに起因すると考えられる。

【保全上の留意点】

現在の生息地の保全に努める必要がある。現在の生息地周辺域での河川工事の際は、本種の生息に影響がでないよう留意することが求められる。

【特記事項】

三重県ではカテゴリー外であるが、長野県では準絶滅危惧とされている。岐阜県では本種の分布、生息状況について詳細な報告は知られていない。

【引用文献】

- 浅野 隆，2011. 愛知県におけるアイヌハンミョウの分布. 佳香蝶, 63 (248): 1-3.
岩崎 博・蟹江 昇，1990. 愛知県のオサムシ類. 愛知県の昆虫, (上): 309-338. 愛知県.
蟹江 昇・長谷川道明，1994. 愛知県におけるアイヌハンミョウの分布. 豊橋市自然史博物館研究報告, (4): 47-48.
戸田尚希・長谷川道明・蟹江 昇，2019. 愛知県の甲虫目録 3. 佳香蝶, 71 (277): 1-11.

【関連文献】

上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝編，1985. 原色日本甲虫図鑑(Ⅱ), 514pp. 保育社.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

カワラゴミムシ *Omophron aequale aequale* Morawitz

【選定理由】

よごれのない河川の砂地に生息する種で、かつては名古屋市内にも生息していたが、河川敷の改変と汚れによって生息地が減少し、県内での種の存続への圧迫が強まっている。

【形態】

体長 5.5～6.5mm。体型は円形で、鮮やかなオレンジ色。頭部は広く緑色を帯びた金属色。前胸中央部に長円形の、上翅にはやや複雑な3条の帯条の緑色を帯びた金属色の紋があるが、上翅の紋には変異が多い。

【分布の概要】

【県内の分布】

弥富市、名古屋市、豊田市などから記録がある。

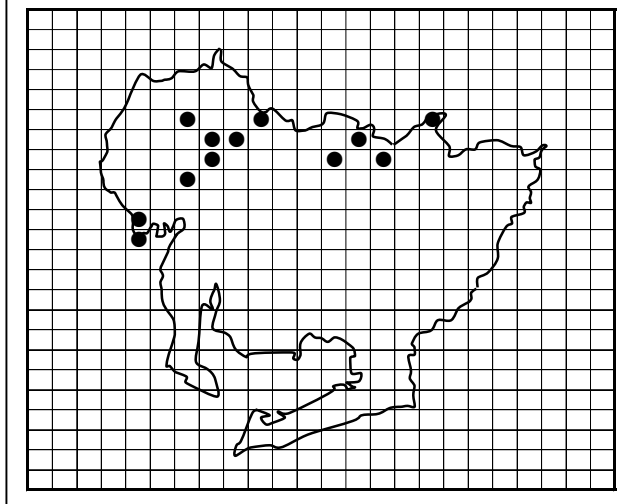
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、沿海州、中国。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

河川や湖などの砂地に生息する。日中は砂中に深く潜っていることが多く、夜間に砂地上や水辺などを徘徊する。また灯火にもよく飛来する。

【現在の生息状況／減少の要因】

弥富市鍋田干拓ならびに豊田市(旧足助町)の矢作川河川敷では1980年代後半に生息が確認され、その後も生息地の環境に大きな変化がないため、現在も生息していると考えられる。名古屋市では1950年代まで庄内川、矢田川から生息が確認されていたが、現在の河川敷の環境から判断して生存確認は絶望的。本種の減少の要因としては、河川改修あるいは汚染などによって生息地である砂地が消失したことが大きいと推定される。

【保全上の留意点】

生息地である河川等の砂地の確保が最低限必要である。河川の改修工事による大規模な砂地の改変は本種の存続に深刻な影響を与える可能性が高い。また、河川敷への四輪駆動車などの乗り入れは、生息地に多大な悪影響をもたらすため、慎むべきである。

【関連文献】

- 岩崎 博・蟹江 昇, 1990. 愛知県のオサムシ類. 愛知県の昆虫, (上): 309-338. 愛知県.
穂積俊文, 1990. 愛知県弥富町でカワラゴミムシ. 佳香蝶, 42 (161): 15.
吉富博之, 1994. 愛知県産甲虫類分布資料(1). 佳香蝶, 46 (178): 21-22.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

キバナキバナガミズギワゴミムシ *Bembidion aestuarii* S.Uéno et Habu

【選定理由】

生息地である河川河口部の自然海岸の消失、汚染により、生息基盤が脅かされている。

【形態】

体長 4.5mm 内外。頭部、前胸は黒色で、緑色の金属光沢が強い。上翅は広く黄色。よく似た種にキバナガミズギワゴミムシがあるが、上翅が広く黄色となることと、後脚転節が長く、腿節の 2/3 近くまで達することで区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊橋市、西尾市、愛西市、弥富市から記録がある。

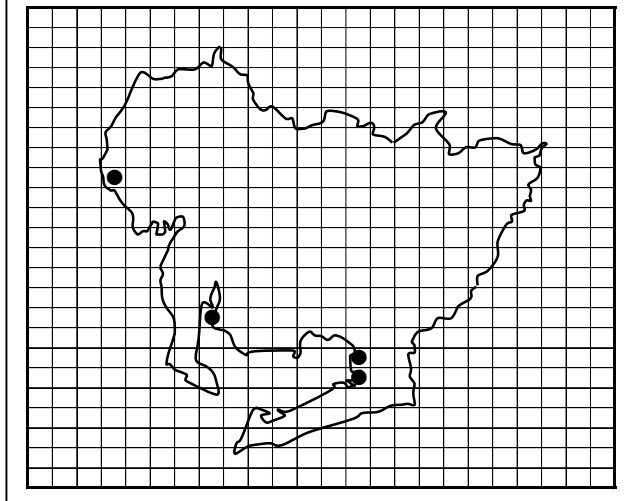
【国内の分布】

千葉県以西の本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本の特産種である。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

河口部の砂地に生息する。海棲の種で、満潮時は、完全に水没した砂中などに潜み、干潮時に露出した潮間帯で活動する。近縁のキバナガミズギワゴミムシが混生する河川では、より河口部に偏って多く見られる傾向がある。

【現在の生息状況／減少の要因】

豊橋市の豊川、梅田川、西尾市の矢作川、弥富市（旧弥富町）の鍋田川、愛西市（旧立田村）の木曾川から確認されている。生息地での個体数は決して少なくないが、生息範囲はいずれも広くななく、また限られている。減少の要因としては、生息域である河川河口部の汚れ、堤防構築などによる生息場所の消失、河口部の堰などによる生息域の塩分濃度の変化などが考えられる。

【保全上の留意点】

県内で現在生息している地域は、まだ決して少なくないので、現在の環境を維持するとともに、上流部も含めた河川の浄化、河口付近の環境回復に努力すれば、存続は可能と思われる。しかし、生息地が特殊な環境であることから、河口堰などの建設、潮間帯の汚染などによる影響に敏感であり、急速に衰退に向かう可能性も少なくない。

【関連文献】

- 森田誠司・白井勝己・蟹江 昇・長谷川道明, 1996. 愛知県におけるキバナガミズギワゴミムシ類の採集記録.
豊橋市自然史博研報, (6): 27-30.
岩崎 博・蟹江 昇, 1990. 愛知県のオサムシ類. 愛知県の昆虫, (上): 309-338. 愛知県.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

オオトックリゴミムシ *Oodes vicarius* Bates

【選定理由】

強い好水性を持つ種で、ゲンゴロウ類などの水生甲虫類と同じく、水辺環境の減少や悪化によって全国的に生息地、個体数が減少している。愛知県内ではもともと生息情報が多い種ではなかったが、近年、確認されている生息地は尾張旭市内のみとなっているのに加え、新たな生息地の発見は期待が薄いことから、県内の生息基盤は脆弱であると考えられる。

【形態】

体長 12～13.2mm、体は紡錘形でやや扁平で鈍い光沢がある。近似種のエチゴトックリゴミムシとは、下唇中央歯は先が切れ込むこと、前胸背後角部に縁毛（孔点）があること、前胸突起はふつう縁取られないことによって区別できる（中根, 1986；森, 2011）。

【分布の概要】

【県内の分布】

犬山市、小牧市、尾張旭市、豊橋市から記録がある（長谷川ほか, 2015；吉田・戸田, 2016）

【国内の分布】

本州、四国、九州。

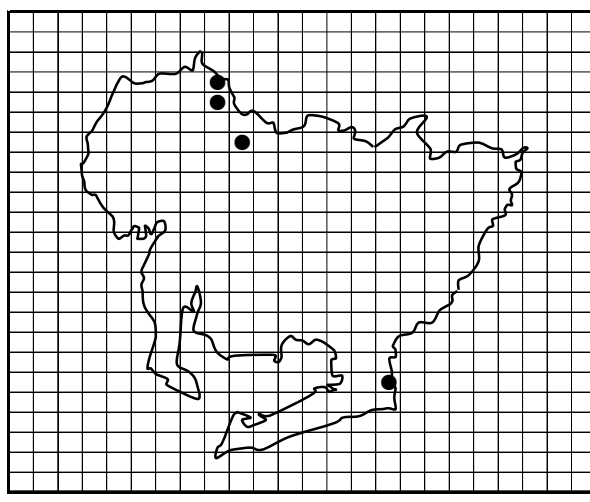
【世界の分布】

日本固有種、国外からは知られていない。

【生息地の環境／生態的特性】

低地から丘陵地にかけての溜池などの水際に生息している。強い好水性があり、時に水中に潜ることもある。成虫態で水辺周辺の土中で越冬する（須田, 1993）。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

県下で近年生息が確認されているのは、尾張旭市のため池のみである。減少の要因としては、圃場整備による水田の乾田化、池、沼の減少と環境の悪化により、生息地が失われたことが考えられる。

【保全上の留意点】

現在の生息地の環境を保全するとともに、新産地の発見に努める。生息地はため池であることが多いことから、ため池の整備工事などの際には本種の生息環境を悪化させないよう留意が必要である。

【特記事項】

隣接する三重県では、絶滅危惧Ⅱ類に指定されている（三重県農林水産部みどり共生推進課, 2015）。

【引用文献】

- 岩崎 博・蟹江 昇, 1990. 愛知県のオサムシ類. 愛知県の昆虫, (上): 309-338. 愛知県.
長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希, 2015. 愛知県のトックリゴミムシ類. 豊橋市自然史博物館研究報告, (25): 21-24.
中根猛彦, 1986. 日本の甲虫(73). 昆虫と自然, 21 (4).
森 正人, 2011. 兵庫県のとックリゴミムシ類. きべりはむし, 34 (1): 9-11.
須田 亨, 1993. トックリゴミムシ類の越冬習性について. 昆虫と自然, 28 (8): 35.
三重県農林水産部みどり共生推進課, 2015. 7 昆虫類. 三重県レッドデータブック 2015 ～三重県の絶滅のおそれのある野生生物～: 190. 三重県農林水産部みどり共生推進課.
吉田一樹・戸田尚希, 2016. 犬山市入鹿池におけるオオトックリゴミムシの追加記録. 佳香蝶, 68 (265): 11-12.

【関連文献】

上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝編, 1985. 原色日本甲虫図鑑(Ⅱ), 514pp. 保育社.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

ホラズミヒラタゴミムシ *Jujiroa troglodytes* S.Uéno

【選定理由】

豊橋市の蛇穴を基準産地として記載された種で、東海地方の固有種であるが、近年生息の確認例が減少している。

【形態】

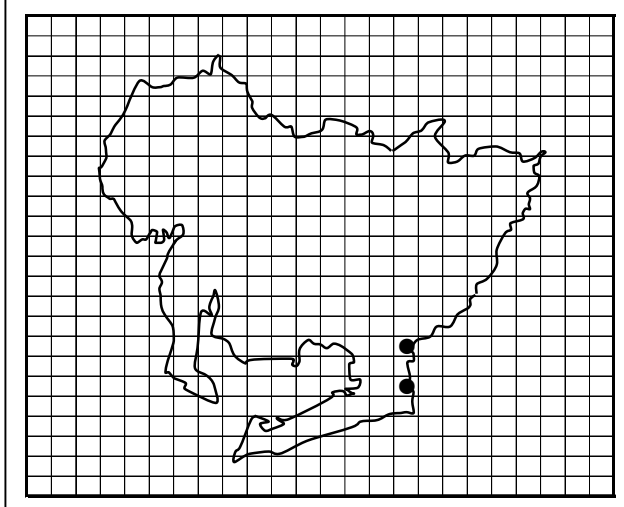
体長 11.5～12.5mm。体色はアメ色で、複眼は退化傾向にあり、小さい。頭部は複眼の位置で最も幅広。前胸背側縁は弓状に湾曲し、基部でよく収縮する。上翅は基部孔点を欠き、第3間室の孔点は2～3。各脚は長く細い。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊橋市の蛇穴および新穴周辺の特産種。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

洞窟あるいは、地中性。洞窟内部の石下などから発見される他、洞窟周辺の林床、地下浅層からも発見される。主要な生息地は地下浅層であると推定される。

【現在の生息状況／減少の要因】

基準産地の蛇穴では発見が困難になっている。新穴では現在、入り口が閉鎖されており、また調査には高度なケービング技術を要するため、最近の生息状況は未調査である。洞窟以外でも、晩秋に近くのため池畔の地下浅層が表出した場所で少くない個体が採集されたこともある。減少の原因、あるいは採集が困難になった原因には、洞窟を含む森林の乾燥化が考えられる外、マニアによる過剰採集やトラップの放置なども脅威となっている。

【保全上の留意点】

蛇穴の環境をこれ以上悪化させないこと、周辺の森林の乾燥化を防ぐことが必要である。蛇穴は縄文前期の遺跡があることから国指定の天然記念物に指定されているが、入洞に規制はない。今後各方面の関係者、専門家を交えて、洞窟動物の保全対策について検討する必要がある。

【保全上の留意点】

豊橋市の蛇穴および新穴周辺の特産種であり、県内の絶滅は種の絶滅に直結する。

【関連文献】

S. Uéno, 1955. New cave-dwelling Anchomenids of Japan. Opusc. Ent., 20: 56-64., pl.1.
岩崎 博・蟹江 昇, 1990. 愛知県のオサムシ類. 愛知県の昆虫, (上): 309-338. 愛知県.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

クビボソコガシラミズムシ *Haliplus japonicus* Sharp

【選定理由】

県内においては1957年に新川町から記録されており、平野部から丘陵地に生息したと推測されるが、平野部における多様な水域の減少で生活の場を失ったと考えられ、近年の生息情報がない。

【形態】

体長 2.8~3.4mm。体は楕円形で淡黄褐色、上翅の肩部は側方へあまり広がらない。頭頂の点刻は密。

【分布の概要】

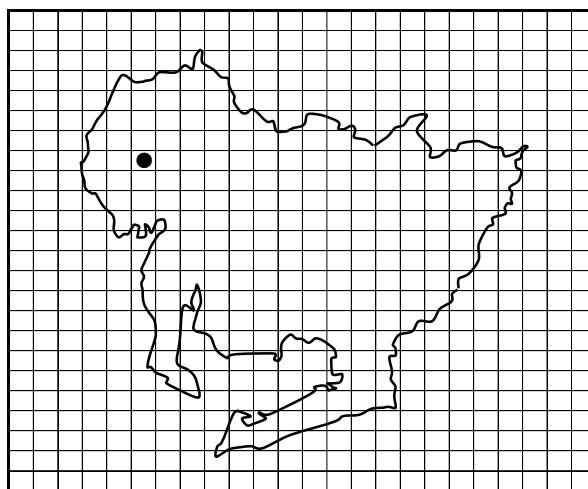
【県内の分布】

かつては平野部に普通であったとされるが、穂積・佐藤(1957)によって清洲市(旧新川町)からの記録が残されているのみである。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

河川のワンドや自然豊かな池沼、水田、休耕田などに生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

宅地開発、水田の圃場整備等による生息地の消失・改変、農薬散布や生活污水による影響を強く受けたことが考えられる。また、水草の豊富な水域に生息する種であることから、アメリカザリガニによる水域環境の悪化も影響があった可能性がある。

【保全上の留意点】

現在ある自然度の高い池や水辺環境をそのまま保全することが、本種の将来的な自然回復の可能性を残すことになるばかりでなく、多くの水生生物にとって最も有効な保全手段である。そのためにも脅威となる侵略的外来種の根絶が望まれる。

【引用文献】

穂積俊文・佐藤正孝, 1957. 東海甲虫誌(第3報). 佳香蝶, 9 (31): 1-10.

【関連文献】

中根猛彦, 1985. 日本産ヒメコガシラミズムシ属の種の再検討. 北九州の昆虫, 32 (2): 61-67.

佐藤正孝, 1984. 日本産水棲甲虫類の分類学的覚え書, I. 甲虫ニュース, (65): 1-4.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

ヒメコガシラミズムシ *Haliplus ovalis* Sharp

【選定理由】

平野から丘陵地の池沼に比較的普通に生息する種であったが、多くの水生昆虫同様に著しく減少していると考えられる。

【形態】

体長 4～4.3mm。体は長楕円形で黄褐色。上翅会合線に沿った黒色部は細く、合着した中央の紋は円形であり大きくならず、基部の横紋を欠く。

【分布の概要】

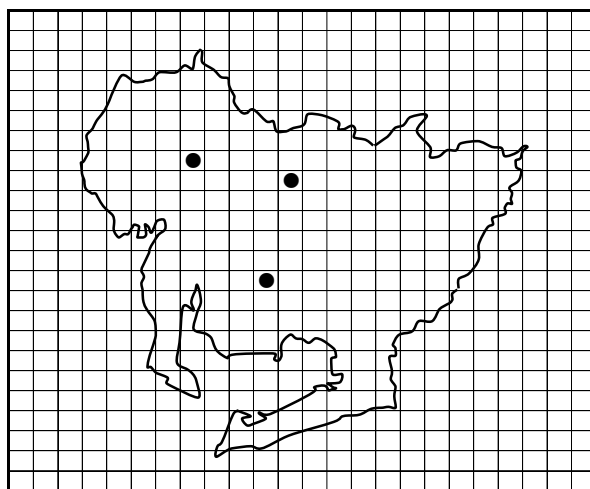
【県内の分布】

岡崎市（穂積・佐藤, 1957）、豊田市（豊田市自然愛護協会, 1996）等の記録がある。かつては平野部から丘陵地に広く分布していたと推測される。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

水草豊かな池に生息するが、生態については何も判っていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

宅地開発、水田の圃場整備等による生息地の消失・改変、農薬散布や生活污水による影響を強く受けたことが考えられる。また、水草の豊富な水域に生息する種であることから、アメリカザリガニによる水域環境の悪化も影響があった可能性がある。

【保全上の留意点】

現在ある自然度の高い池や水辺環境をそのまま保全することが、本種の将来的な自然回復の可能性を残すことになるばかりでなく、多くの水生生物にとって最も有効な保全手段である。そのためにも脅威となる侵略的外来種の根絶が望まれる。

【引用文献】

穂積俊文・佐藤正孝, 1957. 東海甲虫誌(第3報). 佳香蝶, 9 (31): 1-10.
豊田市自然愛護協会, 1996. (仮)豊田市広瀬台住宅開発事業自然環境調査報告書.

【関連文献】

中根猛彦, 1985. 日本産ヒメコガシラミズムシ属の種の再検討. 北九州の昆虫, 32 (2):61-67.
佐藤正孝, 1984. 日本産水棲甲虫類の分類学的覚え書, I. 甲虫ニュース, (65): 1-4.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

マダラコガシラミズムシ *Haliplus sharpi* Wehncke

【選定理由】

平野部から丘陵地にかけて広く分布していたと推測されるが、平野部における多様な水域の減少で生活の場を失ったと考えられる。

【形態】

体長 3.3~3.8mm。上翅の黒紋は明瞭で、基部には常に横紋があり、側方の円紋および中央紋より斜め前方の紋が明瞭。

【分布の概要】

【県内の分布】

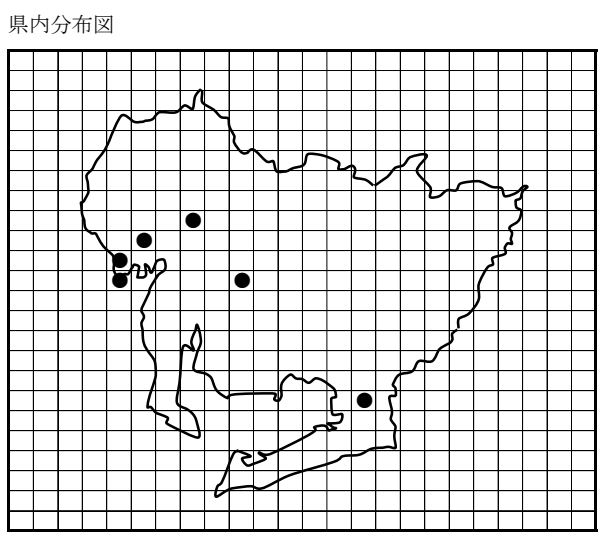
1961年に安城市（神谷, 1961）から記録されて以来、久しく情報がなかったが、2000年以降、名古屋市（大野, 2017）、弥富市、豊橋市等で確認されている。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

中国。



【生息地の環境／生態的特性】

平野部の水草が繁茂する自然度の高い池沼に生息しているが、生態については何も判っていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

宅地開発、水田の圃場整備等による生息地の消失・改変、農薬散布や生活污水による影響を強く受けたことが考えられる。また、水草の豊富な水域に生息する種であることから、アメリカザリガニによる水域環境の悪化も影響があった可能性がある。2000年以降に名古屋市や豊橋市などで発見が相次いでいることから、詳細な調査が必要である。

【保全上の留意点】

現在ある自然度の高い池や水辺環境をそのまま保全することが、本種の将来的な自然回復の可能性を残すことになるばかりでなく、多くの水生生物にとって最も有効な保全手段である。水田やその周辺の水域に生息する種であることから、ネオニコチノイド系農薬の影響についても留意する必要がある。

【特記事項】

古い記録は学名が *H. tsukushiensis* Yoshimura となっている。

【引用文献】

- 神谷一男, 1961. 東海地方の珍しい昆虫. 名古屋鉄道刊.
大野友豪, 2017. 平和公園くらしの森にてマダラコガシラミズムシを採集. 佳香蝶, 68 (268): 57.

【関連文献】

- 中根猛彦, 1985. 日本産ヒメコガシラミズムシ属の種の再検討. 北九州の昆虫, 32 (2): 61-67.
佐藤正孝, 1984. 日本産水棲甲虫類の分類学的覚え書, I. 甲虫ニュース, (65): 1-4.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

ムツボシツヤコツブゲンゴロウ *Canthydrus politus* (Sharp)

【選定理由】

水草の繁った良好な自然環境の池がほとんどなくなり、生息場所を失った。圃場整備、池への汚水、農薬の流入等が生息をおびやかしていると考えられる。

【形態】

体長 2.4～2.6mm。体は逆卵形。背面は黄～オレンジ色で強い光沢がある。上翅は肩部から下方に1紋、その内方に中央前まで広がる1紋、中央後の会合部に横長の1紋がある。体下面、肢などは赤褐色。

【分布の概要】

【県内の分布】

弥富市、名古屋市、知多市、美浜町、豊橋市などから記録がある（佐藤, 1990 等）。

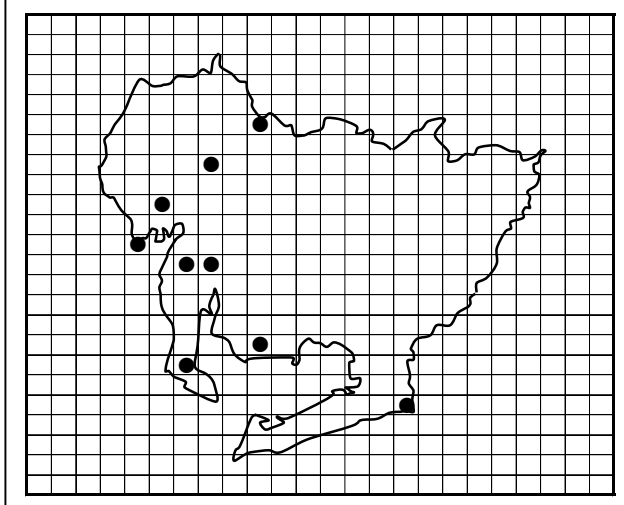
【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

中国。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

池沼で浅瀬の植物が繁茂している水域に見られ、特に夏期に多く見られる。

【現在の生息状況／減少の要因】

弥富市、大府市では近年の生息情報がある。植物が繁茂したような自然豊かな池が失われてしまったこと、また水田からの農薬の流入などが考えられる。

【保全上の留意点】

自然豊かな池やその周りの湿原環境の復元と、現在ある止水域のこれ以上の開発抑制が必要である。また、アメリカザリガニなどの駆除や、水田やその周辺の水域に生息する種であることから、ネオニコチノイド系農薬の影響についても留意する必要がある。

【引用文献】

佐藤正孝, 1990. 愛知県の甲虫類 (I). 愛知県の昆虫, (上): 204-231. 愛知県.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

キボシチビコツブゲンゴロウ *Neohydrocoptus bivittis* (Motschulsky)

【選定理由】

熱帯系の種として分布の北限であり、農薬使用などの水質環境の悪化によって生活場所も失いつつある。

【形態】

体長 3~3.4mm。体はやや長い逆卵形。頭・前胸背は淡赤褐色。上翅は暗黒褐色で、側縁は幅広く淡赤褐色となり中央前と 3/4 付近で内方に広がり翅端に達する。体下面は赤褐色。上翅は 9 条のやや強い点刻列を具える。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市、日進市などから確認されている(池竹, 2012 ; 戸田・蟹江, 2013)。

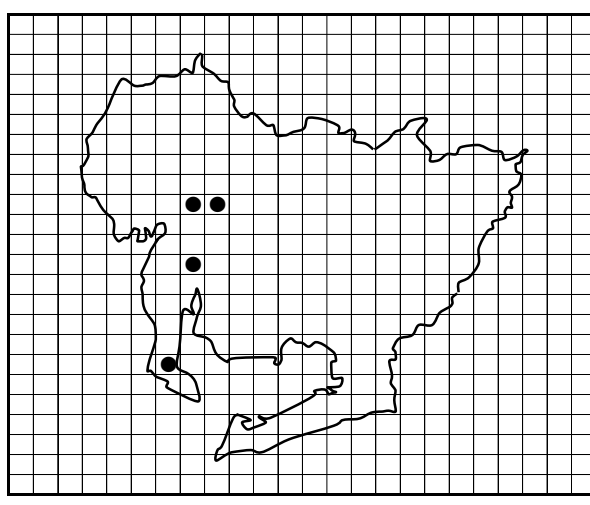
【国内の分布】

本州 (中部以西)、九州。

【世界の分布】

台湾、中国、タイ、ミャンマー、ベトナム、インド。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

池の周辺で植物がよく茂った浅瀬に生息している。生態については何も判っていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

国のランクでは絶滅危惧 I B 類に引き上げられているが、県内では複数の池で近年も生息が確認できていることから、準絶滅危惧種と判定した。周辺から流入する水質の悪化やウシガエル、アメリカザリガニ、ミシシippアカミミガメなどの外来種による影響が心配される。

【保全上の留意点】

護岸を止め、生息できる池とその周辺の植生を含めた多様性のある池の保全が必要である。

【引用文献】

池竹弘旭, 2012. キボシチビコツブゲンゴロウを愛知県名古屋市で採集. ホシザキグリーン財団研究報告, (15): 10.
戸田尚希・蟹江 昇, 2013. 愛知県から採集された甲虫 II. 佳香蝶, 65 (256): 53-56.

【関連文献】

佐藤正孝, 1984. 日本産水棲甲虫類の分類学的覚え書, I. 甲虫ニュース, (65): 1-4.
北山 昭ほか, 1993. 日本のゲンゴロウ: 47. 文一総合出版.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

トダセスジゲンゴロウ *Copelatus nakamurai* Guéorguiev

【選定理由】

河川の伏流水が湧き出してつくる水溜りのような不安定な水域に生息する種で、国内でも局地的にしか分布しない生息基盤が脆弱な種である。県内では、庄内川のみから確認されていたが、河川改修などによる治水対策によって、生活場所である氾濫源湿地が減り、最近の生息情報が途絶えている。

【形態】

体長 4~4.5mm。体は長楕円形で扁平。背面は暗赤褐色で前頭、前胸両側は淡色となる。上翅は第1~2間室と第4~第7間室は黒色となるが両端には達しなく、7条溝と1亜外縁溝を有し、間室は細点刻を装い光沢がある。体下面は橙褐色。

【分布の概要】

【県内の分布】

庄内川中流域（春日井市、名古屋市）のみから記録されている。2010年には名古屋市内の庄内川で多くの個体が確認された（田島他、2011）。

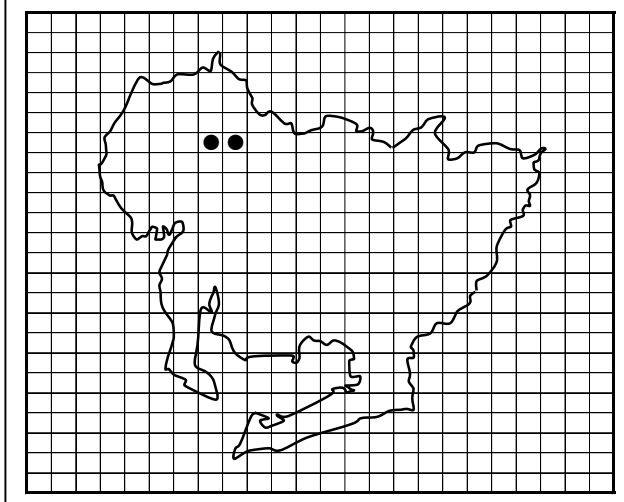
【国内の分布】

本州。

【世界の分布】

日本の特産種。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

河川敷で伏流水が湧き出でできた水溜りのような不安定な水域に生息し、ヨシ・オギの高茎草本群落が生い茂った暗い環境を好む傾向がある。干上がっているときは泥の割れ目等で見つかることがある。生息環境が不安定であるため、発見が難しく、実際にはランクより危急な状態にある可能性がある。

【現在の生息状況／減少の要因】

田島・柳田（2010）は、本種の生息を脅かす要因として、水質悪化、乾燥化、環境消失、採集圧、外来種の影響について挙げている。

【保全上の留意点】

農薬の流入防止対策と現在の高茎草本群落の面積の積極的な維持が必要である。高茎草本群落の面積減少は生息地の直接的な破壊につながる。

【引用文献】

- 田島文忠・寺西 司・長谷川道明, 2011. 名古屋市における絶滅危惧種トダセスジゲンゴロウの確認事例と生息環境. SAYABANE New Series, (1): 8-11.
田島文忠・柳田紀行, 2010. 利根川中流域における希少種トダセスジゲンゴロウの生息環境と生活史. ホシザキグリーン財団研究報告, (13): 215-226.

【関連文献】

- Satô, M., 1988. A new species of the Dytiscid genus *Copelatus* (Coleoptera) from Japan. *Elytra*, 16 (2): 123-125.
北山 昭ほか, 1993. 日本のゲンゴロウ: 115. 文一総合出版.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

シマゲンゴロウ *Hydaticus bowringi* Clark

【選定理由】

かつて県内各地の池、水田などいろいろな水域に生息し、決して珍しい種ではなかったが、現在では限られた地域に細々と生息するのみとなっている。

【形態】

体長 13~14mm。体は卵形でよく膨隆し、光沢がある。頭・前胸背は淡黄褐色で、それらの後縁中央は黒色。上翅は黒色で、中央と側縁近くに淡黄縦条があり後方で合一し、基部に円紋がある。体下面は黄~赤褐色。

【分布の概要】

【県内の分布】

平野部の池を主体に広く分布していたが、現在では三河地方の限られた水域にわずかに生息しているに過ぎないと推定される。

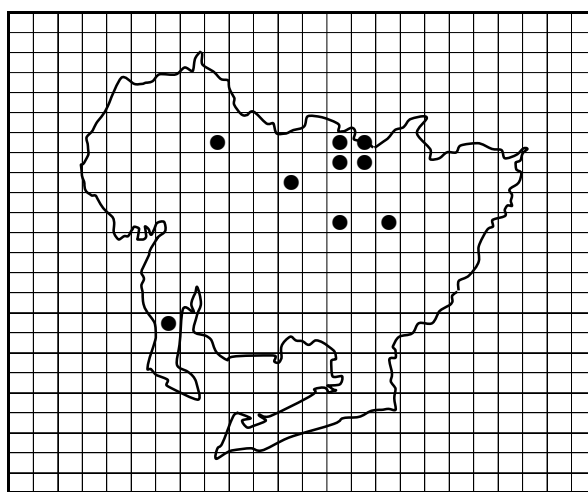
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、トカラ列島。

【世界の分布】

中国、台湾、朝鮮半島。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

各種の池、水田などの比較的いろいろな水域に生息していた。夏期にはよく灯火へも飛来する。

【現在の生息状況／減少の要因】

三河地方には現存していると思われるが、2009年以降の確認はなく、実際にはランクより危急な状態にある可能性がある。農村の高齢化などによる水田の放棄、池の消失、汚水の流入、外来種による影響などによって減少していると思われる。

【保全上の留意点】

残された生息地の保全が重要であり、アメリカザリガニ等の外来種の駆除を進める必要がある。水田やその周辺の水域に生息する種であることから、ネオニコチノイド系農薬の影響についても留意する必要がある。

【関連文献】

北山 昭ほか, 1993. 日本のゲンゴロウ: 143. 文一総合出版.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

マルチビゲンゴロウ *Leiodytes frontalis* (Sharp)

【選定理由】

草本植物の多い浅瀬に生息する微小なゲンゴロウで、かつては各地に多く見られた種であるが近年発見が難しくなっており、愛知県内での生息地は限られている。

【形態】

体長 1.5~1.8mm。短卵型で翅端部は急に細くなる。体高は高く特に腹側で強く膨隆する。背面は黄赤褐色で強い光沢がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

瀬戸市(佐藤, 1990)、春日井市、尾張旭市、名古屋市、豊田市、日進市から記録がある。

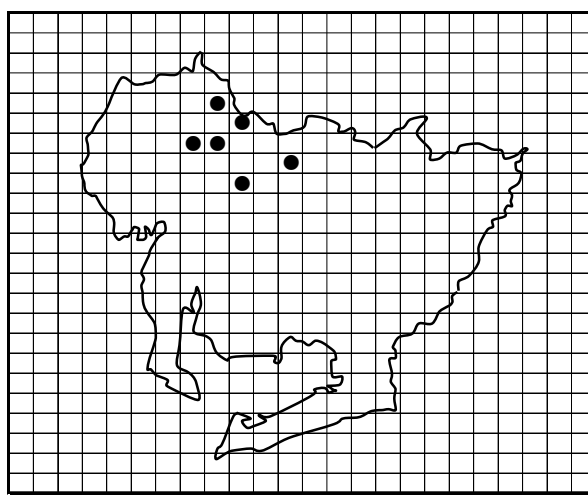
【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種、国外からは知られていない。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

ため池や湿地の水たまりなどの水深の浅い場所に棲息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

微小種であるため、過去の詳細な分布状況は把握されていないが、尾張地方の丘陵地で、現在も生息情報がある。圃場整備等による生息環境の減少、農薬等による水質の悪化が本種の減少の要因と考えられる。

【保全上の留意点】

現在の生息地の環境を保全するとともに、新産地の発見に努める。ただし、放棄水田等に生息する種であることから、今後放棄水田の遷移の進行とともに、生息地が失われる可能性がある。また、ネオニコチノイド系農薬の影響についても留意する必要がある。

【引用文献】

佐藤正孝, 1990. 愛知県の甲虫類 (I). 愛知県の昆虫, (上): 204-231. 愛知県.

【関連文献】

森 正人・北山 昭, 2002. 改訂版図説日本のゲンゴロウ, 232pp. 文一総合出版.
上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝編, 1985. 原色日本甲虫図鑑(II), 514pp. 保育社.
日進市, 2015. 第8章 第4節 コウチュウ目, 昆虫. 新修 日進市史. 日進市生涯学習課.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

サメハダマルケシゲンゴロウ *Hydrovatus stridulus* Biström

【選定理由】

県内の生息地は少なく、当地は護岸整備が進み住宅地に囲まれており、この種の存続への圧迫が強まっている。

【形態】

体長 2 mm 内外。体型は卵形で、上翅の先端部は少し尖る。背面の膨隆は強く、光沢は同所的に生息する可能性の高い近似種のコマルケシゲンゴロウやマルケシゲンゴロウよりも鈍い。同定には注意が必要で、雄は交尾器中央片先端部、雌は前胸腹板突起などを確認する必要がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市、日進市 (戸田, 2017)。

【国内の分布】

石川県 (渡部・富沢・稲畑, 2016)、福井県 (渡部・保科, 2016)、岡山県 (末長・渡部・山路, 2017)、南西諸島、奄美大島、沖縄島、石垣島、西表島、与那国島 (稲畑, 2016) など。

【世界の分布】

台湾、マレーシア、シンガポール、ラオス。

【生息地の環境／生態的特性】

ため池など、アシの茂った深い場所を好む。本種が生息する池でも、浅く水草の繁茂した場所には近似のコマルケシゲンゴロウが生息している。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在確認されている上記の名古屋市と日進市のため池以外では見つからない。生息池は住宅街に囲まれ、いつ居なくなっても不思議ではない。

【保全上の留意点】

現在の生息地の環境を保全するとともに、新産地の発見に努める。オオクチバス、ブルーギル、コイなどの外来魚の駆除を積極的に行うとともに、ネオニコチノイド系農薬の影響についても留意する必要がある。

【引用文献】

- 稲畑憲昭, 2016. サメハダマルケシゲンゴロウの日本からの初記録. さやばねニューシリーズ, (21): 46-47. 日本甲虫学会.
渡部晃平・富沢 章・稲畑憲昭, 2016. 本州におけるサメハダマルケシゲンゴロウの初記録. さやばねニューシリーズ, (23): 15-16. 日本甲虫学会.
渡部晃平・保科英人, 2016. 福井県におけるサメハダマルケシゲンゴロウの記録と生息地保全に向けた対応. さやばねニューシリーズ, (24): 33-35. 日本甲虫学会.
戸田尚希, 2017. サメハダマルケシゲンゴウが愛知県にも分布, 佳香蝶 69 (271): 47.
末長晴輝・渡部晃平・山地 治, 2017. 岡山県におけるサメハダマルケシゲンゴロウとオオマルケシゲンゴロウの初記録. さやばねニューシリーズ, (28): 51-52.

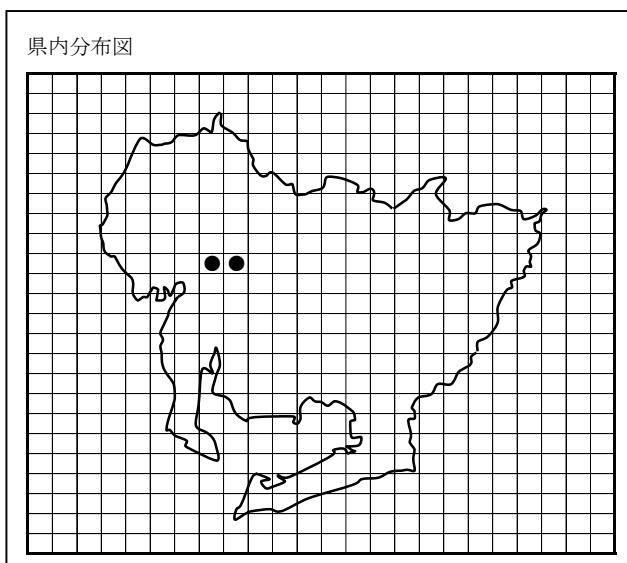
【関連文献】

森 正人・北山 昭, 1993. 図説日本のゲンゴロウ, 67pp. 文一総合出版.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)



名古屋市, 2017年8月3日, 戸田尚希 採集



県内分布図

ヤマトホソガムシ *Hydrochus japonicus* Sharp

【選定理由】

平野部の池、沼、水田に生息する種であるが、多くの水生昆虫同様に生息地の消失、悪化によって著しく減少していると考えられる。

【形態】

体長 2.5～3mm。体は長く両側はほぼ平行で、黒色で上翅は暗褐となるが緑～藍色の金属光沢を有する。付属物は黄褐色。前胸背には5～6個の凹陷があり、上翅は粗大点刻列を具える。体下面は光沢を欠き絨毛状となる。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市広野町（広, 1963; 1966）、岡崎市、名古屋市（穂積・佐藤, 1957）、尾張旭市、弥富市、知多郡東浦町から記録がある。かつては平野部の止水域に広く生息していたと推測される。

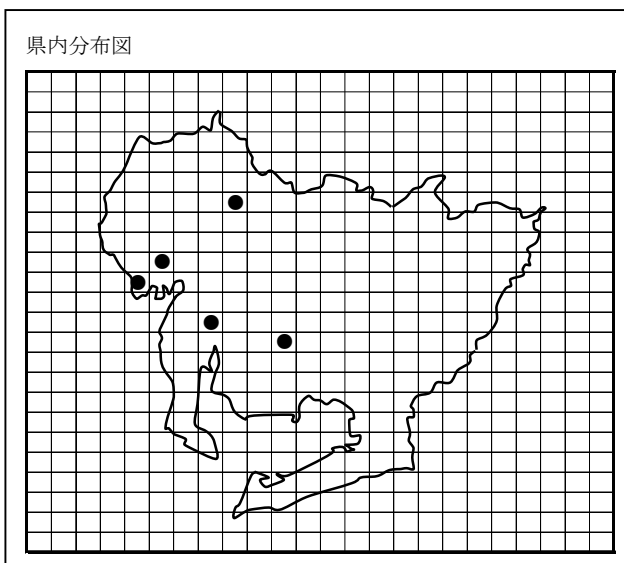
【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

東南アジア。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

水草が豊富に生育する池沼、水田などに生息する。成虫は時として灯火に飛来する。

【現在の生息状況／減少の要因】

尾張旭市、弥富市、東浦町では2011～2013年に確認されている。宅地開発、水田の圃場整備等による生息地の消失、改変、農薬散布や生活污水による影響を強く受けたことが考えられる。また、水草の豊富な水域に生息する種であることから、アメリカザリガニによる水域環境の悪化も影響があった可能性がある。

【保全上の留意点】

近年生息が確認されている水域、水辺環境をそのまま保全することが、本種の将来的な自然回復の可能性を残すことになるばかりでなく、多くの水生生物にとって最も有効な保全手段である。そのためにも脅威となる侵略的外来種の根絶と、近年水生昆虫に大きな影響が疑われているネオニコチノイド系農薬の影響の有無を調査することが望まれる。

【引用文献】

- 広 正義, 1963. 矢作川の水生昆虫. 矢作川の自然: 84-142.
広 正義, 1966. 矢作川水系における水生昆虫の群生生態学的研究. 名古屋女子大学紀要, 12: 77-206.
穂積俊文・佐藤正孝, 1957. 東海甲虫誌(第3報). 佳香蝶, 9 (31): 1-10.

【関連文献】

- 佐藤正孝, 1978. 日本産ホソガムシ科概説. 甲虫ニュース, (40): 1-3.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

アラメエンマムシ *Zabromorphus punctulatus* (Wiedemann)

【選定理由】

情報不足ではあるが、草地のアリに依存するものと思われる。大型のエンマムシ類は全国的にも減少傾向がみられ、本種も減少している可能性が高い。

【形態】

体長 7.9～8.5mm。ツヤのある黒色。前胸背と上翅が密に点刻されることから他のエンマムシ類と容易に区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

北名古屋市、瀬戸市、春日井市で確認されている。

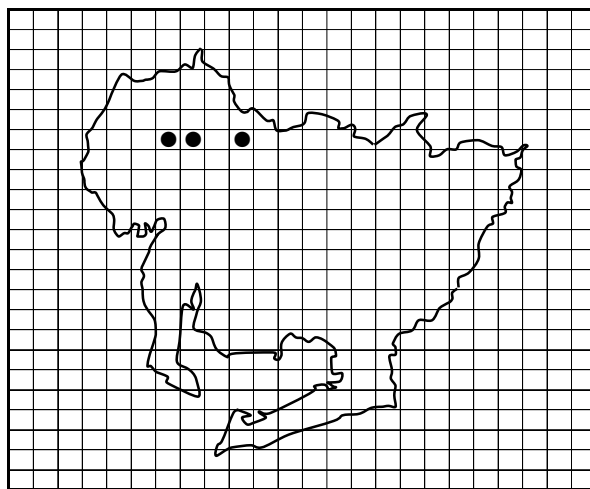
【国内の分布】

本州、九州に分布する。

【世界の分布】

台湾、朝鮮半島、インドネシア（ジャワ）、フィリピンに分布する。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

河川敷や池の周りから採集される。詳細は不明であるが、アリとの関係が深いらしい。瀬戸市では比較的安定的に観察できたが、現在その生息地は破壊されている。

【現在の生息状況／減少の要因】

河川敷などの草地で見つかることがほとんどのため、草地の減少、環境の悪化が要因だと思われる。

【保全上の留意点】

河川改修などにより湿潤な草地がなくなれば、本種の発見はより難しくなる。自然のままの河川敷草地の保全が必要である。

【関連文献】

大原昌宏, 1966. 日本産エンマムシ上科解説IV. 甲虫ニュース, (116): 8.
佐藤正孝, 1990. 愛知県の甲虫類 (I). 愛知県の昆虫, (上): 204-231. 愛知県.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

ヤマトケシマグソコガネ *Psammodius japonicus* Harold

【選定理由】

本種を含む海浜の砂浜に依存する甲虫は、砂浜の減少や護岸の影響を非常に強く受ける。県内の砂浜は改修が進み、また砂の流出による砂浜の縮小によって生息基盤が脅かされている。

【形態】

体長 3.5～4.5mm。光沢の強い黒色。前胸背板は強い点刻を疎らに散布し、側縁の刺毛を欠く。上翅上溝は細く、間室は幅広い。肩歯を欠く。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊橋市、西尾市、常滑市、知多郡美浜町から記録がある。

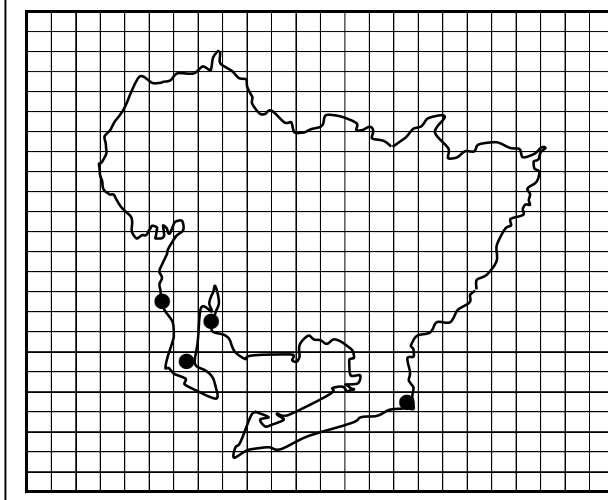
【国内の分布】

北海道、本州、隠岐諸島、四国、九州、五島列島、対馬。

【世界の分布】

日本の固有種である。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

海浜の砂地に生息する。他のケシマグソコガネ類のように、植物の根際より見いだされることは少なく、海藻や流木などの漂着物の下から見つかる。

【現在の生息状況／減少の要因】

豊橋市、西尾市、知多郡美浜町では、2018年の調査で生息が確認された。

【保全上の留意点】

砂浜に打ち上げられた海草や流木下に生息する種であるので、こうした漂流物が海岸清掃などで撤去されないよう、海岸清掃の際の教育啓蒙も必要であろう。

【関連文献】

川井信矢ほか, 2005. 日本産コガネムシ上科図説 第1巻 食糞群 1: 166. 昆虫文献六本脚.
藤岡昌介, 2001. 日本産コガネムシ上科総目録: 58-59. コガネムシ研究会.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

ヤマトアオドウガネ *Anomala japonica* Arrow

【選定理由】

本種を含む海浜の砂浜に依存する甲虫は、砂浜の減少や護岸の影響を非常に強く受ける。県内の砂浜は改修が進み、また砂自体の流出による砂浜の減少、それに伴う海浜生植物の生育場所の減少などにより生息基盤が脆弱化している。

【形態】

体長 17.0～26.0mm。腹面は赤銅色、背面は緑色から銅褐色。上翅の側縁隆起は後半 2/3 で消失し、その後から側縁膜が始まる。腹部両側には長束毛があり、前尾節板の後縁には短毛を疎らに装う。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊橋市、田原市、蒲郡市、常滑市。

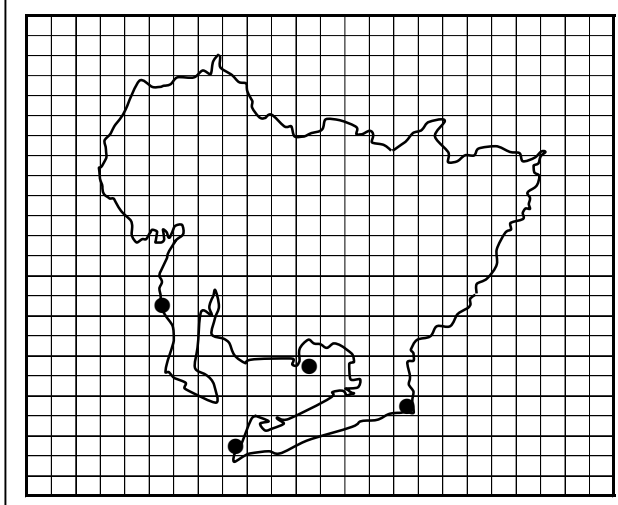
【国内の分布】

本州、佐渡島、隠岐諸島、伊豆諸島、四国、九州、五島列島、屋久島。

【世界の分布】

日本の固有種である。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

海岸よりの地域に多い。幼虫は砂地の流木下や草本の根際から見つかる。灯火によく飛来する。

【現在の生息状況／減少の要因】

砂浜のある海岸部近隣では比較的に見られるが、近縁のアオドウガネにおされているようである。砂浜の護岸などにより、生育場所である砂浜から続く草地自体が減少している。

【保全上の留意点】

砂浜の保全は当然であるが、砂浜から続く草地の保全が重要で必要である。

【関連文献】

- 松野更一・伴 憲隆・穂積敏文, 1990. 愛知県のコガネムシ科. 愛知県の昆虫, (上): 339-361. 愛知県.
酒井 香・藤岡昌介, 2007. 日本産コガネムシ上科図説 第2巻 食葉群 1: 47. 昆虫文献六本脚.
藤岡昌介, 2001. 日本産コガネムシ上科総目録: 104. コガネムシ研究会.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

アカマダラハナムグリ *Poecilophilides rusticola* (Burmeister)

【選定理由】

平地から低山地に生息する珍しいハナムグリ類。県内では、少ないながら広い範囲で記録がある。猛禽類（ワシ・タカ類）の巢中に幼虫が見つかることが知られ、営巢の減少により個体数も減っているようである。

【形態】

体長 14～20mm。赤褐色で小黑点を散在する。腹面は、赤褐色の中胸突起を除き黒色。生時、新鮮な個体は鮮やかなオレンジ色であるが、標本になると黒ずんでしまうことが多い。前脛節の外歯は 2 個。上翅には 9～10 条の縦条がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市、豊田市、蒲郡市、豊川市、豊橋市などから記録がある。

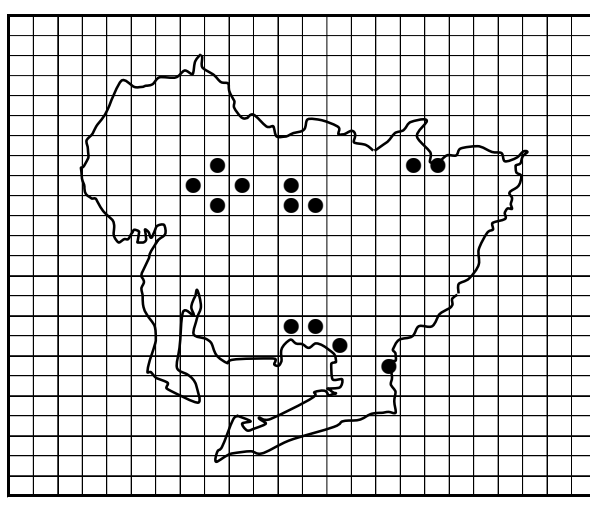
【国内の分布】

本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

済州島、朝鮮半島、シベリア東部、中国、モンゴルに分布する。大陸産は別亜種 *P. rusticola sinensis* (E.Saunders) に分類される。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

平地から低山帯にかけての雑木林に生息する。成虫は 5 月から 8 月にかけて出現し、アベマキ、コナラなどの樹液に集まる。他県では、晩夏に多数の個体が集団となって発見された例がある。幼虫は猛禽類（ワシ・タカ類）の巢中で発見され、猛禽類の営巢と強いつながりがある。

【現在の生息状況／減少の要因】

都市化や平野部の里山の雑木林の荒廃により、猛禽類（ワシ・タカ類）の営巢が減少したことに関連して減少していると考えられる。

【保全上の留意点】

猛禽類（ワシ・タカ類）の保全が必要であるが、そのためにはまず里山の雑木林の荒廃を防ぐ手だてが必要である。

【関連文献】

松野更一・伴 憲隆・穂積敏文, 1990. 愛知県のコガネムシ科. 愛知県の昆虫, (上): 339-361. 愛知県.
酒井 香・藤岡昌介, 2007. 日本産コガネムシ上科図説 第 2 巻 食葉群 1: 95. 昆虫文献六本脚.
藤岡昌介, 2001. 日本産コガネムシ上科総目録: 113. コガネムシ研究会.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

クロカナブン *Rhomborrhina polita* Waterhouse

【選定理由】

かつて東三河地方を中心に広く分布し、アベマキの樹液などに多くの個体が観察されたが、近年発見がやや困難になってきていることから、個体数が減少しているものと推測される。

【形態】

体長 25.6～32.6mm。全身漆黑。頭循は皮革状で点刻は密。前胸背板にはほとんど点刻が無く、上翅は浅く細かい点刻を散布する。中胸突起は幅よりやや弱く、先端はやや拡大して裁断状。後脛節内側の毛は赤褐色。

【分布の概要】

【県内の分布】

設楽町、新城市、豊川市、豊橋市、豊田市、岡崎市、蒲郡市などの丘陵地から山地に分布している。

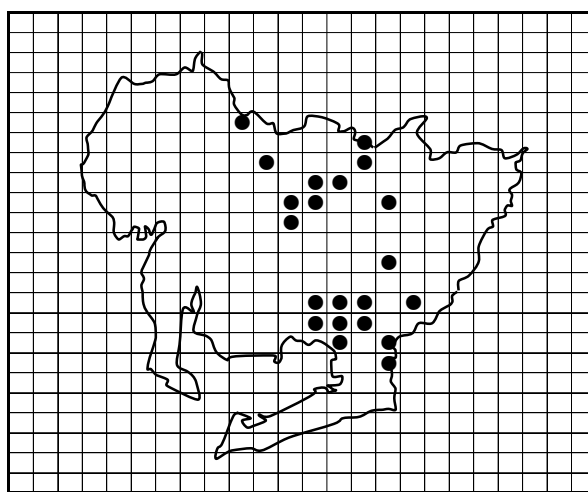
【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本の固有種である。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

丘陵地から山地にかけて生息し、あまり高標高地には生息しない。成虫の出現は、7月～9月初め、カナブンやアオカナブンより出現がやや遅い。日中活発に活動し、アベマキ、コナラなどの樹液の他、花や熟した果実にも集まる。幼虫は、朽ちた倒木の中から発見される。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在では、かつて多産した豊田市や豊橋市、岡崎市などで発見が困難になってきている。はっきりした減少の要因は不明であるが、里山の雑木林の荒廃、森林の乾燥化などによる影響が背景にあると推測される。

【保全上の留意点】

宅地開発や里山雑木林の荒廃を防ぐ手だてが必要であろう。今後とも詳細な調査の継続と、生活史の解明などを進め、減少の要因を探る必要がある。

【関連文献】

- 松野更一・伴 憲隆・穂積敏文, 1990. 愛知県のコガネムシ科. 愛知県の昆虫, (上): 339-361. 愛知県.
酒井 香・藤岡昌介, 2007. 日本産コガネムシ上科図説 第2巻 食葉群 1: 88. 昆虫文献六本脚.
藤岡昌介, 2001. 日本産コガネムシ上科総目録: 112. コガネムシ研究会.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

トゲフタオタマムシ *Dicerca tibialis* Lewis

【選定理由】

県内での生息基盤が脆弱で、主要生息地である豊田市猿投山等の環境悪化が懸念される。

【形態】

体長 15mm 前後。黒褐色で、黒紫または緑色の金属色を帯びる。上翅端部はわずかにえぐれ、両側が歯状に突出する。オスの中けい節には内方に鋭く細長い棘がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊根村(大平ほか, 1980; 蟹江・戸田, 2008)、鳳来町(大田, 1982)、豊田市(河路, 1985)などの記録がある。

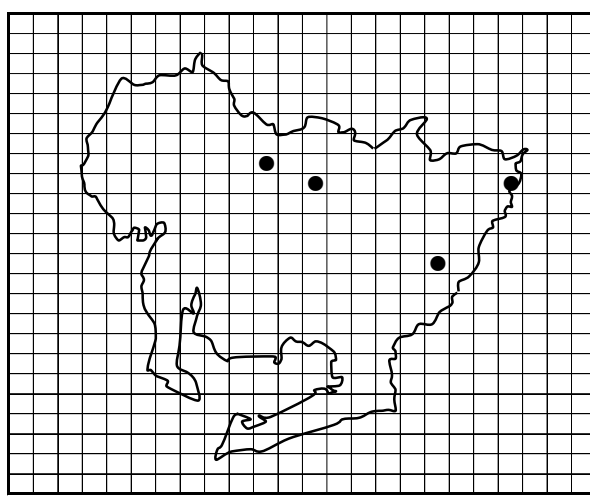
【国内の分布】

本州(関東以西)、四国、九州。

【世界の分布】

中国。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

モミ、スギ、ヒノキなどの針葉樹を寄主植物とするが、植林地での発見例は県内ではないようである。成虫は4月～7月に出現。スギの樹皮下などで成虫越冬する。

【現在の生息状況／減少の要因】

主要な寄主植物であるモミそのものが県内では少ないために、もともとの個体密度は低いものと思われる。豊田市と瀬戸市の境にある猿投山は県内でもっとも良く知られた生息地であるが、近年山林の乾燥化、それに伴うモミ林の衰退によって本種の生息が脅かされている。奥三河地方には広く分布していると思われるが、詳細な分布状況は現在のところ不明である。

【保全上の留意点】

モミ林を伴う自然林の保全。枯死木または枯枝は、特に危険がない限り林内に放置し、産卵場所を確保する必要がある。

【特記事項】

猿投山には本種以外にもモミに依存する多くの昆虫が生息しているが、その多くは周辺の生息地から孤立した状態にある。大都市名古屋近郊でこのような自然度の高い森林が残っていることは、存在そのものが貴重であり、保全に万全をきたす必要がある。

【引用文献】

- 大平仁夫・松野更一・山崎隆弘, 1980. 愛知県豊根村の動物, 鞘翅目: 195-220.
大田佳伸, 1982. 南設楽郡鳳来町でトゲフタオタマムシを採集. 三河の昆虫, 28: 119.
蟹江 昇・戸田尚希, 2008. 愛知県のタマムシ. 佳香蝶, 60 (234): 207-230.
河路掛吾, 1985. 愛知県内で採集したタマムシ3種. 佳香蝶, 37 (142): 30.

【関連文献】

- 穂積敏文, 1990. 愛知県の甲虫(II). 愛知県の昆虫, (上): 232-308. 愛知県.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

ヨコミゾドロムシ *Leptelmis gracilis* Sharp

【選定理由】

河川の中流～下流域の瀬、ワンドなどに生息する種であるが、河川の汚れや河川改修による生息地の破壊、悪化によって生息の場を失いつつある。特に生活環境として良好な水質を必要とするため、生活域が狭められ分布が限定されるようになった。

【形態】

体長 2.6～3mm。体は長く、暗褐色。眼は大きな前頭の幅の約半分。前胸背板の前縁から 1/3 近くを横切る溝を有し、後半には両側に斜めの溝がある。上翅の肩部は丸まり、後翅は退化している。肢は長く、爪は大きい。

【分布の概要】

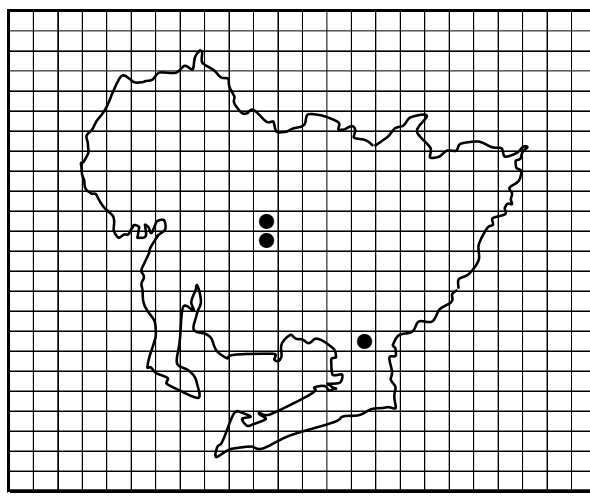
【県内の分布】

矢作川と豊川の中下流域に生息する。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

湧水のある池や河川の中下流域の瀬、河川敷内の遊水池などで、水草や水中に沈んでいる倒木などにしがみついているのが見つかる。いずれも湧水などがあり、良好な水質を必要とする。

【現在の生息状況／減少の要因】

矢作川では比較的生息地が多い。豊川では 1990 年代は多く見られたが、生息環境が変わってしまい、この十数年は未確認である。支流からの汚水の流入による水質悪化と河川改修、護岸整備などによる生息環境の消失、悪化が減少の要因と考えられる。

【保全上の留意点】

河川敷内にある湧水のある遊水池の保全が必要。特に河川改修時には十分な配慮が必要である。

【関連文献】

吉富博之ほか, 1999. 矢作川水系のヒメドロムシ. 矢作川研究, (3): 95-116.
豊橋市, 1999. 豊橋市自然環境保全基礎調査報告書.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

サトヤマシモフリコメツキ *Actenicerus kidonoi* Ôhira

【選定理由】

本属の種は愛知県に7種分布しているが、本種は2006年に愛知県原産の新種として記載された大形種である。本種の生息環境は里山周辺にあるので、人為作用による土地整備などによって生息地が失われる可能性が高い。

【形態】

体長は17~19mm。体は船形でやや扁平状。黒色で鈍い真鍮色の金属光沢を有し、体背面は灰黄色と褐色毛を混生し、上翅は体毛によるまだら状の斑紋を生じる。触角は黒色、肢は黄褐色~暗黄褐色で、脛節とふ節は黄褐色~暗黄褐色を呈する。また、前胸背板と上翅の側縁部は暗褐色を呈するので、一見してやや褐色をおびた外観を呈する (Ôhira, 2006)。



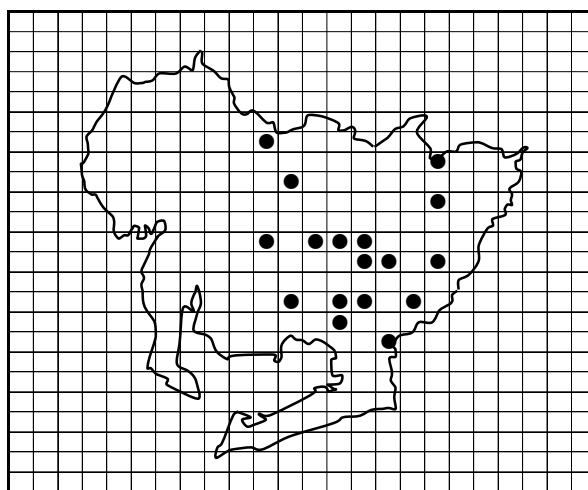
♂
岡崎市鳥川町, 2007年5月15日, 大平仁夫 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

原記載で扱われた完模式標本は岡崎市桑原町産であるが、新城市、豊川市、豊橋市など主として三河地方を中心とする里山周辺に分布が知られている。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

成虫は休耕田を含む湿潤地のある里山周辺で見出されているが、幼虫もその周辺の土壌中に生息すると思われる。成虫は4月から5月にかけて現れ、周辺の樹木の葉上やフジの花やコナラの新芽などに飛来している (大平, 2008)。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在は主として里山の谷間の湿潤地に点々と小集団で発生しているが、このような場所は開発や土地整備などの影響を受けやすいため、生息適地が減少している。

【保全上の留意点】

本種は人里周辺の里山の湿潤地に分布し、幼虫もその土壌中に生息しているため、土地整備などの影響を受けやすい。したがって、ため池~湿地~水田~周辺の雑木林などの自然環境を一体化して、その生物多様性を高めることが必要である。

【引用文献】

Ôhira, H., 2006. New or Little-known Elateridae from Japan, XLIX. Elytra, Tokyo, 34: 337-342.
大平仁夫, 2008. 三河地方が原産のサトヤマシモフリコメツキについて. 鳳来寺山自然科学博物館館報, (37): 1-2.

(2009年版を一部修正)

ジュウジミズギワコメツキ *Fleutiauxellus cruciatus* (Candèze)

【選定理由】

本種は大きな河川の河川敷の下流域に生息する種であるが、河川敷の整備や水と水辺の汚濁などの影響を受けて、生息地が減少したり消滅しているところが多い。また、本種は河川敷の自然環境を示す指標種としても重要な種である。

【形態】

体長は3.5~5mm内外で、雌は一般に大形になり、体長が7mm近くになるものがある。体はやや扁平で光沢を有し、触角は黒色~黒褐色で肢は黄褐色。上翅は翅底近くと翅端近くに図示したような橙赤色の斑紋を有する。前胸背板は顆粒状の隆起物を密に生じ、正中部には平滑縦隆線を有する。



♀
豊橋市加茂町, 1990年6月3日, 大平仁夫 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県では矢作川下流域(西尾市~岡崎市)と豊川下流域(豊川市~豊橋市)に分布することが知られていたが、最近になって矢作川ではより上流域の豊田市南部地域に分布が見出された(岩月, 2007)。

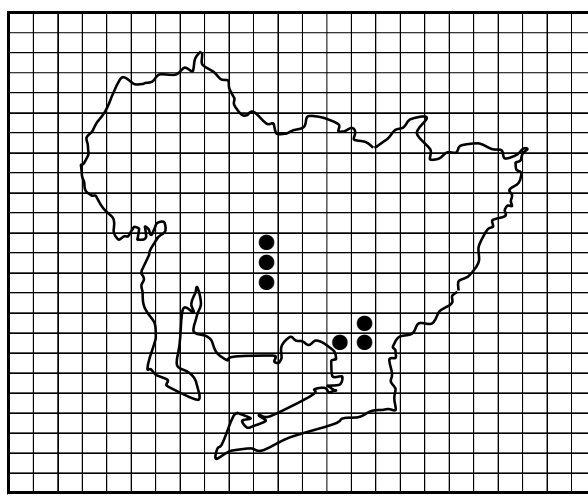
【国内の分布】

本州の関東地方から近畿地方(兵庫県)。

【生息地の環境/生態的特性】

愛知県で本種が生息する河川は、矢作川と豊川の下流域のみである。矢作川の下流域の河川敷は砂地帯であるが、豊川の下流域では砂礫の河川敷があって、本種の生息に適した環境にある。幼虫も砂礫中に生息しており、成虫は周辺にあるヤナギ類に発生しているアブラムシ類の甘露に集まっている。

県内分布図



【現在の生息状況/減少の要因】

豊川の豊川市から豊橋市にかけての河川敷では、現在でも点々と発生地があり、往時より個体数は減少しているが、まだ小集団を維持している。矢作川河川敷では、西尾市と岡崎市内の大部分では発生が見られなくなっているが、より上流域の豊田市の一部地域でまだ若干の個体が見出されている。

【保全上の留意点】

本種の生息には砂礫のある清潔な河川敷の存在が必要で、河川の水の汚濁を防ぎ、清潔な砂礫の環境を維持するとともに、周辺のヤナギなどの灌木で、成虫がアブラムシの甘露で栄養をとる環境があることも必要である。

【引用文献】

岩月 学, 2007. 矢作川流域のジュウジミズギワコメツキの生存記録. 三河の昆虫, (54): 650-651.

【関連文献】

大平仁夫, 1991. 愛知県から30数年ぶりに採集されたコメツキムシ2種. 三河の昆虫, (38): 320-321.

(2009年版を一部修正)

アカアシコハナコメツキ *Paracardiophorus sequens sequens* (Candèze)

【選定理由】

本種は海浜性で、乾燥した砂浜に生えているハマヒルガオなどの根株周辺で見いだされる種である。愛知県では伊勢湾台風ののち、海浜の護岸工事があちこちで行われたため、砂浜の多くが減少した。また、最近では三河湾の海岸造成が大規模で行われており、それでも多くの砂浜が消滅している。その他、各地で海岸への漂着物が多くなり、清潔な砂浜が減少している。本種は砂浜の自然環境を知る指標種としても重要である。



【形態】

体長は5mm内外、雌はときに体長が7mmに達する。体は黒色で上翅はやや虹色の光彩を有する。触角は黒色で肢は黄橙色を呈し、腿節とふ節の第5節は暗褐色を呈する。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県では、渥美半島の内側で大規模な港湾造成工事が行われており、そこでの発生の大部分は失われている。ただ、三河湾島嶼では、まだ砂浜が残っていて、そこでの減少は少ない。

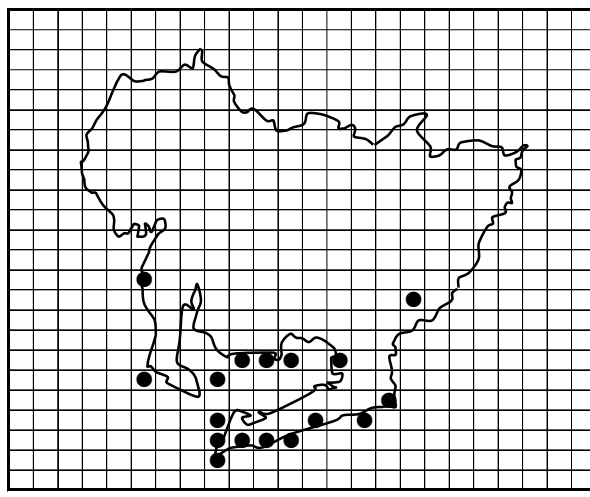
【国内の分布】

本種は北海道から九州の各地の海岸線に沿って広く分布する種であった。しかし、現在は海浜の汚濁や各地の護岸工事などで良好な砂浜が失われ、全国的にも絶滅が心配されている種になっている。

【生息地の環境／生態的特性】

本種は乾燥した海浜砂地性の種で、成虫はそこに生えている草の根株周辺に生息し、その砂地中で幼虫も育っている。従って、その砂浜が漂着物などで汚染されたり、護岸工事などで失われると、生息できなくなる。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

往時は各地の海岸砂浜に普通に見られた種であるが、現在では生息できる砂浜は減少していて、むしろまれな種になっている。

【保全上の留意点】

本種が生息する清潔な砂浜を保全して、生息地でのこれ以上の個体数の減少を防止することが必要である。また、人為的に砂浜を再生することも重要と思われる。

【関連文献】

浅岡孝知, 2003. 豊橋市金色島の昆虫. 三河の昆虫, (50): 543-546.

大平仁夫, 1997. 日本産コハナコメツキとその近似種について (甲虫目:コメツキムシ科). 比和科学博物館研究報告, (35): 1-16, 14pls.

(2009年版を一部修正)

オオキノコムシ *Encaustes praenobilis* Lewis

【選定理由】

ブナ林などに生息し、サルノコシカケ類などの菌類に集まるが、個体数は少ない。

【形態】

体長 16~36mm。黒色で前胸背と上翅の四隅に濃赤色の斑紋がある。体は長く、両側はほぼ平行。

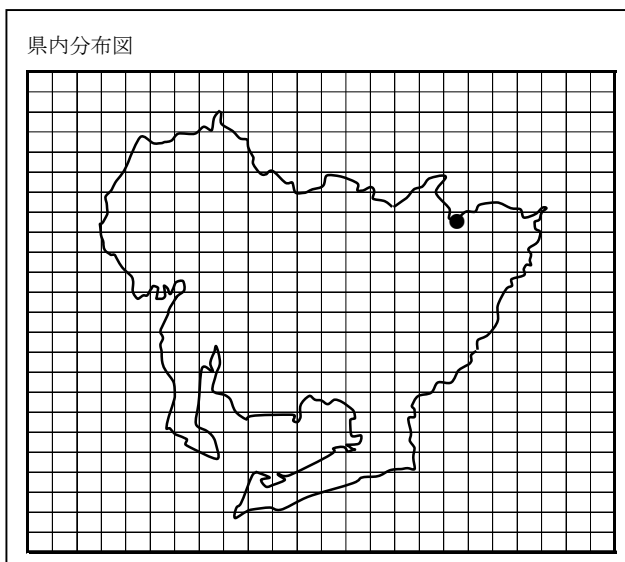
【分布の概要】

【県内の分布】

北設楽郡の山地（大野, 2001）、豊田市（旧稲武町）（佐藤ほか, 1990）。

【国内の分布】

本州、四国、九州に分布する。



【生息地の環境／生態的特性】

自然度の高い森林に生息する種で、県内では豊田市（旧稲武町）に生息地が見つかった。近年個体数が減少してきている。

幼虫は白色腐朽菌の蔓延したブナなどの朽ち木を食べて成長する。成虫は主に夜間キノコ類に集まり、これを食べる。

【現在の生息状況／減少の要因】

近年の調査から、かなり減少傾向がみられる。生息地では、シカの食害による林床の乾燥化が進行し、幼虫のホストとなる条件を満たす倒木が減少しているのが要因の一つと考えられる。

【保全上の留意点】

キノコ類の豊富な自然度の高い森林に依存しているため、乾燥など生息地の環境変化に対して留意する必要がある。

【引用文献】

大野拓夫, 2001. 宮城昆虫 22. 宮城昆虫同好会, 仙台.
穂積敏文, 1990. 愛知県の甲虫 (II). 愛知県の昆虫, (上): 232-308. 愛知県.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

ミスジナガクチキ *Stenoxylita trialbofasciata* (Hayashi et Kato)

【選定理由】

全国的にも産地は局地的で稀少な種。ブナ帯の自然林内に生息し県内での生息地は限られている。

【形態】

体長 9～12mm。体型は細長く、胸部は赤い。上翅は黒く 3 条の黄色の横帯がある。

【分布の概要】

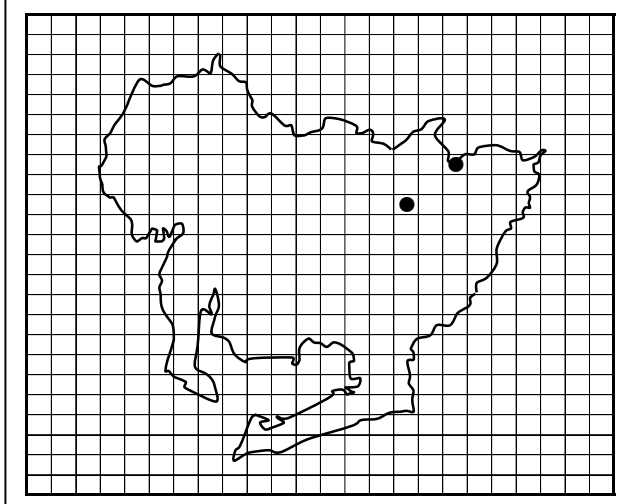
【県内の分布】

設楽町（大平ほか, 1996）、豊田市（旧稲武町）（蟹江, 1989）の 2 箇所から記録されている。

【国内の分布】

本州。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

愛知県では上記 2 箇所の原生林内にのみ生息している。成虫は 6 月に現れ、イヌブナなどの立ち枯れに集まり、幼虫もこれらに穿孔する。個体数は非常に少ない。近年生息情報が途絶えている。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息地が狭く限られており、本種の将来的な生息に危機感をもたれている。

【保全上の留意点】

愛知県内のある程度まとまった自然林は上記 2 箇所に限られ、本種をはじめ多くの固有種が生息する。これら地域の開発改変には極めて慎重な配慮が必要である。立ち枯れや倒木なども、特に危険のないものは放置することが望ましい。

【関連文献】

蟹江 昇, 1989. 愛知県面ノ木峠で採集した甲虫. 佳香蝶, 41 (157): 7-10.
大平仁夫ほか, 1996. 第 5 章 第 4 節 (8)コウチュウ類. 設楽町誌・自然編・資料編: 449-551.

【関連文献】

大平仁夫ほか, 1996. 第 7 章 昆虫類. 第 1 節 昆虫綱 コウチュウ目. 稲武町史・自然・資料編: 180-266.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

オカモトツヤアナハネムシ *Pedilus okamotoi* (Kôno)

【選定理由】

本種は全国的にも稀少な種であり、生息地も局地的な種である。生息地は通常豊かな自然林内に限られ、周辺の伐採やそれに伴う乾燥化に対して減少することが危惧される。

【形態】

体長 7.5～9.5mm。全身黒色でツヤがあり、雄の上翅後方に強い裂開状の彫刻がある。触角は雄で櫛ヒゲ状、雌は単純。

【分布の概要】

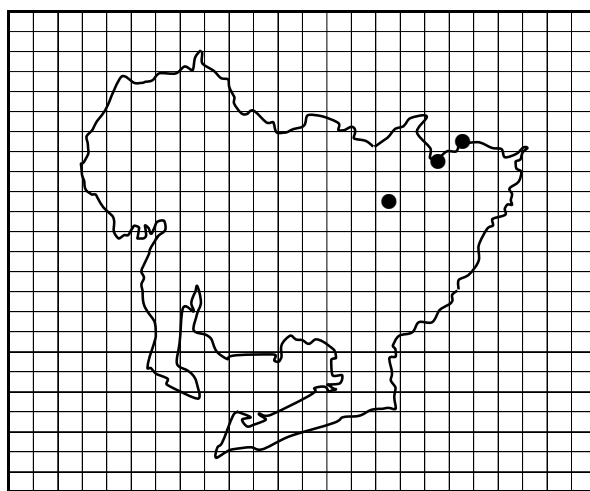
【県内の分布】

設楽町（山崎，1978）、豊田市（旧稲武町）（蟹江，1989）から記録され、ほかに豊根村からの情報がある。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

生息地は自然林内の谷筋などの湿潤な環境に限られる。成虫は 6 月に現れ、下草上を緩やかに飛翔し苔むした古い倒木に集まる。幼虫はブナ類などの腐朽した倒木に穿孔し、小動物を捕食したり時には菌類を食べたりしているものと思われる。

【現在の生息状況／減少の要因】

本種の生息には豊かな自然林と湿潤な環境が欠かせない。近年ではクワガタムシの採集のためにブナなどの倒木や朽ち木を破壊する行為が目立ち、本種ならびにこれらを食樹とする多数の貴重な昆虫たちの生息を脅かしている。

【保全上の留意点】

豊田市稲武町では県道に面する林縁の伐採について配慮が必要である。林縁の灌木は林内へ直接風が吹き込むのを和らげ排気ガスの進入を防いでいる。

【引用文献】

山崎隆弘，1978. 三河地方で採集した珍しい甲虫. 三河の昆虫, 3: 9-11.
蟹江 昇，1989. 愛知県面ノ木峠で採集した甲虫. 佳香蝶, 41 (157): 7-10.

【関連文献】

大平仁夫ほか，1996. 第 7 章 昆虫類. 第 1 節 昆虫綱 コウチュウ目. 稲武町史 -自然- 資料編: 180-266.
大平仁夫ほか，1996. 第 5 章 第 4 節 (8)コウチュウ類. 設楽町誌 -自然編- 資料編: 449-551.
穂積敏文，1990. 愛知県の甲虫 (II). 愛知県の昆虫, (上): 232-308. 愛知県.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

ヒゲブトハナカミキリ *Pachypidonia bodemeyeri* Pic

【選定理由】

自然度の高い森林中に生息するカミキリムシで、県内では最近になって豊田市（旧稲武町）から確認されたばかりで、県内での詳細な生息状況は、十分調査されていない。しかしながら、全国的に個体数の少ない稀種であること、本種の生息に足りる環境が県内では極めて少ないことから、生息基盤は、脆弱であると判断される。

【形態】

体長 11～17mm。全体に暗赤色の中型で太いハナカミキリ。頭部は大きく側頭が著しく発達する。触角は太短く、オスでも体長の 2/3 程度で、メスでは約 1/2。

【分布の概要】

【県内の分布】

本県では豊田市（旧稲武町）（杉村, 1995）と設楽町段戸裏谷から記録がある。

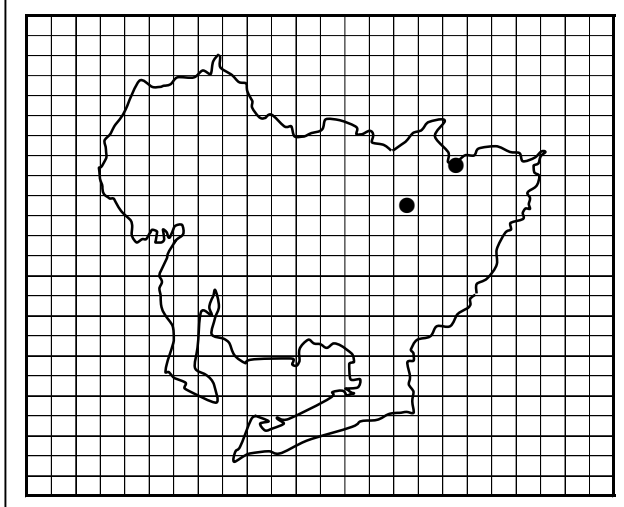
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

日本の特産種である。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

ブナ原生林など自然度の高い森林に生息する。成虫は 7～8 月に出現する。ミズメ、ブナなどの大木にできた樹洞内で生活すると考えられている。

【現在の生息状況／減少の要因】

希な種であるため、過去との生息状況の比較はできない。生息地の環境は見た目には大きな変化はない。過去にさかのぼれば、ブナ原生林の面積減少の影響を受けていることは容易に想像される。

【保全上の留意点】

生息域であるブナ林の面積をこれ以上減少させないことが必要である。現在の原生林の環境を守るため、特に原生林に接する道路では、林縁部の過度な伐採は、林内への悪影響をもたらす危険性が高く、配慮が必要である。

【引用文献】

杉村明道, 1995. 愛知県面ノ木峠にてヒゲブトハナカミキリを採集. 月刊むし, (293): 34.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

トサヒメハナカミキリ *Pidonia approximata* Kuboki

【選定理由】

太平洋型のブナ林を代表するカミキリムシで、県内では奥三河地方に分布するが、ブナ林の減少や林床の乾燥に弱く、生息基盤が脆弱である。

【形態】

体長 6.4～8.5mm の小型のカミキリムシ。脚は黄色、頭部、胸部は黒色で、上翅は黒地に黄色の紋がある。よく似た近縁種とは上翅の紋の形から区別されるが、類似種が多く同定には注意が必要。

【分布の概要】

【県内の分布】

県内で生息が確認されているのは、設楽町、豊田市（旧稲武町）、豊根村の3カ所に過ぎない。

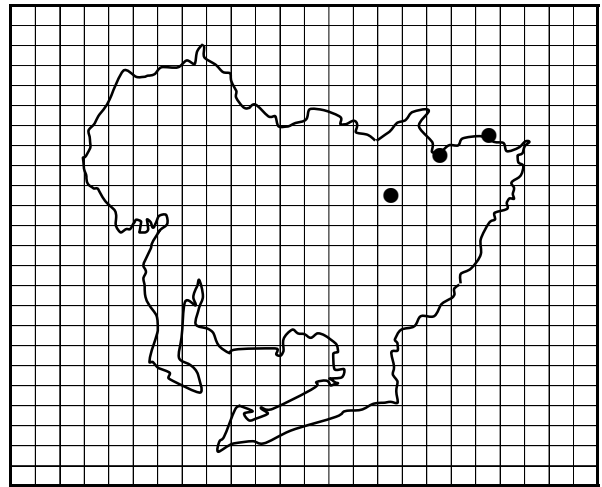
【国内の分布】

関東以西の本州、四国、九州のブナ帯に分布する。本州の分布は太平洋あるいは瀬戸内海側に限られ、日本海側のブナ林を主要分布域とする近縁種、ミワヒメハナカミキリと住み分けている。

【世界の分布】

日本の特産種である。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

ブナ林が主要な生息環境である。成虫は5～7月に出現し、コバノガマズミ、タンナサワフタギなどの花に集まる。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内には、ブナ林が非常に限られ、生息基盤そのものが脆弱であるが、生息地での生息状況は比較的安定している。

【保全上の留意点】

本種は、林内の乾燥化に敏感と考えられ、林の面積の縮小がそのまま本種の生息を脅かすことになると考えられる。ブナ林内の歩道、林道整備には注意が必要である。現在の原生林の環境を守るため、特に原生林に接する道路では、林縁部の過度な伐採は、林内への悪影響をもたらす危険性が高く、配慮が必要である。

【関連文献】

湯沢宣久・蟹江 昇・河路掛吾・竹内克豊, 1990. 愛知県のカミキリムシ科. 愛知県の昆虫, (上): 389-433. 愛知県.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

フタコブルリハナカミキリ *Japanocorus coeruleiopennis* (Bates)

【選定理由】

県内では珍しく、現在までに数例の生息情報しかない。県内での生息環境の状況については、詳細は不明であるが、生息基盤が脆弱であることが推測される。



豊田市, 2008年6月14日, 山崎隆弘 採集

【形態】

体長 18~24mm で、ハナカミキリ亜科としては最も大型の部類にはいる。前胸背は黒色の中央部を除いて黄色、上翅は美しい瑠璃色。

【分布の概要】

【県内の分布】

県内では、1982年に設楽町駒ヶ原（河路、1984）で採集された記録が知られるのみであったが、「レッドデータブックあいち県民参加調査」によって、豊田市（旧稲武町）の面ノ木園地から2006年と、豊田市（旧下山村）から2008年に新たに確認された。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布する。

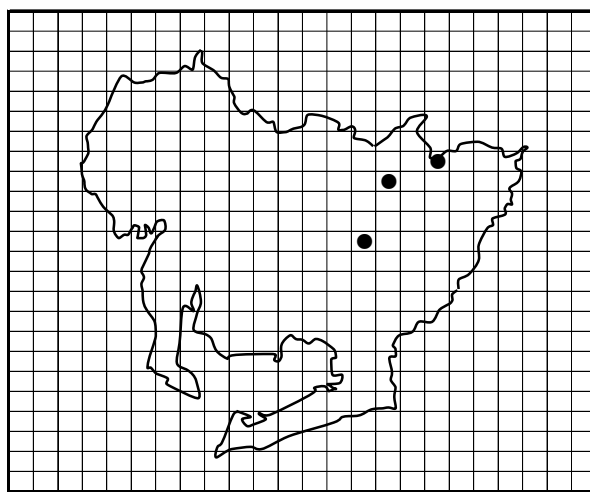
【世界の分布】

サハリンから知られる。

【生息地の環境／生態的特性】

低山地から山地にかけて生息する。神奈川県などでは低山地での生息地が知られるが、東海地方ではブナ帯に見られる。成虫は6~8月に出現し、ノバラ、リョウブ、クリ、ノリウツギ等の花に集まる。低木やササなどの割れ目に産卵し、ふ化した幼虫は地上に落下する。恐らくその後地中に潜り、低木や草本の根を食べているものと考えられている。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

県内では数例の記録があるのみで、生息密度は低く、生息基盤は脆弱であると考えられる。減少の要因としては、元々生息密度が低い地域であったのに加え、自然林が減少したことによると推測される。

【保全上の留意点】

現在確認されている地域を中心に県内に残存する自然林を保全するとともに、詳細な調査の継続によって、県内の分布と生息密度、絶滅の危険性の程度を明らかにする必要がある。

【特記事項】

本種の色彩は、アオジョウカイに擬態していると考えられており、地方ごとに色変わりするアオジョウカイの色彩変異にともなう変化が知られる。全国的には現在絶滅を危惧する状態にはないが、地域個体群として学術的に興味深い存在である。

【引用文献】

河路掛吾, 1984. 1982年駒ヶ原高原で採集したカミキリムシ. 三河の昆虫, 31: 155-158.

【関連文献】

湯沢宣久・蟹江 昇・河路掛吾・竹内克豊, 1990. 愛知県のカミキリムシ科. 愛知県の昆虫, (上): 389-433. 愛知県.
(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

ケブカマルクビカミキリ *Atimia okayamensis* Hayashi

【選定理由】

寄主植物であるネズミサシが生育するやせた土地に局所的な分布を示す。県内の主要な生息地は、尾張地方北部や東三河南部の丘陵地であるが、里山の荒廃や、宅地造成などによって生息地が減少あるいは悪化している。

【形態】

体長 5.5～8.5mm。青味を帯びた黄白色の毛に覆われた小型のカミキリムシ。上翅には 10～20 程度の黒い小円紋をもつ。

【分布の概要】

【県内の分布】

本県では、春日井、犬山など尾張北部および豊橋、新城から確認されている。

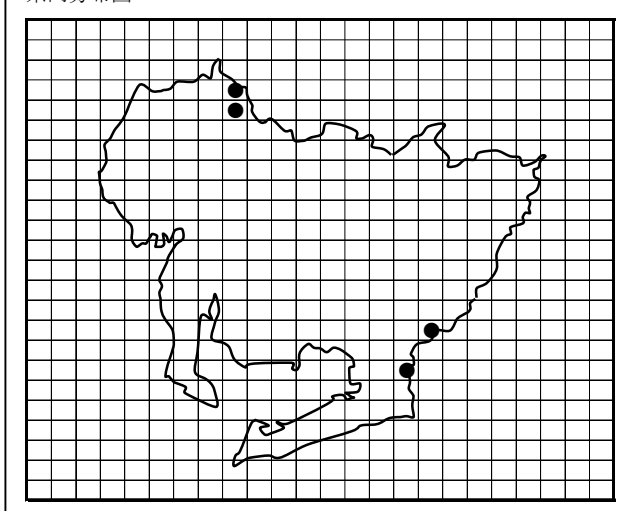
【国内の分布】

関東地方以西の本州に生息する。

【世界の分布】

日本の特産種である。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

生息地は、いずれもやせた丘陵地で、ネズミサシの自生地。成虫は早春と秋に見られ、ネズミサシの葉上などから発見される。幼虫はネズミサシの衰弱木あるいは枯れ木中で育ち、秋に新成虫となる。

【現在の生息状況／減少の要因】

もともと個体数の多い種ではないが、生息地そのものが宅地造成などによって減少している。また、生息地の多くは、少なからず人による管理が行われてきた里山で、管理放棄による生息地の遷移の進行により生息環境が悪化している。

【保全上の留意点】

生息環境を維持することが重要であるが、背景には、管理放棄による里山の荒廃という社会的な問題との関連が推定されるので、簡単ではない。

【関連文献】

湯沢宣久・蟹江 昇・河路掛吾・竹内克豊, 1990. 愛知県のカミキリムシ科. 愛知県の昆虫, (上): 389-433. 愛知県.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

ヒゲジロホソコバネカミキリ *Necydalis odai* Hayashi

【選定理由】

自然度の高い森林中に生息するカミキリムシで、県内では設楽町の原生林のみから知られている。

【形態】

体長 14～25mm。ホソコバネカミキリの仲間は県内に 5 種が生息するが、いずれも上翅が非常に短く、頭部と前胸背を合わせた長さとはほぼ同じ程しかない。類似種とは、触角の 8～10 節が白色であることから区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

県内では設楽町（水谷，1981）の原生林のみから知られる。

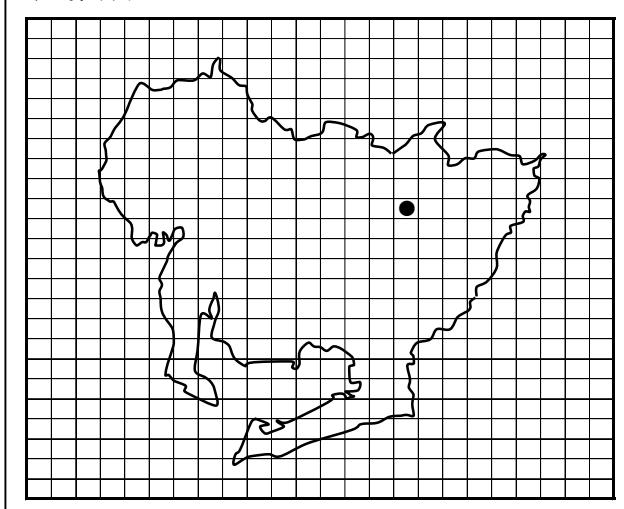
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

日本の特産種である。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

ブナ林に生息するが、一般的に自然度の高い森林に依存する。成虫は 7～8 月に出現し、ミズナラの立ち枯れ、腐朽部に集まる。幼虫もミズナラの立ち枯れ、朽木を食べる。

【現在の生息状況／減少の要因】

1980 年頃に設楽町の原生林内で本種の発生木が発見され、多数の個体が確認された。近年でも未公表ながら採集されている。他府県にくらべてブナ林の面積が狭いことを考慮すると、生息地盤が脆弱であることは間違いない。周辺の環境は、1980 年当時と大幅な改変はない。

【保全上の留意点】

生息域であるブナ林の面積をこれ以上減少させないことが必要である。現在の原生林の環境を守るため、特に原生林に接する道路では、林縁部の過度な伐採は、林内への悪影響をもたらす危険性が高く、慎重な配慮が必要である。また、原生林内または周辺の枯死木は、本種および朽ち木生の昆虫類の重要な発生木となる可能性が高いので、むやみに切り倒したり、除去したりしないよう林業関係者には留意されたい。

【引用文献】

水谷高弘, 1981. 愛知県にてヒゲジロホソコバネカミキリを採集. 月刊むし, (124): 33.

【関連文献】

佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

オオホソコバネカミキリ *Necydalis solida* Bates

【選定理由】

自然度の高い森林中に生息するカミキリムシで、県内では豊田市（旧稲武町）のみから知られる。他府県にくらべ生息基盤が脆弱である。

【形態】

体長 11.5～30mm。頭部と胸部は黒色、上翅は黄褐色だが、オスでは基半部を除き黒色となることも少なくない。脚は黄褐色で、後腿節基半部は黒色となる。

【分布の概要】

【県内の分布】

県内では豊田市（旧稲武町）（竹内, 1983）から確認されているだけであるが、未公表ながら設楽町のような原生林からも生息情報が得られている。

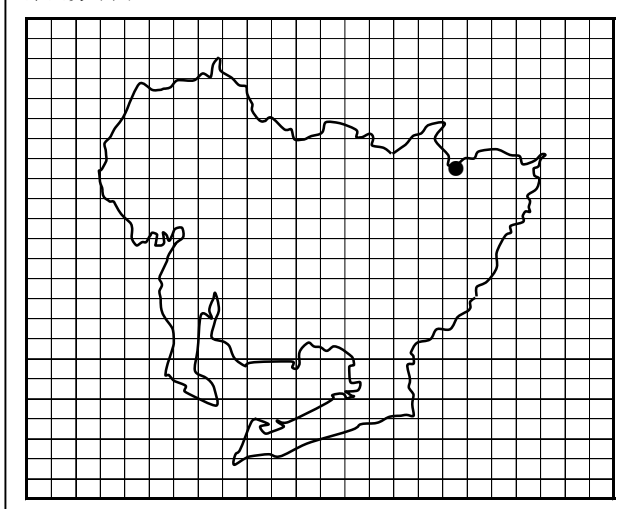
【国内の分布】

本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

日本の特産種である。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

ブナ林に生息する。成虫は7～8月に出現し、ブナの立ち枯れに集まる。幼虫もブナの立ち枯れ材を食べる。

【現在の生息状況／減少の要因】

本種はホソコバネカミキリ類の中では比較的優占な種の部類に入るが、西日本での分布は稀薄となり、県内では確認が極めて困難な種である。本種が初めて発見されて以来、追加の生息情報はわずかで、個体数はかなり少ないものと考えられる。過去にさかのぼれば、ブナ原生林の面積減少の影響を受けていることは容易に想像される。

【保全上の留意点】

生息域であるブナ林の面積をこれ以上減少させないことが必要である。現在の原生林の環境を守るため、特に原生林に接する道路では、林縁部の過度な伐採は、林内への悪影響をもたらす危険性が高く、慎重な配慮が必要である。また原生林内または、周辺の枯死木は、本種を初め色々な昆虫類の発生源となるので、特に危険がないかぎり切り倒したり、除去したりしない配慮が必要である。

【引用文献】

竹内克豊, 1983. 愛知県奥三河産カミキリムシ数種. 月刊むし, (154): 8.

【関連文献】

佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

ヨコヤマヒゲナガカミキリ *Dolichoprosopus yokoyamai* (Gressitt)

【選定理由】

自然度の高い森林中に生息するカミキリムシで、全国どこでも個体数が少ない。県内では奥三河に僅かに残されたブナ林に依存して生息しているが、他府県にくらべ存続基盤が脆弱であると判断される。

【形態】

体長 25～30mm の大型のフトカミキリ。黒色で、表面は灰白色の毛に霜降り状に覆われる。触角はオスでは体長の約 1.8 倍、メスでは体長の約 1.1 倍。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市（旧稲武町）、設楽町、豊根村（旧富山村）の 3 カ所から知られる。

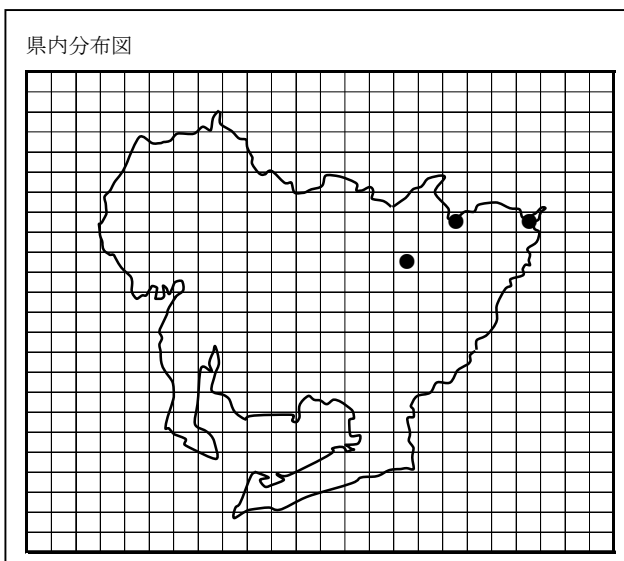
【国内の分布】

本州、四国、九州に分布。

【世界の分布】

日本の特産種である。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

ブナ林に生息する。成虫は 8 月に出現し、ブナの生木に見られる。夜行性で、昼はブナの大木の梢ひこばえ付近に潜み、夜になると幹を徘徊するといわれるが、詳しい生態は不明。灯火に飛来する個体が採集される例が多い。幼虫もブナの生木を食べる。

【現在の生息状況／減少の要因】

個体数はかなり少ないものと考えられる。生息地の内、豊田市（旧稲武町）と設楽町について、生息環境は見た目では大きな変化はないが、採集が難しい種であるだけに正確な生息状況の把握は困難である。しかし、自然度の高いブナ林にしか生息できない種であるので、過去にさかのぼれば、ブナ原生林の面積減少の影響を受けていることは容易に想像される。

【保全上の留意点】

生息域であるブナ林の面積をこれ以上減少させないことが必要である。現在の原生林の環境を守るため、特に原生林に接する道路では、林縁部の過度な伐採は、林内への悪影響をもたらす危険性が高く、慎重な配慮が必要である。

【関連文献】

佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

キヌツヤミズクサハムシ (スゲハムシ) *Plateumaris sericea* (Linnaeus)

【選定理由】

寒冷な湿原・湿地に生息する代表的な昆虫で、本県では限られた場所に残存しているにすぎない。開発や自然環境の変化に伴い減少傾向にある。

【形態】

体長：♂6.5～7.4mm、♀7.0～8.8mm。背面の色彩は銅色の個体が多いが変異が大きく、黒、紫、青、緑、黄、赤などの個体があり色彩変異が大きい。前胸背板には横シワが発達し、中央縦溝は深く連続する。背面は金属光沢があり、すべての足は金属色である。

【分布の概要】

【県内の分布】

北設楽郡設楽町裏谷(長谷川・吉富, 1998)、
豊田市田之土里湿地(高橋, 1988)。

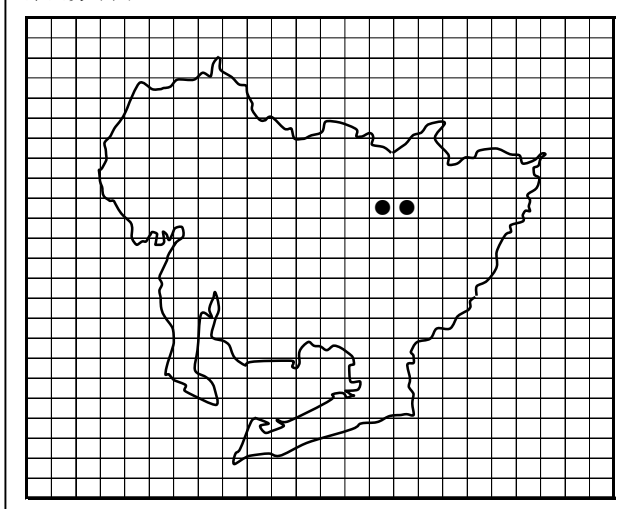
【国内の分布】

北海道、本州、九州、佐渡。

【世界の分布】

南千島、サハリン、カムチャッカ、アムール、ハバロフスク、プリモルスキー、朝鮮半島、中国、モンゴル、中央アジア、ヨーロッパ。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

成虫は5～6月頃に出現し、スゲ類、イグサ属、ガマ属、アヤメ属、ミクリ属、ミズバショウなど多様な植物に訪花する。

【現在の生息状況／減少の要因】

湿原・湿地特有の種である。寒冷地に多い種で、長野県や岐阜県では産地も個体数も多いが、こうした環境の少ない県下での元々の生息域も山間部に限られていたものと思われる。今後、長期的な温暖化による影響で乾燥化が進めば、生息環境の悪化により衰退が心配される。

【保全上の留意点】

生息地の湿原・湿地の保全は、周辺部を含めた水源地の確保が重要である。広範囲にわたる森林の保護などの保全策を講じることが重要である。

【特記事項】

本種の正確な生息状況はまだ不十分な点が残されており、さらなる詳しい継続調査を必要とする。

【引用文献】

長谷川道明・吉富博之, 1998. 愛知県のネクイハムシ類. 豊橋市自然史博物館研究報告, (8): 41-48.
高橋和宏, 1988. ネクイハムシ類 1987年の採集記録. DONACIIST, (2): 22.

【関連文献】

木元新作・滝沢春雄, 1994. 日本産ハムシ類幼虫・成虫分類図説. 東海大学出版会.
野尻湖昆虫グループ, 1985. 日本のネクイハムシ. 野尻湖昆虫グループ.
林 成多, 2004. 総説・日本のネクイハムシ亜科. ホシザキグリーン財団研究報告, (7): 29-126.

(2009年版を一部修正)

オオミズクサハムシ *Plateumaris constricticollis* (Jacoby)

【選定理由】

東北日本と日本海側に偏った分布をする本種にあって、本県の生息地は飛び地的な存在である。東京以西の太平洋側では唯一の産地であるが、生息基盤が極めて貧弱である。形態的には、岐阜北部から富山県にかけて分布する亜種トヤマオオミズクサハムシと、中国山地に分布する亜種チュウゴクミズクサハムシの中間的な特徴をもち、両者をつなぐ存在として学術的に貴重である。

【形態】

ネケイハムシ類では最大の種で、北日本に分布するものでは12mmを越えるが、県内の個体群は小形で8~10mm。金銅色で、触角は黒色。腹部第1節はそれ以降の節の和より短く、前胸背には皺がない。

【分布の概要】

【県内の分布】

面ノ木峠(豊田市~設楽町)周辺(長谷川・吉富, 1998)。

【国内の分布】

北海道、本州に分布する。分布は日本海側の山地に偏る傾向があり、特に中部以西では局所的。糸魚川-静岡構造線より西側の本州中央部(富山県・岐阜県・愛知県)、中国山地(兵庫県・岡山県)。

【生息地の環境/生態的特性】

ヤマドリゼンマイ、オオバギボウシ、サワアザミ、ハンノキなどが自生する山地の湿地。成虫は6月頃出現し、スゲ類、ハンゴンソウ、オオバギボウシなどの葉上に見られる。幼虫は地中でスゲ類の根を食べる。成虫は富山県や中国山地の個体群ではスゲ類の花あるいは葉を食べているのが観察されているが、北海道や長野県北部などの個体群では成虫期には摂食しないのではないかと考えられている。県内では後食植物は確認されていない。

【現在の生息状況/減少の要因】

面ノ木峠周辺の湿地2ヶ所から確認されている。そのうち、初めに確認された生息地の環境は、発見当時(1997年)と表面上大きな変化はない。長期的には温暖化(あるいは乾燥化)と山地の湿原の減少が本種の減少の要因になると考えられる。

【保全上の留意点】

生息地の湿原は、現在設楽町の天然記念物として湿地植物の保護施策がとられている。現在の状態の維持と、周辺部の森林を含めた保全策が執られ続けるられる限り絶滅の心配は当面のところないと考えられる。

【特記事項】

林(2004)は、本種をエゾオオミズクサハムシ、シナノミズクサハムシ・トヤマミズクサハムシの3亜種に分類し、本個体群をトヤマミズクサハムシ *P. c. toyamaensis* としている。

【引用文献】

長谷川道明・吉富博之, 1998. 愛知県のネケイハムシ類. 豊橋市自然史博物館研究報告, (8): 41-48.
林 成多, 2004. 総説・日本のネケイハムシ亜科. ホシザキグリーン財団研究報告, (7): 29-126.

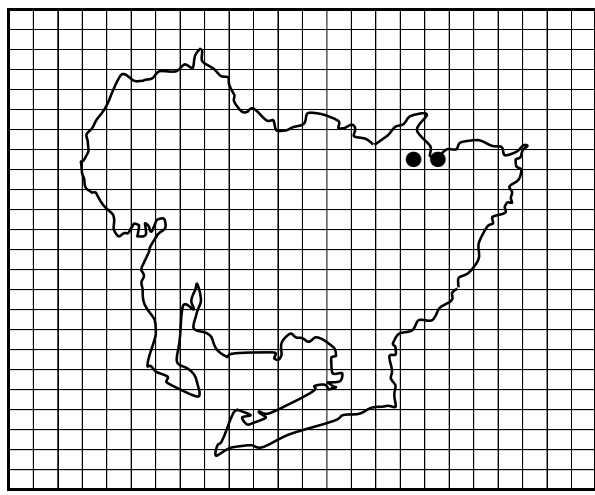
【関連文献】

野尻湖昆虫グループ, 1985. 日本のネケイハムシ. 野尻湖昆虫グループ.



設楽町, 2006年6月, 長谷川道明 撮影

県内分布図



ヒシチビゾウムシ *Nanophyes japonicus* Roelofs

【選定理由】

本種はヒシに強く依存しており、ため池のヒシがなくなると生存できなくなる。本来特に珍しい種ではないが、微小種であるため、生息情報が乏しく、県内での生息状況の変化について正確なことは不明である。しかしながら、主要生息地であるため池の環境が著しく悪化している現状から判断すると、絶滅の可能性が増大していると考えられる。

【形態】

本州産のチビゾウムシ類では比較的大型で体長 2.1~2.2mm、体色は黒色または褐色。腿節に歯がない。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊明市、東浦町、日進市。

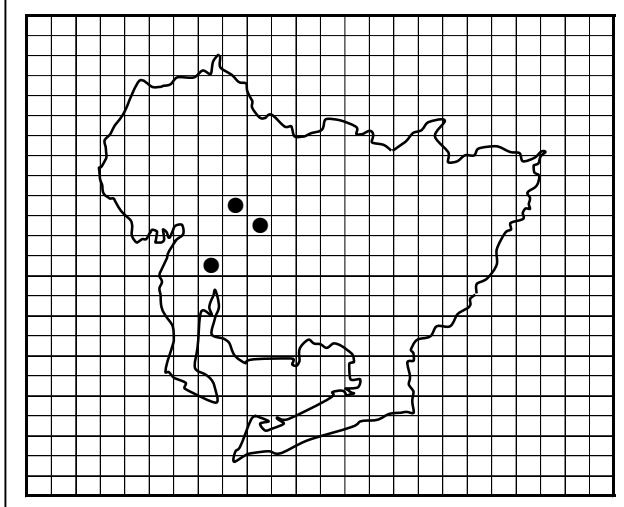
【国内の分布】

本州、九州に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

池に生えるヒシの葉のフロート部分に産卵する。成虫はヒシの葉を後食し、小さな丸い穴をたくさんあける。成虫を見つけられなくても、食痕を調べることで生息の確認が可能である。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

豊明市の長間地池では非常に多くの個体を確認することができた。東浦町鰻池では小さなため池に僅かばかり生息している。しかし、他地域ではヒシの自生する池をいくつか調べたものの確認できなかった。

長間地池の環境が現状どおり維持されれば、同地での個体群が急激に減少することはないと思われるが、付近に別の生息地がないため、長間地池の環境が損なわれると、県内での絶滅に直結する恐れがある。かつてはヒシの生えるため池は随所にあり、本種の生息地も広がったのではないかと考えられる。しかし都市化による埋め立て、農業整備の一環としてのため池の改修、侵略的移入種の増殖などにより生息地の消失・分断化が進み、本種が発見された時にはすでに僅かな生息地を残すだけになっていたという可能性が強い。

【保全上の留意点】

ため池の維持管理については、そこに生息する生物種の保全についても併せて考慮して行う必要がある。また、ため池周辺の環境保全もため池に生息する希少種の保全には必要なことである。

【関連文献】

豊明市史編集委員会, 2003. 豊明市史資料編補 7 自然目録, 354pp.

(2009年版を一部修正)

バッキングムカギアシゾウムシ *Bagous buckingami* O'brien et Morimoto

【選定理由】

カギアシゾウムシ類は水辺の環境に特化したグループで、いずれの種も記録は少ない。また、灯火採集などで偶発的にとれることが多く、生態が分からず分布や個体数の推定ができていない。いくつかの種ではホストが判明しており、産地で個体数は少ないわけではないが産地は飛び石状である。

本種はガガブタをホストとすることが分かっており、比較的記録が多い種である。ただ、ガガブタの絶滅が危惧されるので当然本種も危険度が高いと考えられる。

【形態】

この属の特徴は脛節後半部で非常に強く内湾しカギ状を呈することである。別系統のイネミズゾウムシもやや弱いものの同様な形態を持つことから、茎などにしがみつくのに適しているのではないかと考えられる。カギアシゾウムシ類はよく似た種が多く同定は難しい。本種は他種と比べて顕著に細長く容易に判別できる。体長は3~3.5mm。



【分布の概要】

【県内の分布】

常滑市、名古屋市など。

【国内の分布】

本州、九州に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

ため池に生えるガガブタをホストにしている。ガガブタがあればどこにでも生息しているわけではなく、好みの環境があるかもしれない。灯火に飛来する習性があり、かなり遠方まで移動できると思われる。

【現在の生息状況／減少の要因】

古い記録がほとんどなく、個体数が減少しているかは不明である。最近ではあるが採集されているので、著しく減少してはいないと思われる。ただし、産地は局限されてしまった可能性が高い。要因としてはため池の消失、改修が大きいと考えられる。また、農薬の影響も無視できないと思われるが、どのように影響を受けるかという研究はないので想像の域を出ない。

【保全上の留意点】

ホストであるガガブタを保護することである。できれば一つの池だけではなく、周辺の池にもガガブタが生えていることが望ましい。越冬場所は分かっていないが、周辺の土手や林縁の可能性が高いので、それら周囲の環境も含めて保全を考える必要がある。

【関連文献】

C.O'Brien, I.Askevold & K.Morimoto, 1994. Systematics and evolution of weevils of the genus *Bagous* Germar (Coleoptera: Curculionidae) II. Taxonomic treatment of the species of Japan. ESAKIA, (34): 1-74.
村上哲夫, 1986. 猪高緑地内の池の魚類と底生生物. ため池の自然, (4): 7-8.

(伊澤和義)

ハマベゾウムシ *Aphela gotoi* (Chûjô et Voss)

【選定理由】

砂浜が発達する自然海岸に限って生息するゾウムシで、愛知県知多半島産および三重県津市産の標本を基に記載された種である。知多半島では既に絶滅したとみられていたが、2015年に再発見された。1992年に発見された表浜の生息地では、比較的良好な環境が保たれている。近年、アマモ場の復活とともに各地で再発見されており、伊勢湾の対岸である三重県の海岸でも再発見されたことから、ランクを準絶滅危惧に下げた。

【形態】

体長 3.8～5.2mm。赤褐色で脚は頑強で短く、ずんぐりした体型をした小型のゾウムシ。前けい節端の外角は細長く突出し、後けい節端には三日月型の外室がある。

【分布の概要】

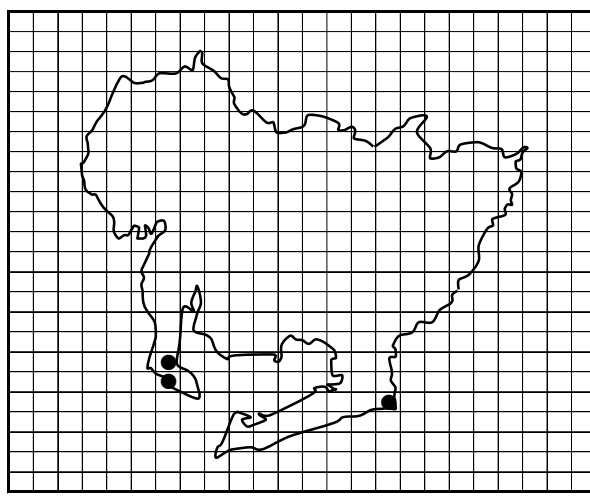
【県内の分布】

南知多町（絶滅）、美浜町（長谷川ほか、2016）、豊橋市（長谷川・蟹江、1990）。

【国内の分布】

本州、九州に分布する。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

砂浜の発達した海岸に生息し、海岸に打ち上げられたアマモを食べる。成虫は、ほぼ一年中みられるが、5月頃に最も多く、打ち上げられたアマモの下、あるいは砂中に埋まったアマモから見つかる。

【現在の生息状況／減少の要因】

1956年に南知多町内海海岸で発見されたのが県内での最初の記録で、この標本が副基準標本に指定されている。しかし、60年代以降の伊勢湾・三河湾の環境悪化とそれにとまうアマモの壊滅的な減少から伊勢湾、三河湾沿岸からは姿を消した。もうひとつの生息地である豊橋市の表浜海岸では、比較的安定して生息しているが、この数年はアマモの漂着量が少なく心配される。その一方で知多半島では2015年に約60年ぶりに再発見され、続いて隣県の三重県津市の海岸でも再発見されており、伊勢湾、三河湾のアマモの復活に伴い全県的には回復傾向がみられる。

【保全上の留意点】

現在の生息地である豊橋市の表浜海岸は、県内に残された数少ない自然海岸で、これまでの調査から、高い生物多様性を維持する極めて重要な地域である。現在残る自然海岸の保全はもちろんのこと、現在の生物多様性を維持するには背後の山林の保全も必要である。さらに海水を汚さないために、周辺水域へ汚水が流入することのないよう、十分な配慮が必要である。なお、豊橋市表浜での個体群を支えているのは、浜名湖から漂着するアマモであり、浜名湖の環境保全も本種の保全には重要である。

【特記事項】

豊橋市の表浜海岸は、日本昆虫学会自然保護委員会によって、「昆虫類の多様性保護のための日本の重要な地域」に選定されている。

【引用文献】

長谷川道明・蟹江 昇, 1992. 豊橋市表浜海岸の海浜性甲虫類. 豊橋市自然史博研報, (8): 41-48.
長谷川道明・金 郁彦・大場裕一, 2016. 知多半島で確認されたハマベゾウムシについて. 豊橋市自然史博物館研究報告, (26): 19-21.

【関連文献】

佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.

(伊澤和義)

オオナガレトビケラ *Himalopsyche japonica* (Morton)

【選定理由】

幼虫が山地激流部を好むため、愛知県内での生息適地は極めて限定される。個体数は多くないと推定され、生息環境の保全が必要である。

【形態】

雄成虫の前翅長は 16～23.5mm、雌は 22～26mm。前翅は茶褐色の不規則な淡色斑紋がある。終齢幼虫の体長は 15～37mm、頭部の大部分と前胸は農褐色の斑紋で覆われ、中胸と腹部は濃緑色。中胸と後胸および腹部第 1～8 節の側面によく発達した気管鰓を持つ。また、中・後脚の基部に指状鰓を持つ。幼虫は巣を作らないが、蛹化期に荒い砂粒でドーム型の固着巣を作る。



岐阜県高山市岩井町, 1999年9月, 西本浩之 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

設楽町呼間川と豊田市稲武町井山川でしか確認されていない。

【国内の分布】

本州および四国で生息が確認されている。

【世界の分布】

台湾および日本に分布する。

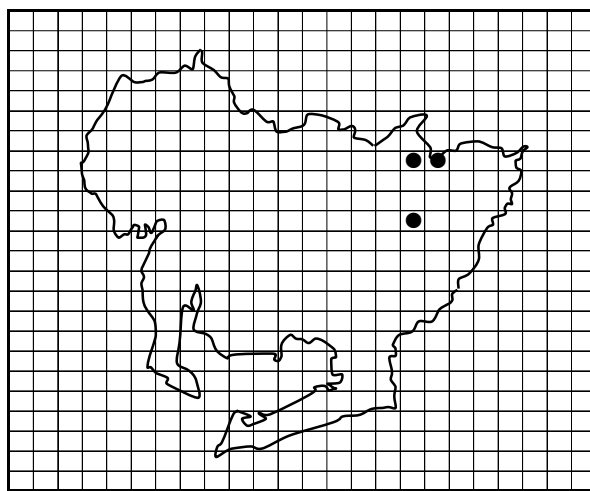
【生息地の環境／生態的特性】

山地の急勾配で大岩からなる激流に生息する。成虫は春から秋まで出現するが、基本的に年 1 化といわれている。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息環境が山地で流量が豊富な激流部であるため、産地は局限される。愛知県には本種の生息適地が少なく、さらに治水工事などにより河床の勾配が低下するなどして生息環境は悪化していると考えられる。

県内分布図



【保全上の留意点】

治水工事やダム建設時には、可能な限り生息環境を保全するように努める。

【特記事項】

Himalopsyche オオナガレトビケラ属で日本に生息しているのは本種のみである。年間を通して水温が低く、流量が安定かつ豊富な山地激流部に生息地が限定されるため、人為的な改変が施されていない環境水域であることを示す指標生物として利用される。

【関連文献】

Tsuruishi T., 2003. Life cycle of a giant carnivorous caddisfly, *Himalopsyche japonica* (Morton) (Trichoptera: Rhyacophilidae), in the mountain streams of Nagano, central Japan. *Limnology* 4: 11-18.

鶴石 達, 2004 オオナガレトビケラの分布と生活史. *昆虫と自然* 39 (6): 23-25.

Tsuruishi T., 2006. Life cycle of *Himalopsyche japonica* (Morton) (Trichoptera: Rhyacophilidae) in two high mountain streams in Nagano, central Japan. *Hydrobiologia* 563: 493-499.

(西本浩之)

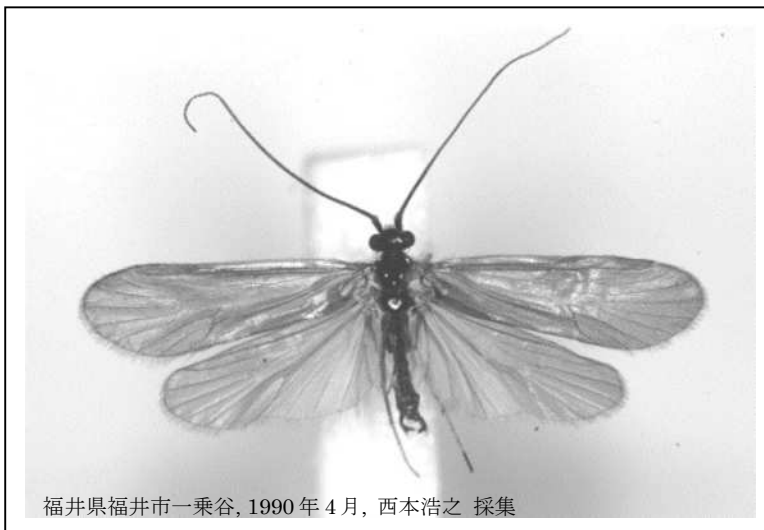
イワコエグリトビケラ *Manophylax futabae* Nishimoto

【選定理由】

非常に不安定な環境に生息するため、周辺の開発による影響を受けやすい。愛知県は分布のほぼ南限にあたり、また、生息地は限られているため、県内産個体群は貴重であると考えられる。

【形態】

成虫雄の前翅長は6.8mm、雌は5.8mm。体色は黒褐色、前翅はつやのある黒色で斑紋はない。終齢幼虫の体長は6.7mmで頭部および胸部のキチン部は赤褐色、前胸・中胸は広く一対のキチン板に覆われ、後胸に3対の小キチン板を持つ。通常、腹部の気管鰓はないが、福井県鯖江市の個体群は第3～4腹節腹面に1対の単一気管鰓を持つ。細かい砂粒から成る巣を持ち、巣の背面に苔の小片を付けることがある。巣の長さは最長9.6mm。



福井県福井市一乗谷, 1990年4月, 西本浩之 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

岡崎市（旧額田町）闇苧溪谷と新城市阿寺の七滝の遊歩道沿い、犬山市継鹿尾で生息が確認されている。

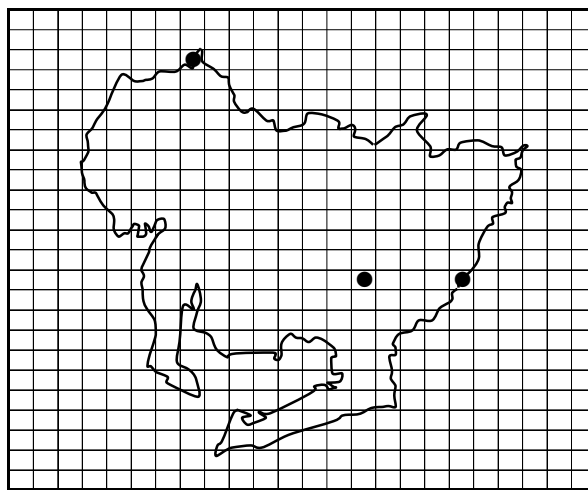
【国内の分布】

本州東北から関西地方にかけて分布する。

【世界の分布】

日本にのみ分布する。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

川から離れた、大きな岩や岩盤の垂直になった面で、やや湿り気があり、多少の苔と地衣類が育つところを好む。乾期が続くと幼虫は巣の開口部に膜を張り、乾燥に耐える。成虫は5月に羽化する。卵から成虫までは3年以上必要と推測される。

【現在の生息状況／減少の要因】

闇苧溪谷の遊歩道脇の岩盤では比較的多く見られる。新城市阿寺の七滝では、遊歩道の拡幅工事の影響もあり、個体数は減少している。犬山市の産地は個体数が少なく、生息範囲は小さい。

【保全上の留意点】

河川沿いの林道の整備にあたっては、生息環境の保全に努める。今以上の分布の拡大は望めないため、現在の状況を最大限維持する必要がある。

【関連文献】

- 兵庫陸水生物編集局, 2011. 兵庫の川の生き物図鑑. 兵庫陸水生物研究会. 357pp.
Nishimoto, H., 1997. Discovery of the genus *Manophylax* (Trichoptera, Apataniidae) from Japan with descriptions of two new species. Japanese Journal of Systematic Entomology, 3 (1): 1-14.
Nishimoto H., 2002. Description of a new species of *Manophylax* (Trichoptera: Apataniidae) from Japan, with a key and distributional notes for Japanese *Manophylax* adults and larvae. Proceedings of 10th International Symposium on Trichoptera, Mey, W. (ed.), Nova Suppl. Ent. Keltern, 15: 211-222.

(西本浩之)

モセリーヒゲナガトビケラ *Leptocerus moselyi* (Martynov)

【選定理由】

全国的に採集例が少ない。愛知県内では豊田市矢作川でしか採集されておらず、希少であると考えられる。

【形態】

雄成虫の前翅長は 5.6～6.5mm、雌は 5.0～5.6mm。前翅は黒色で基部および中央より2カ所にやや目立つ白色斑を持つ。また、翅の先端から後縁にかけて小白色斑が散在する。幼虫は未発見。



【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市矢作川からしか確認されていない。

【国内の分布】

北海道から本州中国地方にかけて生息が確認されている。

【世界の分布】

ロシア(アムール)および日本に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

比較的川幅があり、流量の多い河川に生息すると考えられる。成虫は6～8月に採集される。

【現在の生息状況／減少の要因】

個体数は少ないものの、矢作川では安定して採集される。

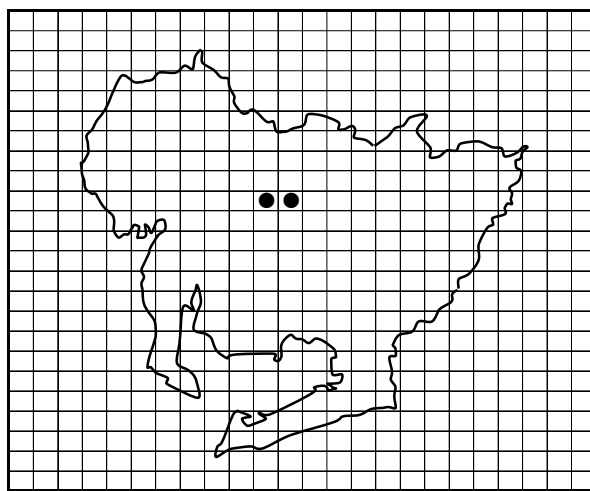
【保全上の留意点】

幼虫は確認されていないが、おそらく河川岸部の緩流あるいは止水域と推定される。岸部の改修は避け、自然環境を保全することが肝要である。

【特記事項】

豊田市矢作川は比較的安定した生息地と考えられる。

県内分布図



【関連文献】

Katsuma, N., 2006. 茨城県内で確認されたトビケラ類の記録(第2報)-常陸大宮市(旧御前山村) 相川のトビケラ相-
るりぼし, 33: 33-44.

西本浩之・森田久幸, 2001. 1995～1999年の調査における豊田市都市ブロックの矢作川周辺の昆虫類4、都市ブロック河辺のトビケラ相。矢作川研究, 5: 71-78.

野崎隆夫・中村慎吾, 2007. 広島県で採集されたトビケラ成虫の記録(第2報)。比和科学博物館研究報告, 48: 91-101.

Uenishi, M., 1993. Genera and species of leptocerid caddisflies in Japan. Proceedings of the 7th International Symposium on Trichoptera, Otto, C. (ed.), Backhuys Publishers, the Netherland. 79-84

(西本浩之)

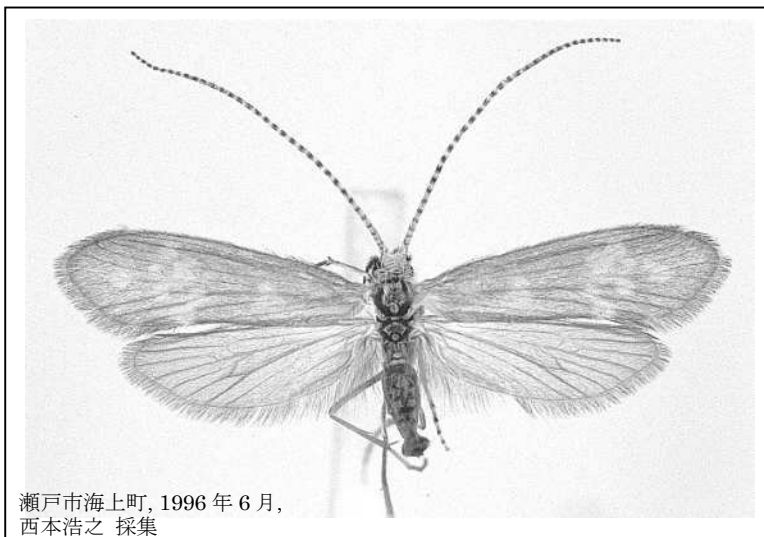
イトウホソバトビケラ *Molannodes itoae* Fuller et Wiggins

【選定理由】

全国的に採集例が少ない。愛知県内では瀬戸市海上の森と豊田市千鳥町でしか採集されておらず、希少であると考えられる。

【形態】

雄成虫の前翅長は 6.5~7mm、雌は 6mm。体色は茶色。前翅は淡黒色で不明瞭な淡色斑紋がある。頭部背面は白色毛で覆われる。終齢幼虫の体長は 8mm、頭部の色は後端の 1/6 を除いて濃茶、胸部のキチン板は茶色。後胸背面にキチン板はない。第 1~3 腹節背面に 2 又した 1 対の気管鳃（第 2 腹節の気管鳃は単一の個体もある）、第 2~3 腹節腹面に 2 又した 1 対の気管鳃、第 4~7 腹節腹面に 1 対の単一気管鳃を持つ。巢は砂粒で作られ、形状は扁平、しばしば巢の縁に植物片を付ける。巢の長さは最長 12mm。



瀬戸市海上町, 1996年6月,
西本浩之 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

瀬戸市海上町と豊田市千鳥町で確認されている。

【国内の分布】

北海道から本州関西地方にかけて生息が確認されている。

【世界の分布】

ロシア（サハリン）、日本に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

山地および低地の細流に生息する。本州では成虫は 6 月に羽化する。

【現在の生息状況／減少の要因】

北海道では比較的広い範囲で採集されているものの、一度に採集される個体数は多くなく、愛知県からは瀬戸市海上の森でわずかしき採集されていない。本種の幼虫が細流という不安定な環境を好むことが一因として考えられる。

【保全上の留意点】

今以上の分布の拡大は望めないため、現在の生息地の環境保全に努める必要がある。

【特記事項】

Molannodes コガタホソバトビケラ属の現生種は、タイプ種である *M. tinctus* (Zett.) とイトウホソバトビケラの 2 種のみである。*M. tinctus* は北ユーラシアから北米にかけて広く分布するが、イトウホソバトビケラは日本とその近辺でしか知られておらず貴重な種と言える。

【関連文献】

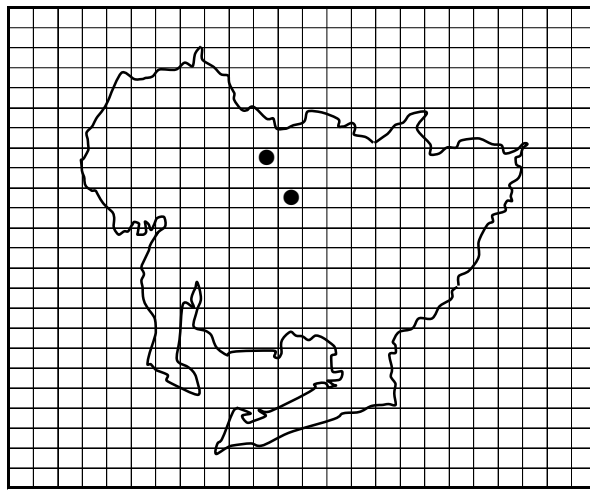
Ito, T., 1998. The family Molannidae Wallengren in Japan (Trichoptera). Entomological Science, 1 (1): 87-97.

西本ふたば・西本浩之, 1998. 愛知県のトビケラ相(第 2 報)・瀬戸市南東部、通称「海上の森」のトビケラについて.

名古屋女子大学紀要(家政・自然編), 44: 147-154.

(西本浩之)

県内分布図



ツマグロキチョウ *Eurema laeta betheseba* (Janson)

【選定理由】

20年ほど前、農地開発や工業化、宅地化によって幼虫食草であるカワラケツメイの急激な減少が起こったために、多くの産地で激減した。しかしその後、本種の幼虫が新たに進出してきた外来種のアレチケツメイを利用したために、成虫が安定した状態で棲息していることが確認されている。ただ、アレチケツメイも環境によっては減少しているため、今後の個体群の推移を見守る必要がある。

【形態】

黄色の地色に黒縁や小さい斑紋、帯び等を持ち、世界に多くの種を産するキチョウの一種で愛知県では極めて多産するキタキチョウと野外では殆ど区別がつかない。手に取れば成虫では越冬する秋型は前翅端がとがり、後翅裏に横筋が出るので区別できる。夏型はキタキチョウより一般的に小さいが、黒縁のキタキチョウとの違いをよく覚えなければ区別出来ない。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市、長久手市、尾張旭市、瀬戸市、春日井市、小牧市、一宮市、大府市、知多市、知多郡南知多町、豊田市、豊橋市、新城市(旧鳳来町)、北設楽郡豊根村などから知られる。

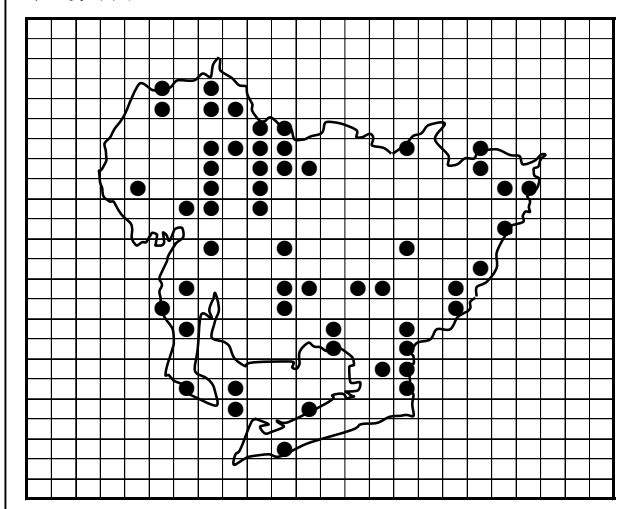
【国内の分布】

北海道以外に広く分布する。

【世界の分布】

ヒマラヤからスリランカ、フィリピン等には広く分布するが、マレー、スマトラ等には産しない。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

幼虫食草のカワラケツメイやアレチケツメイはいずれも草原や荒地の植物であるので、林縁をふくめて草原に生息する。秋遅くに秋型の個体が多く地域で見られ、発見地点で注意すればカワラケツメイやアレチケツメイの群落も認める事が出来る。春の越冬個体、夏型の成虫はもともと多く見られない。

【現在の生息状況／減少の要因】

人手の入らない状況で安定したカワラケツメイの群落も存在すると思われるが、県内では里山農林業に伴う林縁や川原の程々の草刈等によってカワラケツメイ群落がよく維持されてきたところがツマグロキチョウのよい産地であったと思われる。近年、外来種のアレチケツメイを食草として岐阜県、愛知県、静岡県では個体数が増加している。

【保全上の留意点】

残された生息地において人為的な原因を可能な範囲において除去する。今後の生息域での個体群の推移を注意深く調査する必要がある。

【関連文献】

- 高橋 昭・葛谷 健. 1956, 中部東海地方産蝶類目録第3報. 佳香蝶, 8 (29/30): 1-123.
- 白水 隆, 2006. ツマグロキチョウ. 日本産蝶類標準図鑑: 66. 学習研究社, 東京.
- 日本チョウ類保全協会(編), 2019. 日本のチョウ: 77. 誠文堂新光社, 東京.

(2002年版を一部修正)

オナガシジミ *Araragi enthea enthes* (Janson)

【選定理由】

本県では、1968年に豊田市（旧稲武町）で初めて確認されている（成瀬ほか、1968）。その後、豊根村（旧豊根村）でも発見され（浅野ほか、2001）、旧稲武町の井山川及び野入川流域（矢作川水系）、豊根村の坂宇場川流域（天竜川水系）の二つの限られた地域で発生している。食樹のオニグルミに依存して発生するため、道路拡張や堤防改修、また昨今の多量降雨などの影響を受けて河川環境が変化したこともあり、食樹の減少に伴い個体数は減少気味である。

【形態】

前翅長は18mm程度。色彩斑紋は♂♀ほとんど同じ。♂では触角の裏面が先端だけ黄色なのに対し、♀では全体的に黄色になる。裏面の斑紋が特異で他種との区別は容易である。

【分布の概要】

【県内の分布】

1968年に豊田市（旧稲武町）で初めて卵が確認された。成虫は、井山川や野入川（鈴木ほか、1987）で確認されているが、近年、旧豊根村天竜川水系の坂宇場川（竹内ほか、2000；浅野ほか、2001）でも発見された。

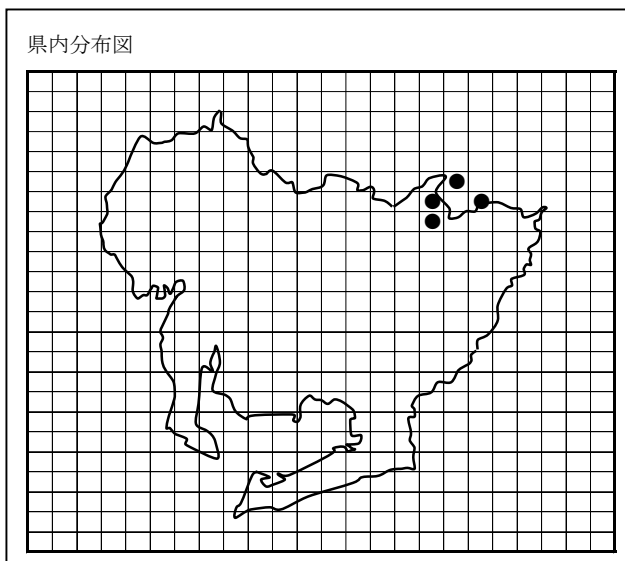
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布する。本州中部地方以北の地域では、山地のクルミ林に稀ではない。近畿地方から九州にかけては、産地は局所的になる。

【世界の分布】

ロシア南東部、朝鮮半島、中国東北部および西部、台湾に分布する。1属1種といわれていたが、最近、同属の近似種が発見されている（小岩屋、2007）。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

本種は、山間地の溪流沿いに生育するオニグルミを食樹として発生している。年1回の発生。♂は7月中旬ころから発生し、♀は10月上旬まで見られることもある。日周活動は午後4時頃から開始され、♂には占有性が認められる。

【現在の生息状況／減少の要因】

旧稲武町の井山川と野入川や豊根村の坂宇場川流域の限られた地域で発生している。比較的安定した発生を続けていたと考えられるが、道路拡張、堤防保全・改修や昨今の多量降雨の影響を受け、河川環境が変化したためオニグルミの減少とともに本種の個体数も減少している。

なお、山間地の発生地としては、本県の近隣では三重県の鈴鹿山脈北部の藤原岳や御池岳（浅野ほか、1985；吉友、2001；大曾根、2003）、岐阜県の旧串原村（西田、2003）などにも産地がある。

【保全上の留意点】

本種は、食樹のオニグルミに依存して発生しているため、まずオニグルミの生育地の保全が必要不可欠である。

【引用文献】

- 浅野 隆ほか、1985. 三重県でオナガシジミを確認. 佳香蝶, (141): 15.
浅野 隆ほか、2001. 愛知県豊根村でオナガシジミを確認. 佳香蝶, 53 (207): 38.
小岩屋 敏, 2007. 32. オナガシジミ. 世界のゼフィルス大図鑑解説編: 92. むし社, 東京.
成瀬善一郎ほか、1968. 奥三河の冬期採集報告. 佳香蝶, 20 (75): 79.
西田真也, 2003. 岐阜県のチョウ・2003: 20. 自刊.
大曾根 剛, 2003. 鈴鹿御池岳のオナガシジミの記録. 佳香蝶, 55 (216): 70.
鈴木哲彦ほか、1987. 愛知県のミドリシジミ類一分布と生息環境 (1)一. 佳香蝶, 39 (152): 57.
竹内 剛ほか、2000. 採集の思い出話. SPINDA (15): 77-85.
吉友郁哉, 2001. 三重県藤原岳のオナガシジミ. 蝶研フィールド, (176): 25.

【関連文献】

巢瀬 司ほか、2003. 22. 愛知県. 日本産蝶類の衰亡と保護第5集. 日本産蝶類県別レッドデータ・リスト(2002年): 82-87. 日本鱗翅学会, 東京.

(2009年版を一部修正)

オオミドリシジミ *Favonius orientalis* (Murray)

【選定理由】

本県では以前は丘陵から山地に広く分布していたが、近年では平地や丘陵部ではほとんど見られなくなった。本種は1988年の「愛知県のミドリシジミ類」においても稀であるとの記述が見られる(鈴木・中野, 1988)。最近の愛知県の記録でも平野部ではほとんど目撃、採集されていない。

【形態】

♂の表面外縁の黒帯は *Favonius* 亜属中最も細く、後翅においても細線状。裏面の地色は灰白色～暗白色。後翅第 1b+c 室は全く橙鱗を含まず、肛角部と第 2 室の橙色斑は完全に分離する。開張 35mm 前後。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市守山区、豊田市(旧小原村、旧足助町、旧旭町、旧稲武町)、設楽町(旧設楽町)、豊根村、瀬戸市などの丘陵・山間部から平地にかけての記録がある。

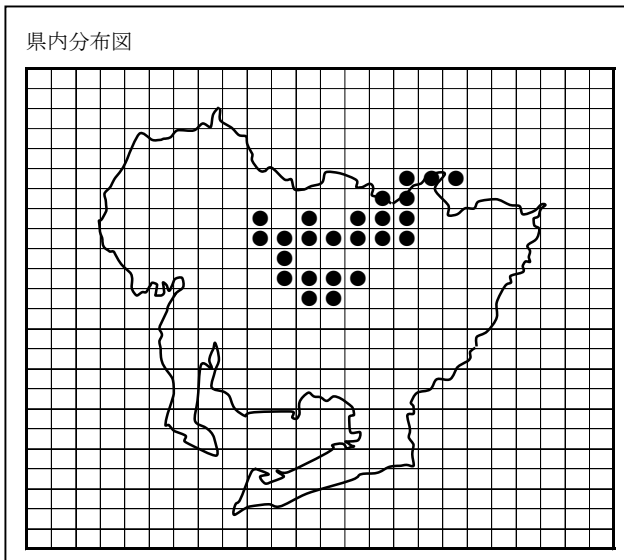
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。関東の平野部にも産する。

【世界の分布】

日本、ロシア南東部、モンゴル、朝鮮半島、中国東北部及び中部～西部。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

平地から丘陵地の雑木林から山地のミズナラ林まで多様な森林環境に生息する。年 1 回の発生。県内では 6 月上旬から発生し 7 月上旬に多く見られる。♂の飛翔活動は午前 10 時頃から午後 1 時頃が活発である。(江田, 未発表) 食樹はコナラ、クヌギ、アベマキ、ミズナラで、卵は低木の小枝の分岐部などに見られる。越冬態は卵である。

【現在の生息状況／減少の要因】

丘陵から山地に分布しているが、近年では県内の低山帯の開発などの環境の悪化により現在では山地でしか見られなくなった。

【保全上の留意点】

雑木林など里山の環境の保全や山間部での林の間伐などの保全が必要である。

【引用文献】

鈴木哲彦・中野善敏, 1988. オオミドリシジミ. 愛知県のミドリシジミ類. 佳香蝶, 40(150): 13.

【関連文献】

高橋匡司ほか, 2001. 旭町のチョウ類. 旭町の昆虫: 253. (財)旭高原自然活用村協会.
白水 隆, 2006. オオミドリシジミ. 日本産蝶類標準図鑑: 113. 学習研究社, 東京.
日本チョウ類保全協会(編), 2019. 日本のチョウ: 127. 誠文堂新光社, 東京.

(2015 年リスト付属資料を一部修正)

オオウラギンスジヒョウモン *Argyronome ruslana* (Motchulsky)

【選定理由】

愛知県では茶臼山などの山間部の草原に生息し、低山地での記録は少ない。また、全県で数件の採集記録があるに過ぎない(大田, 1981)。もともと県内では産地が局限され、個体数も少ない種である。また、岡崎市のレッドリスト 2018 でも NT と評価されている(岡崎市, 2018)。

【形態】

斑紋は雌雄で大差はない。♂の翅表は濃橙色、♀はやや赤みの少ない橙色。♀の翅表の前縁端近くにやや顕著な三角形の小白斑をあらわす。裏面前翅端および後翅後半部における紫褐色部は♂では色が淡く、♀では濃色。開張 65mm 前後。

【分布の概要】

【県内の分布】

茶臼山などの山間部では少なくないが、産地は名古屋市守山区、瀬戸市、旧新城市、旧鳳来町、豊田市旭町伊熊、太田杉本地区に限定されている。

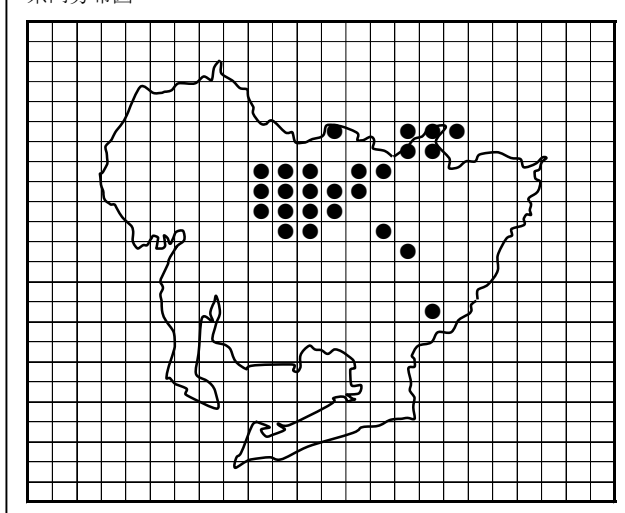
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。分布は局所的。

【世界の分布】

日本、ロシア南東部。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

特に草原に見られ、アザミなどの植物に訪花する。年 1 回の発生で、県内では 7 月から発生し 10 月ころまで見られる。食草はタチツボスミレ、ニョイスミレなどの各種スミレ科植物。越冬態は卵である。

【現在の生息状況／減少の要因】

主に山地の樹林周辺の草原に生息し、ウラギンスジヒョウモンよりも森林性で林間の草原にも生息する。

【保全上の留意点】

本種の減少はスミレ類全般の減少とは考えにくい。

現時点では本種の生態に不明な点も多く、具体的な保全の提案は難しい。森林性のためウラギンスジヒョウモンと比べると減少は少ない。しかし、森林の高木化や植林などによって日が差さなくなると保全が必要である。また、森林から続く草原の保全は有効である。

【引用文献】

大田佳伸, 1981. 南設楽郡鳳来町でオオウラギンスジヒョウモンを採集. 三河の昆虫, (28): 122.
岡崎市, 2018. 第 2 次岡崎市版レッドリスト 2018. 岡崎市.

【関連文献】

高橋匡司ほか, 2001. 旭町のチョウ類. 旭町の昆虫: 262-263. (財)旭高原自然活用村協会.
白水 隆, 2006. オオウラギンスジヒョウモン. 日本産蝶類標準図鑑: 214. 学習研究社, 東京.
日本チョウ類保全協会(編), 2019. 日本のチョウ: 203. 誠文堂新光社, 東京.

(2015 年リスト付属資料を一部修正)

オオムラサキ *Sasakia charonda charonda* (Hewitson)

【選定理由】

日本最大のタテハチョウであり、低山地から高地にかけて生息地は点々と存在しているが、近年、混交林の繁茂などにより生息環境が悪化し、その個体数が減少している。しかし、瀬戸市などでは近年個体数の若干の増加がみられる。

【形態】

♂の前翅長は55mm程度で、翅の地色は♂♀とも暗褐色、♂は前後翅の基半分が紫色に輝くが、♀はこれがなく、やや大型で翅形が丸い。越冬幼虫は、ゴマダラチョウとともに落葉の裏面に発見されるが、ゴマダラチョウより小さく、より細長く、背面の突起が4対あることにより容易に判別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張地区の名古屋市(加藤, 1942)、春日井市(高橋匡司, 未発表)、瀬戸市、三河地区の豊田市、岡崎市(旧岡崎市、旧額田町)(大曾根, 2006)、新城市(旧作手村、旧鳳来町)など低山地の雑木林から高地まで広範囲にわたって記録がある。

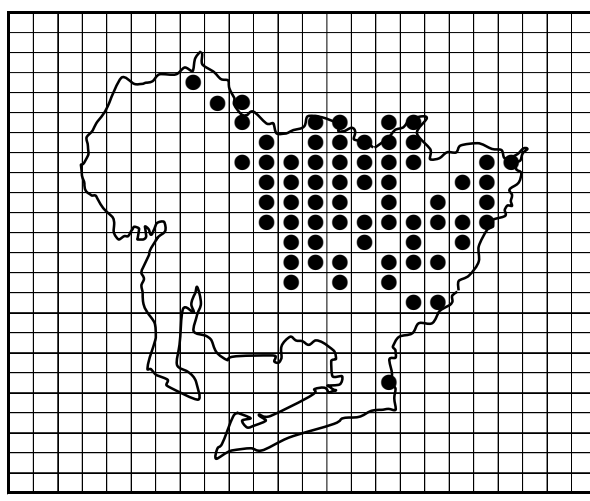
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布、北海道では産地は局限されている。東京付近は、開発のために産地は大幅に減っている。日本西南部の暖地では、主に山地帯のみに産し、多くはない。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国東北部、中国、ベトナム、台湾に産し、東アジアの固有種である。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

丘陵地や河岸段丘の雑木林に生息している。年1回の発生で、6月中～下旬から発生する。樹上を高く飛び、好んでコナラなどの樹液に集まる。幼虫の食樹はエノキである。幼虫は、根際に降りて落ち葉の中で翌春の新芽時まで越冬する。

【現在の生息状況／減少の要因】

雑木林に生息している。市街化の促進、工業用地開発などによる生息地の消滅や、雑木林の管理放棄などによる混交林の繁茂が進み、生息環境が悪化し、個体数が減少している。エノキが生育している河畔林も、山間地の荒廃に起因した増水のため、根際の越冬幼虫が流されたり埋もれてしまい個体数が減少してしまう。

【保全上の留意点】

里山や河畔の混交林の定期的かつ継続した間伐などによる生息地の保全管理。住民や地域の小中学生による、公有地や社寺にあるエノキの根際に越冬する幼虫の保全のための落葉の飛散防止活動や、放蝶による遺伝子攪乱防止の啓蒙教育の実施などが必要である。

【特記事項】

本種は大きく、♂の翅表面は、紫色の光沢が美しいこともあり「国蝶」に指定されている。

【引用文献】

加藤一三, 1942. 学林, (117): 61-66.

大曾根 剛, 2006. 愛知県男川流域におけるオオムラサキとゴマダラチョウの分布調査. 佳香蝶, 58 (226): 38-40.

【関連文献】

白水 隆, 2006. オオムラサキ. 日本産蝶類標準図鑑: 241. 学習研究社, 東京.

高橋匡司ほか, 2001. 旭町のチョウ類. 旭町の昆虫: 271. (財)旭高原自然活用村協会.

高橋匡司ほか, 2005. チョウ目チョウ類. 豊田市自然環境基礎調査報告書(資料編): 285. 豊田市.

寺部謙一, 1977. 愛知県豊田市産オオムラサキのスギタニ型の記録. 佳香蝶, 29 (109): 11.

(2009年版を一部修正)

オオヒカゲ *Ninguta schrenckii* (Ménétriès)

【選定理由】

かつては愛知県の低山帯にかけて生息し、産地を訪れれば確認できる種であったが、近年は生息地の環境変化が著しく、産地そのものが消滅した所も多く、本種も減少している。

【形態】

前翅長 40mm 程度。日本産最大のジャノメチョウで、同定を誤る近似の種はない。色彩斑紋は♂♀大差ないが、♀は翅形がやや広く翅の地色は淡色、後翅表の黒円斑列が大きく目立つ。後翅内縁基部には、♂では銀灰色に目立つ性標があり♀はこれがない。

【分布の概要】

【県内の分布】

本県では瀬戸市、豊田市（旧豊田市、旧足助町、旧小原村、旧旭町、旧下山村、旧稲武町）、新城市（旧新城市、旧作手村）、設楽町、豊根村などから記録されている（巢瀬ほか、2003）。

【国内の分布】

北海道と本州に分布する。四国・九州にかけては知られていない。東北地方は全県に分布しており、また長野県や新潟県では産地が多く、個体数も多いが、この両県を除くと産地は局地的となる。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国東北部、中国西部、ロシア南東部、チベットに分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

林内の湿地などに生育するやや大型のスゲ科の植物を幼虫が食べるので、このような環境に発生する。成虫は林の中だけでなく、その周辺の道にもよく出現する。

成虫は直射日光の乏しい林の中の葉上や樹木の幹にとまっていることが多い。飛び方はゆるやかで、発生地をあまり離れない。

年1回発生、愛知県の低地では6月中旬から成虫が見られるようになる。終齢幼虫は70 mmにも達し、特徴のある食痕から発見は容易である。

【現在の生息状況／減少の要因】

瀬戸市や旧豊田市での生息は著しく減少したが、その一方では新産地も見つかっている。かつて容易であった卵、幼虫などの観察も最近ではほとんど不可能になった。大型のチョウであり、見逃すこともあまりない種でありながら、採集・目撃の記録例は少なくなっている。減少の理由は明らかでない。水辺に自生する大型のスゲ科植物が以前と同様に見られても、本種がいなくなった所も多い。

【保全上の留意点】

かつての生息地であった湿地の保全が必要である。

【特記事項】

夕方は活発に飛翔する。

【引用文献】

巢瀬 司ほか, 2003. 22. 愛知県. 日本産蝶類の衰亡と保護第5集. 日本産蝶類県別レッドデータ・リスト(2002年): 82-87. 日本鱗翅学会, 東京.

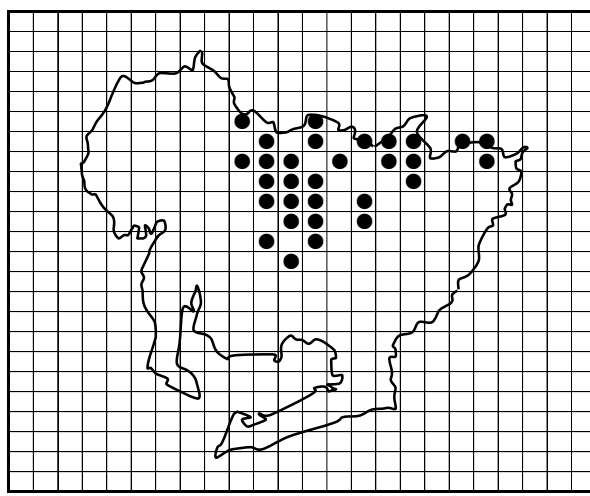
【関連文献】

白水 隆, 2006. オオヒカゲ. 日本産蝶類標準図鑑: 213-214. 学習研究社, 東京.



豊田市上高町, 2003年6月29日, 高橋匡司 撮影

県内分布図



(2009年版を一部修正)

ギンイチモンジセセリ *Leptalina unicolor* (Bremer et Grey)

【選定理由】

愛知県では、尾張地方からは未知、三河でも局地的に生息地が知られるのみ。かつて生息していた豊田市（旧旭町）では1997年から3年間の調査では発見されず、矢作川下流堤防でも2007年には発見できなかった。北設楽郡や豊橋市近傍からも最近の報告は乏しく、全県的に減少ないし消滅の傾向にある。全国的にも減少が報じられている。

【形態】

前翅長14~18mmの小型のセセリチョウ。♂♀ともに翅表は黒褐色で、斑紋はない。後翅裏面中央には、第1化（春型）の基部から外縁に向かい明瞭な白帯が1本あり、本種の特徴となっているが、第2化や第3化（夏型）ではこれが後翅の地色に近く、また細く、目立たない。♀は、腹部が太く、前翅の先端がやや尖る点で♂と区別できる。斑紋の特異性から、本種と紛らわしいチョウはいない。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張地方では記録がない。近隣の岐阜県瑞浪市付近の土岐川堤防には生息が知られるが、その下流の庄内川の堤防からは知られない。

三河地方では、矢作川の下流の安城市、岡崎市などに生息していたが（高橋ほか、1992）、2007年の調査では発見できなかった。豊橋市（牛川町、下条町、下地町、佐藤町、西岩田町）、豊川市（旧音羽町）、北設楽郡豊根村、設楽町（旧津具村）、新城市（旧作手村）、豊田市（旧旭町、旧稲武町）、などに少数の記録がある。

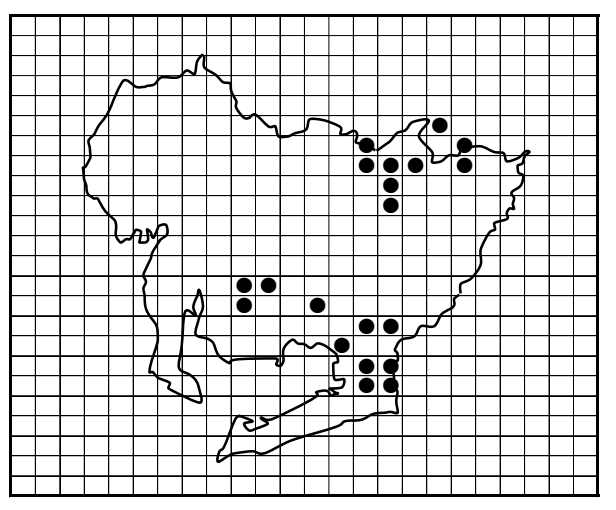
【国内の分布】

日本では、北海道、本州、四国、九州に分布するが、産地は局地的である。鹿児島県の鹿児島市、錦江町が南限となる。離島からは知られていない。

【世界の分布】

国外では、シベリア西部、アムール、中国西北部、朝鮮半島などに分布する。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

ススキ、チガヤなどが自生する河川の堤防、鉄道線路周辺、山地草原などの明るい草原が発生地であるが、クズなどが繁茂すると生息しなくなる。海岸に近い草地にも発生地がある。

愛知県の平野部（矢作川下流地域など）では、5月上旬、7月上旬、8月下旬が最盛期となり、年3回発生する。豊田市太田町（旧旭町太田）（標高450m）で7月20日に採集した個体は第2化であったのに対し、同市大野瀬町（旧稲武町大野瀬）三国山（標高1,030m）で7月4日に採集した個体は第1化であった。前者では年2化、後者など高標高地では年1回発生にとどまるものと思われる。

成虫は、明るい草地を緩やかに飛び、すぐ草に止まる習性がある。曇天になると飛ばなくなる。ヒメジョオンなどの花でよく吸蜜する。ススキなどのイネ科植物に産卵し、孵化した幼虫はこの葉を食べ、幼虫で越冬、翌春蛹化、羽化する。第3化の世代に関する幼虫・蛹などについては調査が乏しい。

【現在の生息状況／減少の要因】

矢作川下流の堤防草地の生息地には、かつてシルビアシジミも生息していた。現在は運動場、駐車場が作られ、また放置されたことで他の場所と同様にクズ・ヤナギなどが繁茂し、本種の生息に適した明るい開放的な草地が著しく減少した。

【保全上の留意点】

明るい開放的な草地の保全が第一である。堤防の草地などは適当な管理が必要で、放置しておくと草木が繁茂し過ぎて本種の生息地は消滅する。堤防の改修、道路の舗装、農薬散布は必要最低限とする。

【特記事項】

国内外で地理的変異はない。山梨県産には、裏面が暗化する型が知られるが、愛知県ではこのような個体は知られていない。

【引用文献】

高橋 昭・高橋 賢・高橋 理, 1992. 愛知県沖積平野部矢作川河川敷の蝶. 佳香蝶, 44 (169): 1-3.

【関連文献】

高橋 昭, 1964. 名古屋地方のギンイチモンジセセリ. 佳香蝶, 16 (58): 47-52.

(2009年版を一部修正)

ホソバセセリ *Isotheon lamprospilus* C. et R. Felder

【選定理由】

本県では平地から低山地の草地、疎林、林縁部などに点々と分布し個体数は多くはなかったが、産地や個体数が減少している。殊に平地部では急激に減少し稀になっている。

【形態】

♂♀の色彩斑紋はほとんど同じである。特に、後翅裏面の斑紋は特異で、中室内の白斑を中心として8個の白斑が環状に並び、その白斑周囲は黒色に縁取られている。この特徴が種の同定の目印になる。

【分布の概要】

【県内の分布】

三河山地から尾張東部や北部丘陵地にかけて分布する。豊田市タカドヤ湿地周辺など地域によっては多産する所もある（笹俣ほか、未発表）が、平地部では稀である。

豊田市（旧稲武町、旧旭町、旧豊田市、旧小原町など）、設楽町、豊根村、豊橋市、名古屋市、犬山市、瀬戸市、東海市などで確認されている（高橋ほか、1991）ものの、平地部では2000年代に入ってから、瀬戸市（海上の森で計3頭確認（高橋ほか、2016～2018）、春日井市（JR 廃線の草原で確認（高橋、2015））、小牧市の丘陵部で確認（東野、2014）されている数例（私信、未発表）程度であり、名古屋市や東海市などで再確認されたとの報告は確認できていない。

【国内の分布】

九州、四国、本州に分布するが北限は山形県、南限は鹿児島県である。東北地方や本州中部の山地では稀となる。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島南部、中国、台湾、ベトナムに分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

通常年1回、7月中～下旬に発生が多い。平地から丘陵部の森林に接した草地、疎林、林縁部や路傍に見られる。食草はススキ類であり、袋状の巣を垂下させその中で蛹化する。飛翔は、他のセセリチョウ類ほど速くなく、すぐに葉上に止まる。

【現在の生息状況／減少の要因】

平地部での個体数は激減している。里山の管理放棄と考えられるものの減少の詳細は不明である。

【保全上の留意点】

草地・疎林・林縁部や路傍の確保と産卵できるススキ、オオアブラススキなどのイネ科植物の生育地の確保や管理が必要と思われる。

【引用文献】

高橋 昭ほか、1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫, (下) : 28. 愛知県.

【関連文献】

高橋匡司ほか、2001. 旭町のチョウ類. 旭町の昆虫: 232. (財)旭高原自然活用村協会.

白水 隆、2006. ホソバセセリ. 日本産蝶類標準図鑑: 304. 学習研究社, 東京.

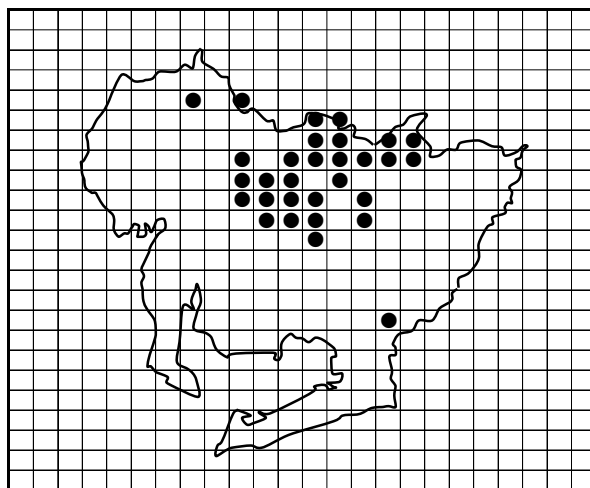
日本チョウ類保全協会(編)、2012. ホソバセセリ. フィードガイド日本のチョウ: 288. 誠文堂新光社, 東京.

(2015年リスト付属資料を一部修正)



春日井市, 2012年7月8日, 高橋匡司 撮影

県内分布図



ヒメコミズメイガ *Parapoynx rectilinealis* Yoshiyasu

【選定理由】

記録が少なく生息環境が激減している。水質の悪化等と共に残された生息環境も狭められている可能性がある。

【形態】

開張約 12mm、前後翅とも黄金色の地。前翅に黒い縁取りを持った白色横線が外縁部と外横部に 1 条、前後翅の中央部に縦線がそれぞれ 3 条見られ、後翅には外縁部に数個の小黒点を有す。



三重県上野市法花, 1993 年 9 月 11 日, 間野隆裕 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

豊橋市 (中村ほか, 1996)。

【国内の分布】

全国的にもまれで、新種記載された京都 (Yoshiyasu, 1985) と、その後宮崎県延岡市 (朝日, 1990)、三重県 (間野, 1996)、岩手県 (岩手県, 2001)、滋賀県 (滋賀県, 2006) で採集されているだけである。

【世界の分布】

現状では日本特産種。

【生息地の環境／生態的特性】

食草等幼生期については知られていないが、本属の幼虫は気管嚢を持つ水生昆虫で、水生植物を食べると考えられる。しかも既知産地の状況から明らかに貧栄養湿地に生育する植物に依存していると考えられる。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内においては豊橋市の葦毛湿原ただ 1 ヶ所の記録のみで、生息可能な湿地環境が激減している。

【保全上の留意点】

生息環境の保全が急務と考えられる。

【特記事項】

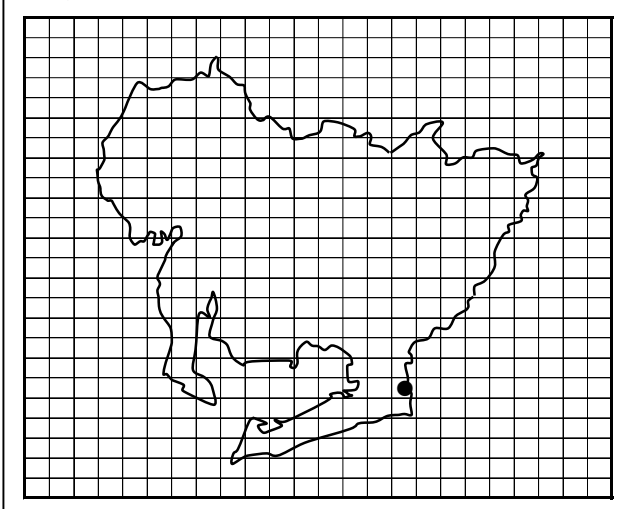
おそらく幼虫が水生のため、水質も生息に重要な要因になると考えられる。

【引用文献】

- 朝日延太郎, 1990. 宮崎県北部から得られた注目すべき蛾類(VI). 誘蛾燈, (120): 63-64.
岩手県, 2001. いわてレッドデータブック 岩手県の希少な野生生物. 613 pp. 岩手県.
滋賀県, 2006. 滋賀県で大切にすべき野生生物. 滋賀県レッドデータブック 2005 年版. 563 pp.
間野隆裕, 1996. 三重県上野市法花の湿地のガ. 蛾類通信, (187): 184-188.
中村正直・工藤広悦・内藤幸之助, 1996. 葦毛湿原(豊橋市岩崎町)で獲られた蛾類目録(葦毛第 2 湿原(指定外地)の蛾類調査報告 4). 蛾類通信, (189): 223-230.
Yoshiyasu, Y., 1985. A systematic study of the Nymphulinae and the Musotiminae of Japan (Lepidoptera: Pyralidae). Scient. Rep. Kyoto prefect. Univ.(Agric.) 37: 1-162.

(間野隆裕)

県内分布図



フジキオビ *Schistomitra funeralis* Butler

【選定理由】

日本特産種で、全国的に分布が局所的であるが、県内には二ヶ所しか記録がない(吉富・野中, 1995; 矢崎, 2011)。

【形態】

開張 46mm～53mm。♂の触角は櫛歯状、♀の触角は糸状。翅の地色は黒色で、前後翅に黄色又は黄白色の顕著な斑紋を持つ。腹部背面は黒色で黄色帯を有する。



三重県大杉谷狸峠, 2001年6月3日, 間野隆裕 撮影

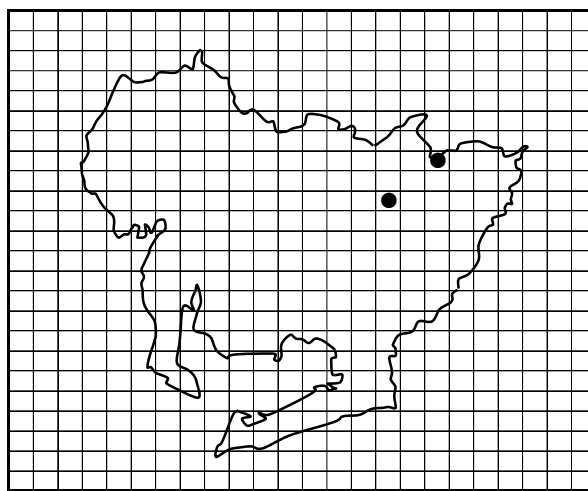
【分布の概要】

本州の関東地方以西、四国、九州に分布。垂直分布は広く、標高約 2,000m の亜高山から標高 300m 前後の山麓または丘陵まで分布する。ブナを主とする落葉広葉樹林帯と隣接する草原(湿原)で見られるが、和歌山県のように照葉樹林帯にも分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

成虫は昼行性のガで、年に1回、5～6月頃に出現する。幼虫の食樹はナツツバキ(ツバキ科)が知られている。幼虫は白蠟物質で被われ、7～8月頃老熟し、蛹態で越冬するという(杉, 1987)。本種の生息地は食樹ナツツバキ(シャラ)の自生地と重なるものと思われるが、県内にはナツツバキの自生地そのものが少ない。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

県内には設楽町裏谷及び豊田市面ノ木峠の記録のみである。隣県の静岡県、三重県、岐阜県では記録があるが、数少ない。

【保全上の留意点】

食樹ナツツバキと、周辺の生息環境を保全する必要がある。

【引用文献】

- 矢崎充彦, 2011. 愛知県豊田市で得た特記すべき蛾3種. 佳香蝶, 63 (246): 46.
吉富博之・野中 勝, 1995. フジキオビを愛知県で採集. 月刊むし, (298): 25.
杉 繁郎(編), 1987. 日本産蛾類生態図鑑: 114. 講談社, 東京.

【関連文献】

- 後藤 伸, 2000. 虫たちの熊野: 130-131. 紀伊民法社, 田辺.
松村松年, 1937. 原色千種統昆虫図譜: 78, pl. 39. 三省堂, 東京.

(間野隆裕)

カバイロシャチホコ *Ramesa tosta* Walker

【選定理由】

全国的に記録が少なく、県内では新城市における記録（井上，1959）が唯一で、以後全く記録がない。

【形態】

開張約 32mm、♂の触角は櫛歯状で、♀は糸状。前翅は基部から 2/3 の前縁部分と後縁部分が濃茶色で、中央部分から先端部にかけて薄茶色。後翅は白色でわずかに茶色の鱗粉を散布する。



新城市桜淵公園，1957年6月16日，菅 貞義 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

県内では新城市における記録（井上，1959）が唯一。

【国内の分布】

静岡県以西の本州、四国、九州のわずかな地点から記録されているが、1970年代以前の記録が多い。現在は九州に限られた草原が確実な産地として知られるのみである。

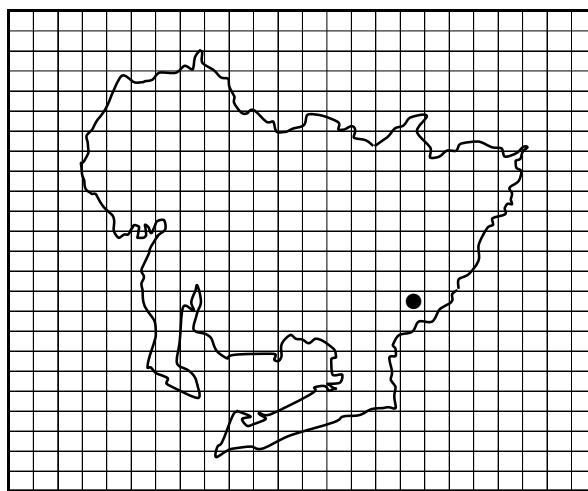
【世界の分布】

台湾、中国、ヒマラヤ周辺、スリランカ、タイ、ベトナム、インドネシアに分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

年2化、成虫は5月と8月に出現する。幼虫はイネ科植物を摂食することが知られており、草地性であることが示唆される（杉，1987）。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

既知産地はいずれも草地で、現存する生息地は広範囲にわたる草原のみとなっている。県内記録地である新城市は、当時草地が至る所に残存する環境であった。その記録以降、県内における新見がないのは、草地環境の減少と関係があると考えられる。

【保全上の留意点】

草地環境の恒常的な維持が必要と考えられる。

【引用文献】

井上 寛，1959. 菅貞義氏採集の新城市桜淵公園の蛾類. 蛾類同志会通信, (16/17): 158-159.
杉 繁郎(編), 1987. 日本産蛾類生態図鑑: 167, pl.78. 講談社, 東京.

【関連文献】

岸田泰典ほか, 2011. 日本産蛾類標準図鑑. II. 学習研究社.

(間野隆裕)

シラユキコヤガ *Euloastra sasakii* Sugi

【選定理由】

特定の環境で確認されており、その生息環境が激減している。

【形態】

開張 13～15mm、頭部および胸背部は黒褐色、前翅は白地に外縁部と外横部に幅広の黒条線がある。後翅は無紋、腹部と共にやや黄色を帯びる。



豊田市下川口, 2008年7月10日, 間野隆裕 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

これまで豊田市田茂平(杉, 1990; 田中ほか, 1991)と、豊橋市葦毛湿地(中村ほか, 1996)、豊田市下川口(間野・宮野, 2008)及び日進市岩藤町ほか(田中, 2015)で記録されている。

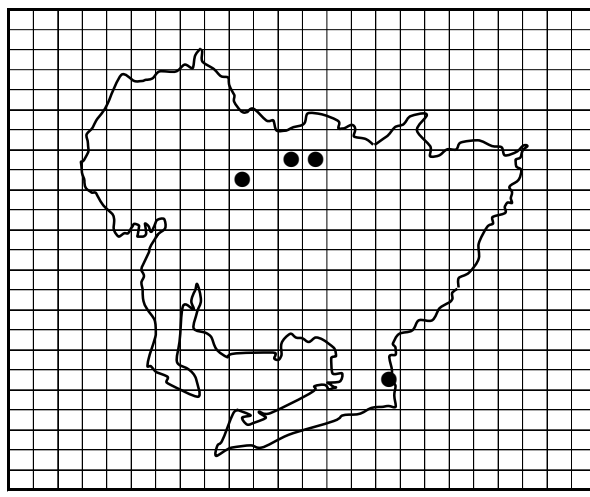
【国内の分布】

全国的にまれで、愛知県のほか秋田県(井上ほか, 1982)、岐阜県(船越・今井, 1991)、三重県(間野, 2004)、福井県(岸田, 2011)などわずかな記録しか見られない。

【世界の分布】

現状では日本特産種。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

湿地のみから得られており、幼虫の食草としてヌマガヤが報告されている(中村ほか, 1996)。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息環境としてはエゾスジトウと同様、貧栄養湿地で、その湿地環境の減少が、本種の減少要因として大きいと考えられる。

【保全上の留意点】

生息環境である湿地環境の保全が急務である。

【引用文献】

- 船越進太郎・今井滋行, 1991. スゲドクガ、シラユキコヤガ岐阜県における記録. 誘蛾燈, 125: 99-100.
岸田泰典ほか, 2011. 日本産蛾類標準図鑑. II. 学習研究社.
間野隆裕, 2004. 第5章 昆虫 第10節 チョウ目(ガ類). 上野市史 自然編: 723-747, 995-1030. 上野市.
間野隆裕・宮野昭彦, 2008. カバフキシタバ・シラユキコヤガ・エゾスジトウの愛知県豊田市の記録. 誘蛾燈, (194): 105-107.
中村正直・工藤広悦・内藤幸之助, 1996. 葦毛湿原(豊橋市岩崎町)で獲られた蛾類目録(葦毛第2湿原(指定外地)の蛾類調査報告4). 蛾類通信, 189: 223-230.
杉 繁郎, 1990. シラユキコヤガの第二の産地と生息環境の知見. 蛾類通信, 157: 99-100.
田中多喜彦, 2015. 第8章 昆虫 第7節 チョウ目のガ類. 日進市史: 418-437. 日進市.
田中 蕃ほか, 1991. 愛知県の蛾類. 愛知県の昆虫(下), pp.96-416. 愛知県.

(間野隆裕)

オオキイロアツバ *Pseudalelimma miwai* Inoue

【選定理由】

ツゲ群落固有のガで、生息環境が特異で県内の産地は極めて限定されている。



新城市黄柳野, 2008年6月7日, 乙部 宏 採集

【形態】

開張 40~46mm、前後翅とも羽全体が黄色、黒色の外横線が前翅に薄く現れる。♂の触角は両櫛歯状で外側の櫛歯は非常に長い。下唇髭は長く鎌状に上反する。1属1種である。

【分布の概要】

【県内の分布】

新城市黄柳野（間野・宮崎，1988）の記録が唯一。

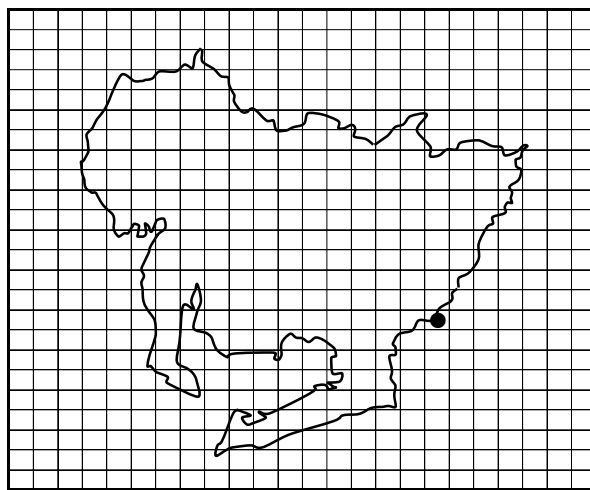
【国内の分布】

新潟県、東京都、岐阜県、三重県、奈良県、岡山県、広島県の本州のみで記録されている。

【世界の分布】

現状では日本特産種。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

幼虫はエチゴハガタヨトウと同様ツゲを食す石灰岩性のガで、県内では蛇紋岩地帯に発達するツゲ群落で確認されている。成虫は 6~7月頃と 9~10月に発生する。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息地は保護され少ないながらも比較的安定しているが、孤立した生息地であるため予断を許さない。

【保全上の留意点】

幼虫の野外での食樹がツゲのみであることから、ツゲの生育を保全する。

【引用文献】

間野隆裕・宮崎弘規, 1988. 愛知県鳳来町で採集した蛾. 誘蛾燈, (111): 23-29.

【関連文献】

岸田泰典ほか, 2011. 日本産蛾類標準図鑑. II. 学習研究社.
杉 繁郎ほか, 1987. 日本産蛾類生態図鑑. 講談社. 東京.
山田乙三, 1965. 坂本谷の蝶と蛾. ひらくら, 9 (7): 109-110.
山下善平ほか, 1963. 鈴鹿山脈の昆虫. 鈴鹿山脈自然科学調査報告: 119-288. 三重自然科学研究会.
山下善平ほか, 1980. 神宮境内地昆虫調査報告書. 神宮司庁.

(間野隆裕)

カバフキシタバ *Catocala mirifica* Butler

【選定理由】

県内での生息が限定され、わずかな記録しかみられないが、その生息地である人里周辺にある温帯落葉樹林の二次林は、宅地や人工的公園の造成などによる開発や、目的のない雑木林の伐採などによって、本種存続の脅威が高まっている。

【形態】

開張 51～55mm、前翅は灰白色を帯び、翅頂部に大きな暗色斑を表す。後翅の帯状に見られる黄色はかなり濃く、黒色帯の幅は狭い。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市のみから記録されている。猿投町、御船町（田中ほか, 1991）、六所山（愛知県, 2002）の 20 年以上前の記録に加え、木瀬町と下川口町（間野・宮野, 2008）、大平町（宮野, 2011）において再確認された。

【国内の分布】

栃木県以西、中国・四国地方にかけて分布。兵庫、岡山、島根の各県に記録がある。中部地方では三重、岐阜、長野、福井各県にも採集記録がある。現在東海地方での恒常的な産地は伊賀市青山高原（松井, 1993）のみである。

【世界の分布】

中国に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫はバラ科のカマツカを食べる。成虫はアカマツ林内で 7～8 月頃出現し、地衣類に擬態し、昼間は地衣類が生えたアカマツの幹などに静止しているという。本種成虫がライトに誘引される時間帯は、深夜から明け方であることが多い。成虫は樹液にも来るが、同属種の中でもっとも得にくい種の一つとなっている。

【現在の生息状況／減少の要因】

これまで県内で記録された一部の地点は、食樹が伐採されるなど環境変化が甚だしく、現在の生息は全く期待できないと思われる。また食樹のカマツカは県内に広く分布しているにもかかわらず本種が生息確認されていない理由については不明である。他県においてもかつての記録地は激減しているが、その理由は不明である。

【保全上の留意点】

アカマツの生育する二次林や里山の保全などにより、少なくとも食樹であるカマツカを残存させ、生息環境を残す事が急務である。

【引用文献】

- 間野隆裕, 2005. 鈴鹿市でカバフキシタバを採集. ひらくら, 49 (4): 65.
宮野昭彦, 2011. 豊田市大平町でカバフキシタバを採集. 佳香蝶, 63 (247): 62.
間野隆裕ほか, 2016. 18 チョウ目(ガ類). 分冊その 2, IX 昆虫類. 豊田市生物調査報告書: 223-354. 豊田市.
松井弘見, 1993. 阿山郡大山田村でカバフキシタバを採集. ひらくら, 37 (6): 104.
田中 蕃ほか, 1991. 愛知県の蛾類. 愛知県の昆虫, (下): 96-416. 愛知県.
愛知県, 2002. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち—動物編—. 愛知県.

【関連文献】

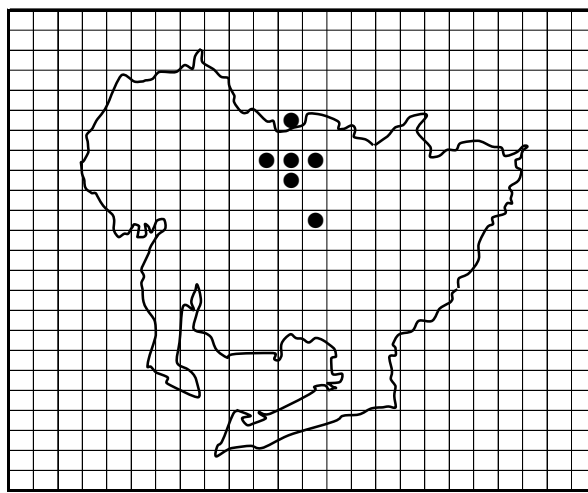
- 岸田泰典ほか, 2011. 日本産蛾類標準図鑑. II. 学習研究社.
間野隆裕, 2004. 第 5 章 昆虫 第 10 節 チョウ目(ガ類). 上野市史 自然編: 723-747, 995-1030. 上野市.
間野隆裕, 2008. 第 5 章 昆虫類 第 13 節 鈴鹿市のガ類. 鈴鹿市の自然—鈴鹿市自然環境調査報告書—: 742-792. 鈴鹿市.
間野隆裕・宮野昭彦, 2008. カバフキシタバ・シラユキコヤガ・エズスジトウの愛知県豊田市の記録. 誘蛾燈, (194): 105-107.
坂部元宏, 1966. 三重県でとれた珍しいガ類(X X III)カバフキシタバ. ひらくら, 10 (12): 104.

(間野隆裕)



豊田市木瀬町, 2008 年 7 月 24 日, 間野隆裕 採集

県内分布図



オオチャバネヨトウ *Nonagria puengeleri* (Schawerda)

【選定理由】

沼地、河川敷あるいは自然堤防の後背湿地などは、埋め立て、干拓や河川改修によって年々消失しつつある。本種はこのような場所に育成するガマに寄生して生息しているが、その生息条件は悪化している。

【形態】

開張は♂で 40mm 内外、♀で 50mm を超える。前翅は黒ずんだ暗褐色、中室下縁に沿う黒色条と中室端に 1 小白点を表す。後翅は黄白色、♀の腹部は極めて長い。



三重県磯部町恵利原, 2009年6月24日, 中山 惇 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

田原市 (田中ほか, 1991)、名古屋市 (田中ほか, 2010) から記録がある。

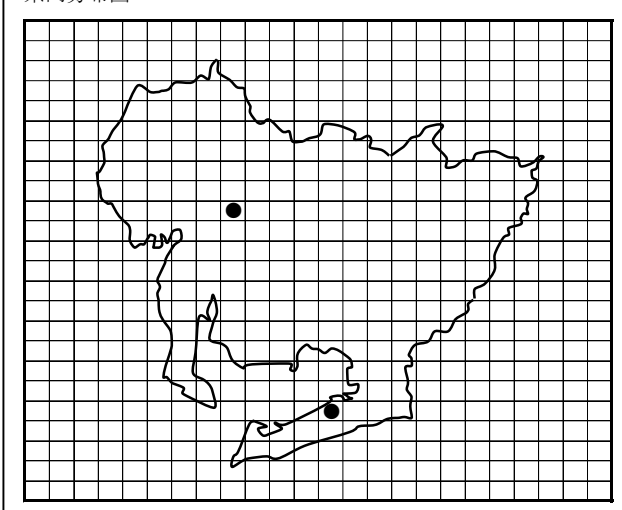
【国内の分布】

愛知県以外では、北海道、東北地方、関東地方、中部地方、滋賀県、三重県、岡山県、香川県、福岡県、対馬から確認されている。しかしいずれの道県も限られた産地からの記録である。

【世界の分布】

中国、ロシア南東部からも知られる。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

大型の湿性単子葉植物の芯喰虫 (borer) で、ガマの茎内から幼虫が得られている。全国的に産地はいずれも沼沢地であるが、一般に灯火では♂の方が採集し難い。

【現在の生息状況／減少の要因】

1980年代以降、本種の生息地とされる県内各地の沼沢地でライトを用いた多くのガ類調査が行われているが、上記の採集記録があるにすぎない。食草を含め生息条件の他、雄の走光性が弱いことが確認されない原因の一つかもしれないが、今のところ不明である。本種が生息可能な沼沢地は減少傾向にあるので楽観視はできない。

【保全上の留意点】

平野部の湿性環境が生息域であるため、今後の開発、改修に伴う生息地の減少になお一層の注意を必要とする。

【引用文献】

田中 蕃ほか, 1991. 愛知県の蛾類. 愛知県の昆虫, (下): 96-416. 愛知県.
田中多喜彦ほか, 2010. 名古屋市産昆虫目録. レッドデータブックなごや 2010-2004年版補遺-1: 270-309. 名古屋市環境局環境都市推進部生物多様性企画室, 名古屋.

【関連文献】

岸田泰典ほか, 2011. 日本産蛾類標準図鑑. II. 学習研究社.
工藤広悦, 1985. 沼沢地の蛾. 月刊むし, (174): 8-15.

(間野隆裕)

キスジウスキヨトウ *Capsula sparganii* (Esper)

【選定理由】

湿地性のガで、生息地の減少が著しい。

【形態】

開張 42mm、前翅は淡い灰褐色で黄色味を帯びる。腎状紋の下端は上方に開く黒色の半環で表される。産卵管は強壯、先端部は強く腹部に屈し、第8節からは尾方に向かう1つの突起を生じる。



弥富市鍋田, 1990年7月15日, 間野隆裕 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市、瀬戸市、田原市、日進市、弥富市(以上田中ほか, 1991)、名古屋市(田中ほか, 2010)。

【国内の分布】

日本では北海道、本州、四国、九州、対馬に記録がある。

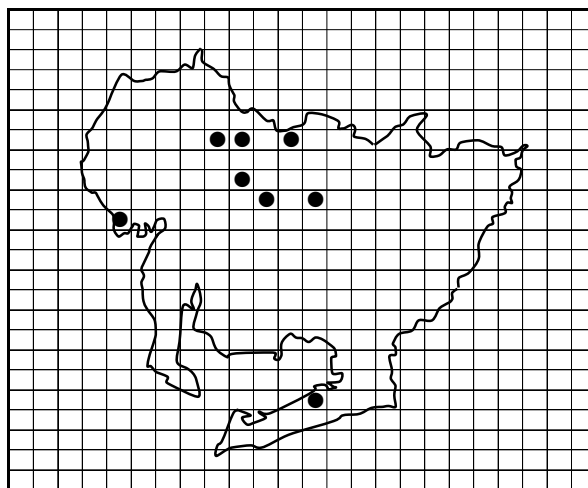
【世界の分布】

ユーラシア種で、朝鮮半島、中国、モンゴル、ロシアからヨーロッパにかけて分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

低層湿地から内陸盆地まで垂直分布は比較的広い。年1化7～9月に出現し、幼虫はガマ属やミクリ属、ヨシ、アブラガヤ等水生植物の茎中に棲みその中で越冬するという。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

平地から丘陵地の湿地で記録されているが、いずれも1980年代以前の記録で、1990年弥富市の記録が最も新しいものとなっている。かつての生息地の多くは、土地改変などによって生息できない状況となっている。

【保全上の留意点】

生息できる水生植物の繁茂する湿地の保全が急務である。

【引用文献】

田中 蕃ほか, 1991. 愛知県の蛾類. 愛知県の昆虫, (下): 96-416. 愛知県.
田中多喜彦ほか, 2010. 名古屋市産昆虫目録. レッドデータブックなごや 2010-2004年版補遺一: 270-309. 名古屋市環境局環境都市推進部生物多様性企画室, 名古屋.

【関連文献】

岸田泰典ほか, 2011. 日本産蛾類標準図鑑. II. 学習研究社.

(間野隆裕)

エチゴハガタヨトウ *Asidemia inexpecta* (Sugi)

【選定理由】

全国的に記録は少なく、限られた特異環境に生息する。県内の生息地は1ヶ所のみである。

【形態】

開張 38mm～41mm。前翅は黒褐色または茶褐色で明瞭な腎状紋を有する。後翅は褐色。

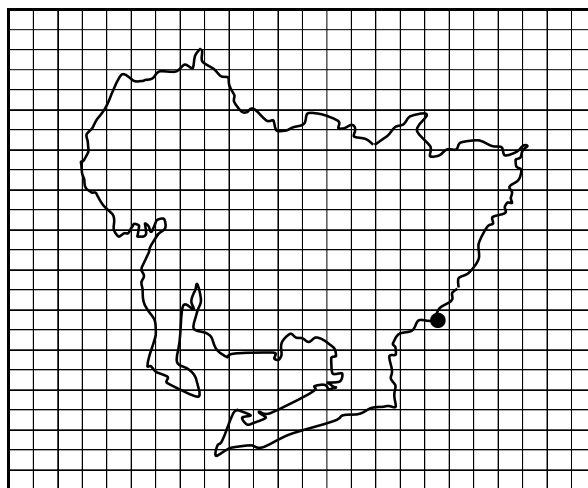


岐阜県山県市伊往戸, 1988年6月18日, 間野隆裕 採集

【分布の概要】

本州、佐渡島、四国、奄岐島、九州に分布するが、いずれも局所的で石灰岩・蛇紋岩地帯に限定されている。県内では、新城市鳳来黄柳野のツゲ自生地から記録されているだけである。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

成虫は年2回の発生で、5～6月、8～10月に出現する。卵で越冬する。幼虫は黄緑色の体色で、ツゲを摂食する。老熟すると、土中へ潜って蛹化する。第1化幼虫は同じくツゲを食するイセキリガ幼虫とほぼ同時期に見られるが、黄柳野では本種幼虫の方が多く見られるという(中村・船越, 1990)。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内の生息地は、新城市鳳来黄柳野のツゲ自生地(国指定天然記念物)1ヶ所のみ。生息場所は狭く、限定的で、存続に不安がある。

【保全上の留意点】

ツゲ自生地とその周辺環境の保全を必要とする。

【特記事項】

福岡県では準絶滅危惧種にランクされている。

【引用文献】

中村正直・船越進太郎, 1990. イセキリガの幼生期：ツゲを食する6番目の蛾の発見. 蛾類通信, (160): 162-168.

【関連文献】

大和田守・山本光人, 1983. “岩場の蛾”に関する新知見. 蛾類通信, (122): 345-352.

間野隆裕・宮崎弘規, 1988. 愛知県鳳来町で採集した蛾. 誘蛾燈, (111): 23-29.

杉 繁郎(編), 1987. 日本産蛾類生態図鑑: 207, pl.100. 講談社, 東京.

(間野隆裕)

エゾスジヨトウ *Doerriesa striata* (Staudinger)

【選定理由】

生態は必ずしも正確に把握されていないが、貧栄養湿地から得られており、生息環境が限定され危機的状況にあると考えられる。

【形態】

開張 20~26mm。前翅は灰褐色に橙褐色を混じる。各横線を欠き、翅脈に沿う暗色の条線が目立つタテスジ型の斑紋のガである。後翅は淡い灰黄色~白色を呈する。

【分布の概要】

【県内の分布】

岡崎市 (三浦, 1985; 松井, 1991)、瀬戸市 (間野, 1987)、豊田市 (田中ほか, 1991; 田中ほか, 2005; 間野・宮野, 2008)、日進市藤島町ほか (田中, 2015) で得られている。

【国内の分布】

北海道、青森県、栃木県、岐阜県 (船越, 1983・1984、尾藤ほか, 1988)、三重県 (間野, 2004)、京都府などで散発的な記録がある。

【世界の分布】

ロシア南東部に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫の食草など生態的に未知な部分が多い。採集記録などから、年2化、モウセンゴケを伴う傾斜地の貧栄養湿地が本種の生息環境と推測される。このような生息環境は、ヒメコミズメイガやシラユキコヤガの生息地に一致し、オオチャバネヨトウの生息環境よりも条件が厳しいと思われるが、現在のところ本種の方が生息確認場所は多い。成虫は6~8月に得られている。いずれの産地でも得られた個体数はわずかである。

【現在の生息状況／減少の要因】

今回の現地調査では、かつての生息地の多くが、土地改変などによって生息できない状況となっていた。生活史が未知なこともあり県内分布の動向は不明な点が多いが、生息地である湿地の減少が、もっとも危惧される。

【保全上の留意点】

平野部から丘陵に移行する地域の湿原は、都市の発展と共に非常に少なくなった。これからもさらに減少傾向にあると考えられる。何らかの保全対策が急務である。

【引用文献】

- 尾藤成人・遠藤弘志・笠井初志・藤原麒一朗, 1988. 岐阜県におけるエゾスジヨトウの記録について. 誘蛾燈, (111): 33.
船越進太郎, 1983. 岐阜県産ヤガ 21 種の追加記録. 誘蛾燈, (83): 129-133.
船越進太郎, 1984. 岐阜県美濃市休耕田の蛾類. 誘蛾燈, (97): 117-127.
間野隆裕, 1987. エゾスジヨトウ愛知県で採集. 誘蛾燈, (110): 126.
間野隆裕, 2004. 第5章 昆虫 第10節 チョウ目(ガ類). 上野市史 自然編: 723-747, 995-1030. 上野市.
間野隆裕・宮野昭彦, 2008. カバフキシタバ・シラユキコヤガ・エゾスジヨトウの愛知県豊田市の記録. 誘蛾燈, (194): 105-107.
松井直人, 1991. 岡崎市本宿町の蛾. 虫譜, 29 (2): 1-32.
三浦重光, 1985. 岡崎市の蛾類. 新編岡崎市史 14 自然編: 853-972.
田中 蕃ほか, 1991. 愛知県の蛾類. 愛知県の昆虫, (下): 96-416. 愛知県.
田中 蕃・間野隆裕・蟹江 昇・高橋匡司・岩月 学・小林広成・有田玲子・山田真澄, 2005. 豊田市自然環境基礎調査報告書: 本編Ⅶ 昆虫類: 181-323. 資料編Ⅴ昆虫類: 105-385. 豊田市.
田中多喜彦, 2015. 第8章 昆虫 第7節 チョウ目のガ類. 日進市史: 418-437. 日進市.

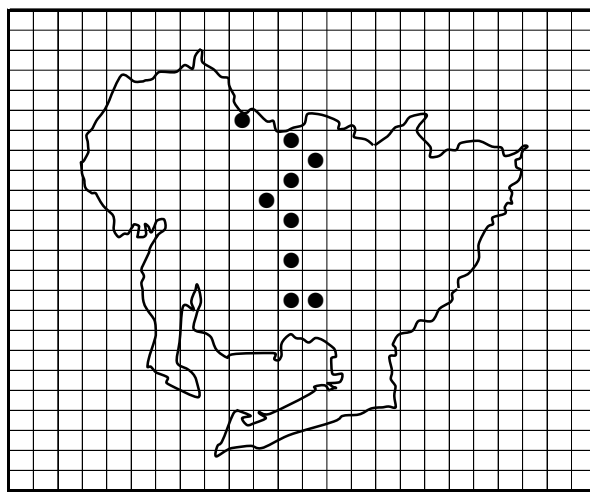
【関連文献】

- 岸田泰典ほか, 2011. 日本産蛾類標準図鑑. Ⅱ. 学習研究社.
工藤広悦, 1985. 沼沢地の蛾. 月刊むし, (174): 8-15.



豊田市下川口, 2008年6月10日, 間野隆裕 採集

県内分布図



(間野隆裕)

サヌキキリガ *Elwesia sugii* Yoshimoto

【選定理由】

照葉樹林帯のガとされるが、生息密度が低く生息地が局限されている。

【形態】

開張 31～34mm、前翅は比較的細長く外縁は波状。濃いチョコレート色を呈している。環状紋の下方に接してほぼ円形の楔状紋を表す。外縁部・外横部・内横部に横線が発達する。



豊田市猿投山, 1990年11月17日, 間野隆裕 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市猿投町(水野・間野, 1990)のほか、豊田市六所山でも生息が確認されている(田中ほか, 2005)。

【国内の分布】

愛知県以外では大阪府箕面公園、香川県象頭山、そのほか千葉県、高知県、長崎県、熊本県。東京都(神澤, 2019)でも最近記録された。

【世界の分布】

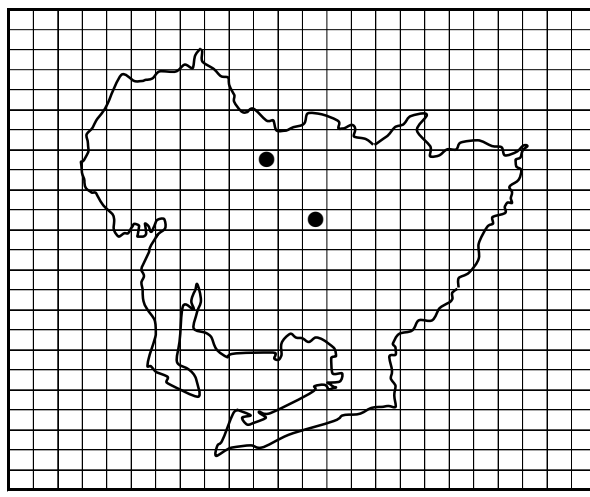
台湾、中国湖南省から記録が見られる。

【生息地の環境／生態的特性】

本種は暖温帯に生息が限定され、生息地は照葉樹林帯(常緑広葉樹林帯)と考えられる。県内の生息地も、照葉樹の二次林となっている。現段階では幼虫の食性が不明なので、その解明が待たれる。

成虫の発生時期は11月から12月に及び、日没直後から早い時間帯にライトに飛来する。しかしそれ以降は飛来しない。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

既産地でもこれまで一度に数多く得られることはなかったが、近年特に得られにくくなっており、生息密度が極めて低い状況と推察される。

【保全上の留意点】

良好な常緑広葉樹林に生息することと、県内では分布が限定されていることから、そこでの森林保全が必要不可欠な条件と考えられる。

【引用文献】

- 神澤由己, 2019. アスキキリガの東京都における採集記録. 蛾類通信, 289: 339.
水野利彦・間野隆裕, 1990. 愛知県におけるサヌキキリガの記録. 誘蛾燈, (122): 160.
田中 蕃・間野隆裕・蟹江 昇・高橋匡司・岩月 学・小林広成・有田玲子・山田真澄, 2005. 豊田市自然環境基礎調査報告書: 本編Ⅶ 昆虫類: 181-323. 資料編Ⅴ昆虫類: 105-385. 豊田市.

【関連文献】

- Haruta T., 1994. Moths of Nepal, Part3. Tinea, 14 (Supplement 1): 1-171.
岸田泰典ほか, 2011. 日本産蛾類標準図鑑. II. 学習研究社.
水野利彦, 1992. 日本の珍しい蛾 -9- サヌキキリガ. やどりが, (149): 35.

(間野隆裕)

イセキリガ *Agrochola sakabei* Sugi

【選定理由】

特異環境に生息し、県内の生息地は1ヶ所のみで、生息密度も低く、存続に不安がある。

【形態】

開張約 30～34mm。翅の地色は灰褐色で、前翅に腎状紋や暗色点を有する。♂は♀よりもやや小さく、前翅は♀に比べて幅が狭く細い。



岐阜県山県市伊往戸, 1989年11月4日, 間野隆裕 採集

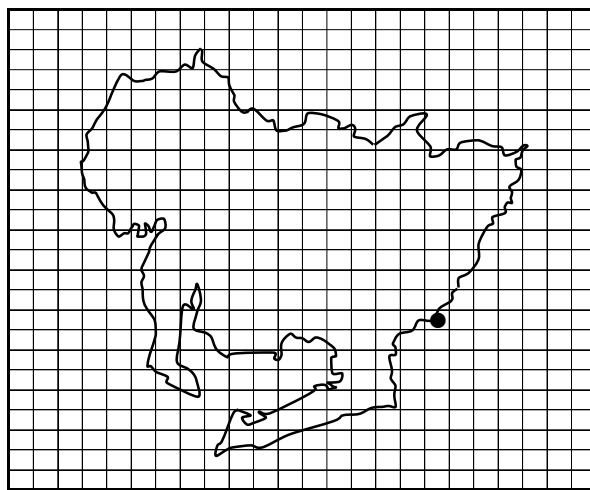
【分布の概要】

三重県大紀町 (Type locality)、いなべ市、徳島県海南町、新潟県糸魚川市、岐阜県山県市 (旧美山町)、愛知県新城市で分布が確認され、中国湖南省からも記録されている。生息地はいずれも石灰岩や蛇紋岩地帯である。

【生息地の環境／生態的特性】

成虫は年1回晩秋(10～11月)に出現する。卵越冬で、翌年4～5月に幼虫が出現する。ツゲの若芽のみを摂食する単食性である。本種幼虫は中令までは、エチゴハガタヨトウ幼虫とよく似ており、若令での識別は難しい。老熟すると、土中で幼虫態のまま越冬し、9月頃蛹化する(中村・船越, 1990)。なお、本種は自然状態ではツゲ群落固有種と考えられるが、飼育下ではセイヨウツゲでも飼育できる(西原 未発表)。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

県内の生息地は、新城市鳳来黄柳野のツゲ自生地(国指定天然記念物)1ヶ所のみ。生息場所は狭く、限定的で個体数も少ないことから、周辺環境の影響を受けやすい。

【保全上の留意点】

生息場所のツゲ自生地と周辺の生息環境を保全する必要がある。

【特記事項】

岐阜県(2010)では準絶滅危惧種にランクされている。

【引用文献】

中村正直・船越進太郎, 1990. イセキリガの幼生期: ツゲを食する6番目の蛾の発見. 蛾類通信, (160): 162-168.
岐阜県, 2010. 岐阜県の絶滅のおそれのある野生生物(動物編)改訂版-岐阜県 レッドデータブック(動物編)改訂版-岐阜県環境生活部自然環境保全課, 岐阜.

【関連文献】

岸田泰典ほか, 2011. 日本産蛾類標準図鑑. II. 学習研究社.

(間野隆裕)

アカズクビナガキバチ *Euxiphydria potanini* (Jakovlev)

【選定理由】

生息地である広葉樹林の伐採で生活の場を失いつつある。

【形態】

体長 20mm 内外。体は黒色で、頭部の上半は赤橙色で下半は黒色。脚は全体が黒色で翅は強く暗色を帯びる。

【分布の概要】

【県内の分布】

茶臼山周辺でのみ記録されている。

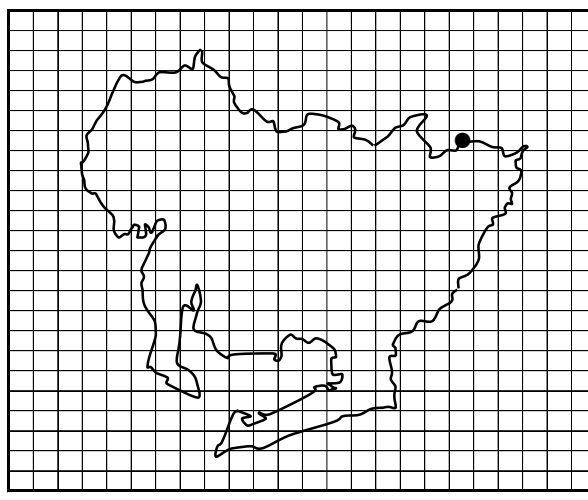
【国内の分布】

北海道、本州、四国、佐渡島。

【世界の分布】

中国、朝鮮半島、樺太、東シベリア。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

幼虫は山林内のカエデ科植物、特にイタヤカエデの材中に入って生活する。

【現在の生息状況／減少の要因】

森林の開発で、イタヤカエデなど広葉樹類が減少し、生活の場を狭められている。

【保全上の留意点】

良好で自然な山林の育成が必要である。

(2009年版を一部修正)

ウマノオバチ *Euurobracon yokahamae* (Dalla Torre)

【選定理由】

雑木林が減少し、宿主であるシロスジカミキリが少なくなったことによって生活の場を失い、元来少ない個体数が極端に少なくなった。

【形態】

体長 15～24mm。体は黄赤褐色で、腹部は暗褐色を帯びる。翅は赤黄色を帯び、外縁は広く暗褐色。前翅に 3 個、後翅に 1 個の黒紋がある。♀の産卵管は体の 7～9 倍にもなる。

【分布の概要】

【県内の分布】

全県の丘陵地の雑木林に分布していた。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

台湾。

【生息地の環境／生態的特性】

二次林の雑木林に生息しているシロスジカミキリやミヤマカミキリなどの大型のカミキリムシ科に寄生生活をしている。5 月頃に雑木林で見られる。

【現在の生息状況／減少の要因】

わずかに残された丘陵の雑木林に発生しているが、それらの林は開発の対象となりやすく、生活の場が減少している。しかし、近年農業従事者の減少から栗林が放置されることが多くなり、それらの放置林で発生が見られるようになった。

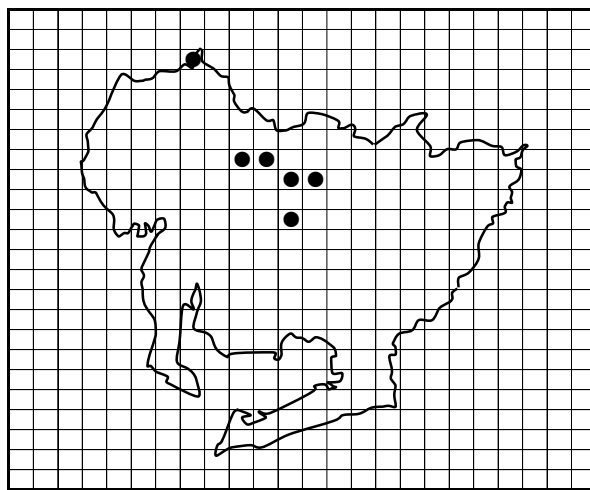
【保全上の留意点】

二次林の育成、都市郊外に残存する雑木林で現在も少数ながら発生しているので、それらの林が開発によって消えない対策が必要である。



豊田市東広瀬町, 2007 年 6 月 9 日, 間野隆裕 採集

県内分布図



(2009 年版を一部修正)

フタツバトゲセイボウ *Elampus bidens tristis* Tsuneki

【選定理由】

人工林の増加に伴い生活環境が改変されたことと、元来少ない個体数であったことが重なり著しく減少した。

【形態】

体長 7～9mm。体色は黒色から青黒色で後楯板に明瞭な突起を持つ。頭部や胸部には粗大点刻を密布する。



福岡県, 大草伸治 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

北設楽地方の山林に生息しているが、記録は少ない。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

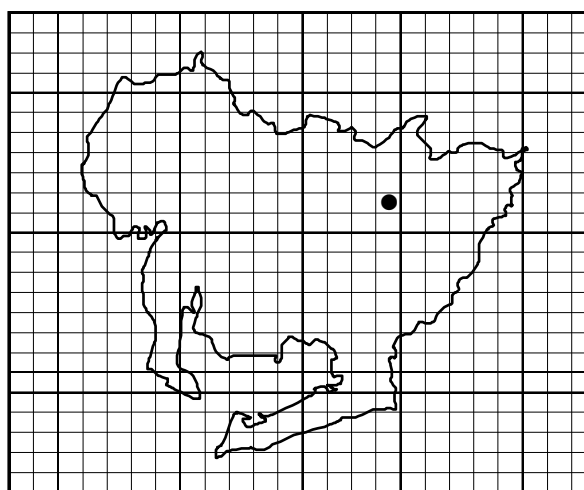
【世界の分布】

欧州。

【生息地の環境／生態的特性】

山地で低木の葉上に静止していることが多い。ヒメジョオン（キク科）などに訪花することもある。ハチ目に寄生するが寄主は未だ不明である。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

諸開発による山林の減少と植林による森林の単純化により生活の場が減少している。

【保全上の留意点】

良好な山林の育成が望まれる。

【関連文献】

豊明市史編集委員会, 2003. 豊明市史資料編補 7 自然目録, 354pp.

(2009年版を一部修正)

キゴシジガバチ *Sceliphron madraspatanum kohli* Sickmann

【選定理由】

本種は愛知県内では広く分布し、個体数も多く、家屋の塀や屋根の軒下などに泥の塊の巣や、ヤブガラシなどに訪花する個体もよく見られた。しかし、ここ数年では確認が難しくなり、近隣の他県でも個体数の減少が顕著である。



♀. 江南市草井, 2006年8月16日, 大草伸治 採集

【形態】

体長 20~28mm。体は黒色で、触角柄節下面、前胸背面の2紋、肩板、後胸背板の横斑、中胸側板上部の1紋、脚の斑紋および腹柄は黄色で細く長い。

【分布の概要】

【県内の分布】

記録として残されているものは一宮市、江南市、名古屋市、豊田市などがあるが、愛知県全域に広く分布していたと考えられる。

【国内の分布】

本州、四国、九州、対馬、琉球諸島。

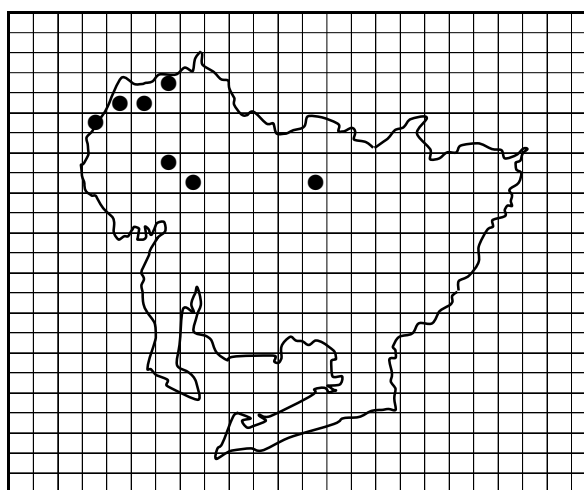
【世界の分布】

日本、中国、ベトナム。多くの別亜種が有りユーラシア大陸に広く分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

人家や社寺の壁などに泥で筒状の巣を複数作り、幼虫の餌となるナカムラオニグモやハナグモなどのクモ類を詰め、全体を半球形に塗り固める。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

同様な生態を持つ大型のアメリカジガバチ *Sceliphron caementarium* (Drury) の移入により急激に減少している。最近になって移入種の影響はやや少なくなったが、セアカゴケグモの駆除などによって他種を含む餌となるクモ類が減少し、個体数が増加しない。

【保全上の留意点】

公園などの清掃作業時に壁面などについた泥の巣を除去されることがある。また、営巣用の泥を得ることも難しくなっている。セアカゴケグモを主とする害虫駆除作業による影響も大きいと考えられる。人為環境と自然環境との良好な融和が必要である。

(大草伸治)

ニッポンハナダカバチ *Bembix niponica* F.Smith

【選定理由】

河川敷や砂浜が少なくなり、生息環境が狭められた。その上、車両が砂浜を走行するために生活できない状況となっている。

【形態】

体長 20～23mm。体は黒色で黄白色の斑紋がある。上唇が長く飛び出しているため、ハナダカバチという。



♀. 名古屋市守山区小幡, 2013年7月, 大草伸治 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

木曾川など大きな河川の河川敷や海浜。内陸でも砂地の見られる場所に見つかることもある。矢作川流域にも記録が見られる。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、屋久島。

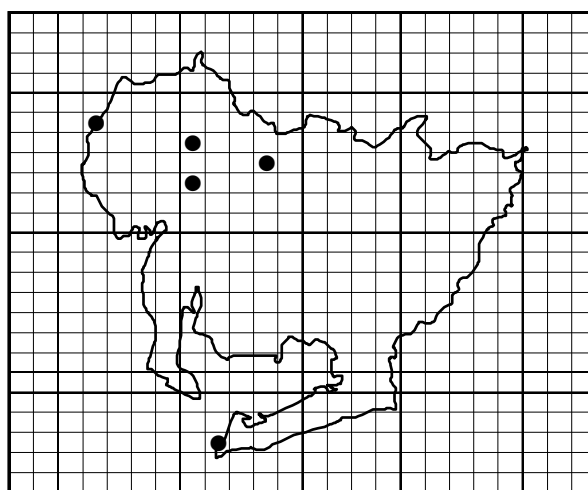
【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

河川敷や海岸などの砂地に孔を掘って営巣する。アブ・ハエなどを捕って幼虫の餌として給餌する。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

土地整備などで自然環境を保つ砂地などが減少し、生息の場所を追われている。

【保全上の留意点】

河川敷や海岸への立ち入りや過度の環境整備を控えて、自然な砂地の再生を考慮する。

(2009年版を一部修正)

ササキリギングチ *Ectemnius furuichii* (Iwata)

【選定理由】

山林の乱開発やシカ等によって林床の植物群が減少したことで生息環境が悪化し、個体数の減少を招いた。

【形態】

体長 9～14mm。体は黒色で腹部第二・三節に黄色の斑紋がある。頭部・胸部の点刻が疎らである。



♀. 瀬戸市定光寺, 2000年9月, 大草伸治 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

豊根村の茶白山、瀬戸市定光寺、豊田市猿投山などの山地において採集されている。

【国内の分布】

本州、対馬。

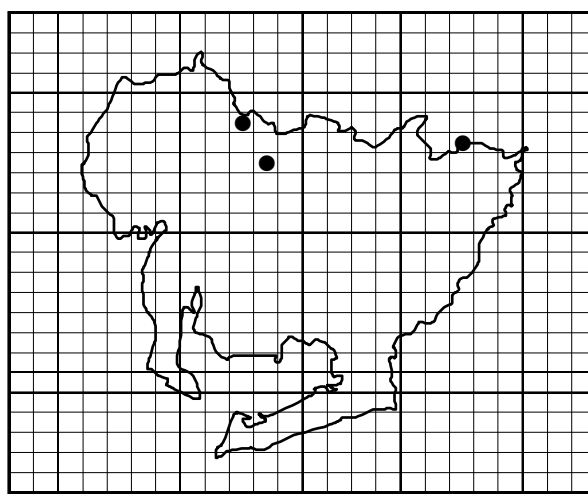
【世界の分布】

朝鮮半島。

【生息地の環境／生態的特性】

バッタ目のササキリの若齢虫を幼虫の餌として集める。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

森林の開発や植林などによる単純化、シカ等による林床植物の激減などが減少の要因だが、元来個体数も少なかった。

【保全上の留意点】

良好な林床を有する森林の保全と育成が重要である。

(2009年版を一部修正)

キヌゲハキリバチ *Megachile kobensis* Cockerell

【選定理由】

河川敷の改修によって生息場所を失いつつあり、発生個体数が少なくなった。

【形態】

体長 11mm 内外。体は黒色で全体に白色毛を密生するので、白っぽい色調となる。腹部に白色毛の帯状紋を持つ。♂の触角末端節は団扇状に広がり、他種と容易に区別できる。コウベキヌゲハキリバチとも言われる。



♂. 犬山市, 2007年8月, 大草伸治 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

木曾川、庄内川の砂地の河川敷や、西尾市、豊橋市の海浜などで記録されている。

【国内の分布】

本州、四国、九州、対馬、屋久島。

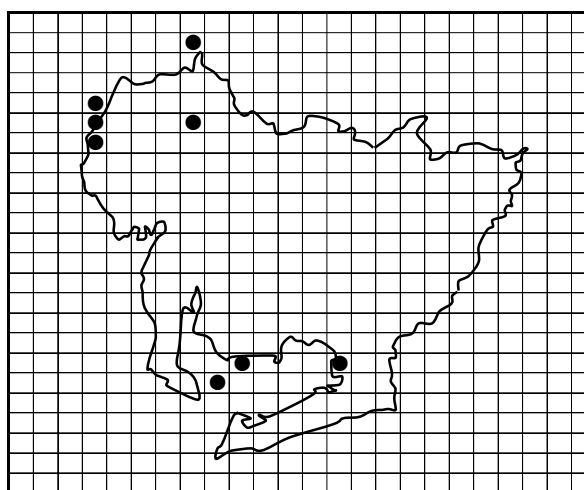
【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

砂丘の見られる海浜や、河川敷で砂地の多い地域に見られる。夏期に発生し地中に営巣する。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

河川敷内や海岸の砂地が少なくなり、生活の場を追われている。

【保全上の留意点】

河川敷や海浜の保全が必要。車両の乗り入れなどを自粛し、自然な砂浜の再生を考慮する。

(2009年版を一部修正)

【 情報不足の種 】

情報不足の種について、簡易な解説を以下に記述した。

1. エダナナフシ *Phraortes elongatus* (Thunberg)

ナナフシ目 ナナフシ科 (国: リスト外)

本種は樹上性で、♂・♀とも無翅、移動能力は乏しい。小規模開発であっても大きな影響を受けやすい。各生息地域の個体群により、「両性生殖」系と「単為生殖」系とがあること、形態的には「フアリ型」と「フナシ型」があること、さらに体の大きな個体群と小さな個体群があることなど地域ごとの変異が大きい。県内の分布地でそれぞれの特徴を有する多様な地域個体群が認められる。生物多様性に富んだ各種広葉樹を含む雑木林あるいは里山的環境を維持することで各個体群が維持されると思われる。調査を継続し、更なる情報の収集が必要である。

2. チビクチキウマ *Anoplophilus minor* Ishikawa

バッタ目 カマドウマ科 (国: リスト外)

近似種のみカワクチキウマよりやや小さく、全身が黄褐色で体全体に黒褐色斑点を散布するほか、♀の産卵管は太く短くその鋸歯は6~7つなどの点で区別できる。みカワクチキウマ同様、生息地によっては伐採やレクリエーション施設建設などのため環境が破壊されている所もあり、今後の存続が懸念されている。調査を継続し、更なる情報の収集が必要である。

3. みカワクチキウマ *Anoplophilus okadai* Ishikawa

バッタ目 カマドウマ科 (国: リスト外)

幼虫・成虫共に翅が無く、移動能力に乏しい。また林床性のため、生息地の樹林が分断されるだけで孤立化し、種の存続に悪影響がでる。近年の気温上昇に伴い、主な生息地であるブナ・ミズナラ原生林は減少傾向にあるだけでなく、登山者の増加による林床表土の乾燥や硬化も良好な環境に大きな影響をおよぼすものと懸念される。調査を継続し、更なる情報の収集が必要である。

4. ギフヒシバッタ *Tetrix gifuensis* Storozhenko, Ichikawa et Uchida

バッタ目 ヒシバッタ科 (国: リスト外)

本種は、1994年に新種記載され、豊田市猿投山産 1♂1♀がパラタイプに指定されている。瀬戸市~豊田市旭町地区の県北部を中心に記録がある。本種は、主に湿地、もしくは溪流や池などに近い低い草がまばらに生えているような湿性環境に見られる。こうした環境は、道路新設や造成のために開発されやすいだけでなく、気温上昇に伴う乾燥化が進む可能性があり、今後の動向が懸念される。調査を継続し、更なる情報の収集が必要である。

(1~4. 水野利彦)

5. タイコウチ *Laccotrephes japonensis* Scott

カメムシ目 タイコウチ科 (国: リスト外)

体長は30~38mm。体色は暗褐色で、前脚は鎌状の捕獲脚になっており、前脚腿節基部付近には顕著な突起を有する。呼吸管は長く、体長と同じぐらいかそれよりも長い。水草の多い溜め池などに生息し、河川の緩流域や休耕田の浅い水溜まりなどでも見られる。平野部を中心として減少傾向にあると考えられるが、近年の確認記録が乏しい。

6. みズカマキリ *Ranatra chinensis* Mayr

カメムシ目 タイコウチ科 (国: リスト外)

体長は40~45mm。前脚は鎌状の捕獲脚になっており、前脚腿節中央付近に顕著な突起を有する。呼吸管は長く、体長とほぼ同じである。水草の豊富な溜め池、河川の緩流域、休耕田の水溜まり、河川敷などに一時的にできた浅い水たまりなど比較的様々な止水環境に生息する。平野部を中心として減少傾向にあると考えられるが、近年の確認記録が乏しい。

7. ホッケミズムシ *Hesperocorixa distanti hokkensis* Matsumura

カメムシ目 ミズムシ科 (国: 準絶滅危惧)

体長は9.5~11mm。♂の顔面は中央部が凹み、前脚附節は基部から先端部にかけて幅広くなる。前胸背板着色部の黒色横帯は、通常8~9本である。抽水植物が繁茂する水質良好な溜め池やワンドなどに生息する。名義タイプ亜種のミズムシ *H. d. distanti* (Kirkaldy) は、北海道と本州(青森県)に分布する。県内における本種の記録は、同科他種と混同されている可能性があり、確実な生息場所の記録は少ない。評価するだけの情報が不足している。

8. オヨギカタビロアメンボ *Xiphovelia japonica* Esaki et Miyamoto

カメムシ目 カタビロアメンボ科 (国: 準絶滅危惧)

体長は約2mm。体色は黒色で♂は小判形、♀は菱形の体型を呈する。通常は無翅型であるが、稀に有翅型が出現する。主として川幅の広い大河川の中流域から上流域にかけて分布し、ツルヨ

シなどが繁茂する川岸の緩流域に生息するが、河川の流入などがある溜め池に生息する場合もある。水面上を高速で疾走する。矢作川とその近隣の溜め池のみから確認されており、評価するだけの情報が不足している。

9. ニシキキンカメムシ *Poecilocoris splendidulus* Esaki

カメムシ目 キンカメムシ科 (国：リスト外)

体長は16~20mm。体色は金緑色で紫紅色の帯状の条斑が入っており、キンカメムシ科のなかでも特に美しい種であるが、同科の他種同様に死後は変色する。県内では主に寄主植物であるツゲ(ツゲ科)が自生する新城市東部に生息する。7月頃にツゲの果実を吸汁する幼虫が多数観察される。県内における本種の生息場所は、限定的であるため、元々多くみられる種でないが、評価するだけの情報が不足している。

(5~9. 澤田宗一郎)

10. クロサワツブミズムシ *Satonius kurosawai* (M.Satô)

コウチュウ目 ツブミズムシ科 (国：リスト外)

学術上の貴重種であるが、微小なことから発見しにくく、全国的にも生息地は数箇所知られているだけである。愛知県内において確認されている生息地も1ヶ所のみで、その生息地は林道に面しているため、林道の整備や生息地の乾燥化によって安易に消滅する可能性があるが、県内の分布状況については不十分で、増減を判断するだけの十分な情報が得られていない。

11. チイワメクラチビゴミムシ *Trechiana mammalis* S.Uéno

コウチュウ目 オサムシ科 (国：リスト外)

乳岩峡河童洞から発見され、1987年に新種として記載された。記載時に使用された標本(1982~1986年に採集された1♂1♀)以外には知られておらず、その後決して少なくない調査が試みられているが、生息に関する追加情報は得られていないため、現状での増減は判断できない。詳細な生息状況は不明であるが、本県での絶滅は種の絶滅に直結する。

12. クロエンマムシ *Hister concolor* Lewis

コウチュウ目 エンマムシ科 (国：リスト外)

名古屋市からの古い記録がある。牛糞などに発生するウジ類を捕食するが、県内では近年発見が困難になっている。衛生環境の改善にともない、種の存続への圧迫が強まっていると考えられるが、十分な情報が得られていないことから、現状での増減は判断できない。

13. エンマムシ *Merohister jekeli* (Marseul)

コウチュウ目 エンマムシ科 (国：リスト外)

豊田市から記録がある。クロエンマムシ同様、ウジ類を捕食するが、近年の牧場の閉鎖や衛生環境の整備、河川改修などにより、動物の糞や遺体にわくウジ類を捕食する大型のエンマムシ類は発見が困難になっており、減少しているものと推測されるが、十分な情報が得られていないことから、現状での増減は判断できない。

14. トラハナムグリ *Trichius japonicus* Janson

コウチュウ目 コガネムシ科 (国：リスト外)

生態が良く解っていない。県内では豊根村(旧富山村)からの記録が2例あるが、十分な情報が得られていないことから、現状での増減は判断できない。

15. ベニバハナカミキリ *Paranaspia anaspidoidea* (Bates)

コウチュウ目 カミキリムシ科 (国：リスト外)

ケヤキなどの大木にできた樹洞に生活史の大半を依存する種で、生存にはそのようなケヤキ類の大木の存在が不可欠である。県内では知多半島、豊田市足助町で記録がある。本種の生活史が解明されたのは、近年のことであり、今後詳しい分布ならびにその生息実態についての詳しい調査の余地があることから「情報不足」としたが、ケヤキなどの大木の少ない本県では、その生息基盤が脆弱であることは安易に予想され、実際には高いランクで絶滅危惧種となっている可能性がある。

16. ヒメアカハナカミキリ *Brachyleptura pyrrha* (Bates)

コウチュウ目 カミキリムシ科 (国：リスト外)

1980年代まで山地に普通の種として知られていたが、全国的に近年の生息情報が顕著に乏しくなっている。県内では標高的にもともと本種の分布可能域が限られ、個体数も多いものではなかった。詳しい生息実態が不明であることから「情報不足」としたが、近年の生息情報がもたらされておらず、実際にはもっと高いランクで絶滅危惧種となっている可能性がある。

(10~16. 長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

17. キオビクビボソハムシ *Lama delicatula* Baly
 コウチュウ目 ハムシ科 (国：リスト外)
 ツクサの生育する河川の河原や公園などに生息しているが、県内の生息地で確認される個体数は年々減少している。生息基盤は人為的影響を受けやすく脆弱であり、今後、高いランクへ移行する可能性があるが、十分な情報が得られていないことから「情報不足」とした。
18. ヒメカバノキハムシ *Syneta brevitibialis* Kimoto
 コウチュウ目 ハムシ科 (国：リスト外)
 ブナ帯に生息する種で、県内から確認されているのは奥三河山地において1ヶ所のみで、県内には分布可能域が限られるため生息基盤が脆弱である。生態について不明な点が多く、増減について判断するだけの十分な情報が得られていないことから「情報不足」とした。
19. チビコバンゾウムシ *Miarus vestitus* Roelofs
 コウチュウ目 ゾウムシ科 (国：リスト外)
 ツリガネニンジンに寄生する種として知られている。ツリガネニンジンは県内各所で散見されるが、現在までに県内で知られる生息地は1カ所のみで、田畑周辺の草刈りなど営農や里山管理等の変化が本種を減少させている可能性があるが、増減について判断するだけの十分な情報が得られていないことから「情報不足」とした。
20. カギアシゾウムシ *Bagous bipunctatus* (Kono)
 コウチュウ目 ゾウムシ科 (国：リスト外)
 県内からは、常滑市、名古屋市、岡崎市、弥富市(旧弥富町)、豊田市から記録がある。水辺に生息する種で、近年の水辺環境の悪化から生息状況が悪化している可能性があるが、生態について不明な点が多く、増減について判断するだけの十分な情報が得られていない。
21. コカギアシゾウムシ *Bagous fractus* O'breien et Morimoto
 コウチュウ目 ゾウムシ科 (国：リスト外)
 県内からは、豊田市からの記録があるのみ。水辺に生息する種で、近年の水辺環境の悪化から生息状況が悪化している可能性があるが、生態について不明な点が多く、増減について判断するだけの十分な情報が得られていない。
22. フタホシカギアシゾウムシ *Bagous kagiashi* Chujo et Morimoto
 コウチュウ目 ゾウムシ科 (国：リスト外)
 県内からは、常滑市からの記録があるのみ。水辺に生息する種で、近年の水辺環境の悪化から生息状況が悪化している可能性があるが、生態について不明な点が多く、増減について判断するだけの十分な情報が得られていない。
23. ヤヤコブカギアシゾウムシ *Bagous spicutatus* O'breien et Morimoto
 コウチュウ目 ゾウムシ科 (国：リスト外)
 フタホシカギアシゾウムシ同様、常滑市からの記録があるのみ。水辺に生息する種で、近年の水辺環境の悪化から生息状況が悪化している可能性があるが、生態について不明な点が多く、増減について判断するだけの十分な情報が得られていない。
- (17~23. 2009年版を一部修正)
24. トワダオオカ *Toxorhynchites towadensis* (Matsumura)
 ハエ目 カ科 (国：リスト外)
 体長10mm内外。成虫は青藍色の光沢を持つ大型のカで、愛知県では北設地方の森林から記録されている。幼虫は主に樹洞に溜まった水で生育するため、森林の伐採と植林化により広葉樹の大木が残る樹林が局限され、本種の確認例が少なくなったと考えられるが、評価するだけの情報が不足している。
- (24. 廣永輝彦)
25. ツマジロウラジャノメ *Lasiommata deidamia interrupta* (Fruhstorfer)
 チョウ目 タテハチョウ科 (国：リスト外)
 1981年7月5日北設楽郡富山村で岡本宏康氏が採集した1♀の標本が確認された。今後の調査が必要と考えられる。
26. キマダラモドキ *Kirinia fentoni* (Butler)
 チョウ目 タテハチョウ科 (国：準絶滅危惧)
 1978年に北設楽郡稲武町から目撃記録がある。また、1970年7月19日東加茂郡太田(旧旭町)で船越俊平氏が採集した1♀の標本が確認された。今後の調査が必要と考えられる。
- (25~26. 江田信豊・高橋匡司・魚住泰弘)

27. エンスイミズメイガ

Eristena argentata Yoshiyasu

チョウ目 ツトガ科 (国: リスト外)

幼虫は汽水域の水中で食草である蘚類をつづつて巣を作り、その中で生活する。県内では木曾川と庄内川の汽水域でしか見つかっていない。かつては河川の汽水域付近に広く分布していた可能性があるが、評価するだけの情報が不足している。本種の保全にあたっては、河川及び沿岸域の水質等環境保全が最善の策と考えられる。



弥富市, 1987年6月16日, 間野隆裕 採集撮影

28. マダラウスズミケンモン

Acronicta subornata (Leech)

チョウ目 ヤガ科 (国: リスト外)

全国的に記録が少なく、県内ではわずかな記録があるのみで、豊田市や名古屋市における記録がみられるだけである。評価するだけの情報が不足している。



奈良県, 1975年6月26日, 田中博 採集
(間野隆裕 撮影)

29. ウスベニキョトウ

Mythimna pudorina (Denis et Shiffermüller)

チョウ目 ヤガ科 (国: リスト外)

低湿地のガで、県内では数カ所での記録があるものの開発などにより生息地が著しく減少している。産地では個体数も比較的多いが、局地的で追加産地はこれまでのところ発見されていないため、今後の調査が望まれる。低湿地やヨシ原の減少を食い止めると共にその動向に注意を払う必要がある。



弥富市, 1989年9月7日, 間野隆裕 採集

(27~29. 間野隆裕)

30. ホソツヤアリバチ *Methocha yasumatsui* Iwata

ハチ目 コツチバチ科 (国: リスト外)

♀はコハンミョウの幼虫の巣穴に潜り込んで幼虫の体に産卵する。幼虫で越冬し成虫は6~9月に得られる。体長は5~6mmでハンミョウが営巣する周辺のスウィーピングなどで採集される。評価するだけの情報が不足している。



新城市, 2014年8月16日, 中島 採集

(大草伸治 撮影)

(30. 2009年版を一部修正)

【 国リストの種 】

「国リスト」の種について、対象種が愛知県では絶滅危惧種（準絶滅危惧種、情報不足種を含む）と判断されなかった理由を以下に記述した。

1. **アオハダトンボ** *Calopteryx japonica* Selys
トンボ目 カワトンボ科（国：準絶滅危惧）
矢作川や豊川などの中流域には支流も含めて多くの個体が現存する。
2. **マダラヤンマ** *Aeschna mixta soneharai* Asahina
トンボ目 ヤンマ科（国：準絶滅危惧）
愛知県に定着していた事実はなく、他県から飛来した1例の記録があるに過ぎない。
3. **タバサナエ** *Trigomphus citimus* (Needham)
トンボ目 サナエトンボ科（国：準絶滅危惧）
名古屋市東部の丘陵地から低山地に広く現存し、特に旧藤岡町周辺は日本有数の産地の一つと思われる。
(1~3. 吉田雅澄)
4. **コオイムシ** *Appasus japonicus* Vuillefroy
カメムシ目 コオイムシ科（国：準絶滅危惧）
体長は17~20mm。水草の多い溜め池、水田地帯の素堀の水路、休耕田や湿地の浅い水溜まり、河川のワンドなどに生息する。県内では前述した様々な環境で見られ、比較的産地・個体数は多い。
5. **ミヤケミズムシ** *Xenocorixa vittipennis* (Horváth)
カメムシ目 ミズムシ科（国：準絶滅危惧）
体長は7~9mm。体は幅広く厚みがある。♂前脚附節のペグ列は、中央部付近先端にかけてのみ並ぶ。水草の多い溜め池、河川のワンドなどに生息する。県内では沿岸部低地の溜め池やワンドなどに生息し、産地での個体数は多い。
6. **アシナガナガカメムシ** *Poentius lineatus* Stål
カメムシ目 ヒョウタンナガカメムシ科（国：準絶滅危惧）
体長は4.5~6.5mm。体は黒色で革質部の基半部は黄白色となり、その先端付近に横長の白色紋をもつ。イネ科やカヤツリグサ科など植生のある砂浜に生息し、砂地を素早く走り回る。県内では三河湾沿岸の海浜環境から確認され、産地での個体数は多い。近年県内から確認された。
7. **シロヘリツチカメムシ** *Canthophorus niveimarginatus* Scott
カメムシ目 ツチカメムシ科（国：準絶滅危惧）
体長は6~8mm。体色は光沢のある藍色で、側縁が細く白色に縁取られる。本種は、カナビキソウ（ビャクダン科）を寄主植物としており、その生育環境である河川敷の堤防などの適度に維持管理された草原環境に依存する。雌成虫は卵塊を保護する習性を持つ。県内の複数箇所から記録がある。
(4~7. 澤田宗一郎)
8. **ハイイロボクトウ** *Pharagmataecia castaneae* (Hübner)
チョウ目 ボクトウガ科（国：準絶滅危惧）
幼虫はヨシに寄生する湿地性の種で、県内では平地から丘陵地の湿地では比較的よく得られる。今後開発などによる生息環境の変化によっては注意を要する。
9. **オナガミズアオ** *Actias gnoma* (Butler)
チョウ目 ヤママユガ科（国：準絶滅危惧）
幼虫はハンノキの仲間に寄生し、局地的ながらも、県内では名古屋市をはじめとして、記録は多い。今後開発などによる植生の変化によっては注意を要する。
10. **キシタアツバ** *Hypena claripennis* (Butler)
チョウ目 ヤガ科（国：準絶滅危惧）
幼虫はヤブマオに寄生し路傍に生息する種で、県内では比較的平地に見られる。
11. **カギモンハナオイアツバ** *Cidariplura signata* (Butler)
チョウ目 ヤガ科（国：準絶滅危惧）
水辺周辺で記録のある種で、これまでも県内では限られたところに記録がある。今後生息環境の悪化に伴って動向を注意する必要がある。

12. **ギンモンアカヨトウ** *Plusilla rosalia* Staudinger
 チョウ目 ヤガ科 (国：絶滅危惧Ⅱ類)
 ヤナギタデなどを食し、水辺周辺で記録のある種で、これまでも県内では尾張西部丘陵地など低湿地帯等限られたところに記録が多い。今後生息環境の悪化に伴って動向を注意する必要がある。
13. **ウスミモンキリガ** *Eupsilia contracta* (Butler)
 チョウ目 ヤガ科 (国：準絶滅危惧)
 幼虫はハンノキの仲間に寄生し、局地的ながらも、県内では名古屋市をはじめとして、記録は多い。今後開発などによる植生の変化によっては注意を要する。
 (8~13. 間野隆裕)
14. **オオセイボウ** *Stilbum cyanurum* (Foerster)
 ハチ目 セイボウ科 (国：情報不足)
 県内で普通に見られるスズバチの寄生蜂で、まだ個体数は多く見られる。環境省リストでは本土亜種。
15. **アオスジクモバチ** *Paracyphononyx alienus* (Smith)
 ハチ目 クモバチ科 (国：情報不足)
 河川敷の草むらなどに多く見られ、県内での生息数が多い。環境省リストではアオスジベッコウ。
16. **ケブカツヤオオアリ** *Camponotus nipponensis* Santschi
 ハチ目 アリ科 (国：情報不足)
 愛知県内でも少し自然が残った環境に広く分布している。
17. **トゲアリ** *Polyrhachis lamellidens* F. Smith
 ハチ目 アリ科 (国：絶滅危惧Ⅱ類)
 クヌギなどの林にはまだ多く見られる。県内での生息地は多い。
18. **キオビホオナガスズメバチ** *Dolichovespula media sugare* Ishikawa
 ハチ目 スズメバチ科 (国：情報不足)
 やや山地性で県内では三河地方にまだ多く見られる。環境省リストでは本州亜種。
19. **ヤマトアシナガバチ** *Polistes japonicus japonicus* Saussre
 ハチ目 スズメバチ科 (国：情報不足)
 20頭ほどの小さな集団を作る。林縁などに多く見られ県内での生息数が多い。
20. **モンズズメバチ** *Vespa crabro flavofasciata* Cameron
 ハチ目 スズメバチ科 (国：情報不足)
 アシナガバチを襲うなど人家周辺に多く、駆除の対象となることも多いが、まだ県内の生息数は多い。
21. **カラトイスカバチ** *Passaloecus koreanus* Tsuneki
 ハチ目 ギングチバチ科 (国：情報不足)
 古い木材の甲虫などの脱出口に営巣する。神社周辺にまだ多く見られるが、木造建築の減少が影響している。
22. **マイマイツツハナバチ** *Osmia orientalis* Benoist
 ハチ目 ミツバチ科 (国：情報不足)
 カタツムリの殻に営巣し、カタツムリの減少に影響されるが、まだ県内での生息数は多い。
23. **ルリモンハナバチ** *Thyreus decorus* (Smith)
 ハチ目 ミツバチ科 (国：情報不足)
 スジボソフトハナバチに寄生し、個体数が少ないが県内各地で普通に確認される。
 (14~23. 大草伸治)